

東京国際大学論叢

人間科学・複合領域研究

第3号

研究ノート

- Moodle を用いたループリック評価の試み…………… 河村 一樹…………… 1
——初年次演習での実践——
- 卒業要件の確認スキームと Java アプリの構築…………… 張本 浩…………… 21
- ローマへー「聖セバスチャン」のアイコングラフィー …… 安岡 真…………… 57
——三島事件の心的機序の研究③——
-

2 0 1 8

東京国際大学論叢

人間科学・複合領域研究

第3号

研究ノート

Moodle を用いたルーブリック評価の試み ——初年次演習での実践——

河 村 一 樹

The Attempt of Rubric Evaluation by Using Moodle — Practice for Exercises in a First-year University Seminar —

KAWAMURA, Kazuki

Abstract

Educational evaluation is to make a judgment about the quality, importance, and value of education in general. The contents and procedures of educational evaluation have changed over time. In this paper, I will discuss the transition of educational evaluation and how it has unfolded. One of the methods of educational evaluation is the use of rubrics. Rubrics are suitable for evaluating learners' performance. Therefore, I will present the definition and structure of rubrics and how to create them, while introducing e-rubrics. Next, I will discuss Moodle, which is LMS, and explain its use for exercises in a seminar for first-year university students. Specifically, I will consider rubric evaluation by using the functions of [feedback], [assignment], [quiz], [workshop] of Moodle.

Key-word: Rubric, Moodle, First-year university seminar, Academic skills, Educational evaluation

目 次

- はじめに
1. 指導要録から見た教育評価の変遷

- 1.1 絶対評価から相対評価へ
 - 1.2 相対評価の見直しと廃止
 2. 教育評価のあり方
 - 2.1 評価規準と評価基準
 - 2.2 ルーブリック評価
 3. Moodleによるルーブリック評価
 - 3.1 初年次演習の概要
 - 3.2 [フィードバック]を用いたルーブリック評価
 - 3.3 [課題]を用いたルーブリック評価
 - 3.4 [小テスト]を用いたルーブリック評価
 - 3.5 [ワークショップ]を用いたルーブリック評価
- おわりに

はじめに

教育評価とは、教育全般に関わる評価を行うことである。具体的には、児童・生徒・学生の成績評価、授業評価、カリキュラム評価、コース評価、学校評価など多岐に渡る。その教育評価は、時代の流れとともに変遷してきていることから、まずは教育評価の変遷について取り上げる。

次に、教育評価の方法には、絶対評価・相対評価、段階別評価・観点別評価、診断的評価・形成的評価・総括的評価などがある。評価の手法には、テスト法、レポート法、観察法、面接法、アンケート法、作品法、ポートフォリオ法、自己評価法、相互評価法、そして、ルーブリック法がある。これらの中のルーブリック法は、パフォーマンス（制作、発表、討論、作業など）の評価に適しているといえる。そこで、教育評価のあり方として、評価基準を取り入れたルーブリック評価とは如何なるものかについて、いくつかの観点（ルーブリックの必要性、ルーブリックの構成、ルーブリックの作成手順、電子化されたルーブリックとする）から取り上げる。

その上で、本学共通の必修科目である「初年次演習」において、ルーブリック評価を試みた。ルーブリック評価では、当初、表計算ソフトを用いたが、作成や集計に手間がかかるので、Moodleによるeルーブリックの利用を試みた。具体的には、[フィードバック]を用いたルーブリック評価、[課題]を用いたルーブリック評価、[小テスト]を用いたルーブリック評価、そして、[ワークショップ]を用いたルーブリック評価の実施方法について報告する。また、[ワークショップ]を用いることで、教員だけの評価でなく、学生同士による相互評価が可能になることを示す。

1. 指導要録から見た教育評価の変遷

指導要録とは、教育評価に関する公的な文書（戦前は、学籍簿と呼ばれていた）であり、教育指導と教育評価の一体化を目指したものである。「学籍簿」と呼ばれていた頃は、学年末に記入する以外は保管されていた事務文書としてしか扱われなかった。その後、「指導要録」と改名されたことによって、児童生徒の発達過程を常時記録することで教育指導に役立てるための文書という位置付けに変わってきたといえる。

その指導要録の移り変わりを概観することで、教育評価がどのように変容してきたかがわかる。それは、「絶対評価」から「相対評価」へ、そして「目標に準拠した評価」という潮流に相当するといえる。¹⁾²⁾

1.1 絶対評価から相対評価へ

戦前の我が国の教育現場では、「絶対評価」が主流であった。これは、教師の主観的な判断にもとづいて教育評価を行うものである。絶対評価を推し進めていた背景には、富国強兵政策や道徳重視の教育のもとで、教師は絶対的な権威を持った存在であることから、子供も親も、教師のつけた評価を素直に受け入れていたことがあげられる。それとともに、子供の成績を「甲」「乙」「丙」という評点でつける際の評価基準があいまいであったことから教師の主観に頼らざるを得なかったこと、教育目標を教育評価の基準にするという見方がなかったこともあげられる。さらには、当時、学業成績をつける際に、子供の学力よりも人物像や態度の評価の方を優先していたことから、教師の主観が重視されることになった。

しかし、戦後になって、米国での教育測定運動が紹介され、教育の客観性や信頼性が指摘され始めるようになった。その結果、「相対評価」が注目されることになった。

1948年の学籍簿（翌年から指導要録に改名）において、評価の客観性を保証するために相対評価が導入された。具体的には、正規分布（ガウス曲線）を基準にして、配分率（5段階評価の場合、上位の7%が「5」、次の24%が「4」、真ん中の38%が「3」、その下の24%が「2」、さらにその下の7%が「1」）に従って評点をつけるというものである。これによって、教師の主観に依存することなく、定量的な尺度基準によって評点をつけることができるという有効性が評価され定着していったわけである。

1955年の指導要録からは、学習指導要領の教科目標および学年目標に合わせた5段階評価が各教科別の評定に導入された。

1.2 相対評価の見直しと廃止

相対評価が教育現場で定着するにしたがい、新たな問題が浮き彫りになってきた。具体的には、1) 下位7%に「1」をつけるということは、必ずできない児童生徒がいるという非教育的な観点に立たなければならないこと、2) 成績の比率があらかじめ決まっているため、児童生徒の間で排他的な競争を生み出すこと、3) 相対評価は、集団の中での相対的な位置づけしか明らかにならず、児童生徒の学力の実態を表すことにはならないこと、4) 教育活動そのものを評価することができないこと、といった問題が挙げられる。

このようなことから、1961年の指導要録では学習指導要領の教科目標および学年目標に合わせた5段階相対評価を行うこと、1971年の指導要録では絶対評価を加味した相対評価の実施、および、相対評価としての5段階評価の配分比率は正規分布ではなくてもよいこと、段階毎に一定の比率によって評価を機械的に割り振ることがないように留意すること、といった指針が次々と提示された。

1970年代半ばには、相対評価に対する批判をもとに「到達度評価」が生み出された。これは、あらかじめ到達目標を定めておき、それにどれだけ達したかどうかで子供を評価するというものである。到達度評価では、学力を保障するという前提にもとづき、到達目標に達しない子供にわかるように教え導くことで目標達成をクリアさせることになる。その際の到達目標は、実体を示すものでなければならず、それに沿った指導方略を展開する必要がある。

到達度評価は、診断的評価・形成的評価・総括的評価から構成される。診断的評価は、教育対象となる単元について、あらかじめ子供が獲得している知識や経験を評定することである。形成的評価は、単元を学んでいる間に、個々の子供がどれだけ到達目標（基礎学力の取得状況を判定するための規準）に達しているかを判定することである。総括的評価は、単元終了後に到達目標

全体を評価して成績をつけることである。このことから、形成的評価は、到達度評価において最も重要となる評価といえるとともに、これによって指導と評価の一体化を実現したことになる。

1980年の指導要録では、「観点別学習状況の評価」が導入された。これによって、それまでは主観的な評価とみなされていた「関心・態度」といった評価項目が新たに追加されたわけである。ただし、この段階では、何を「関心」とし、何を「態度」とするのかがはっきりしなかったこともあり、現場ではあまり重視されなかった。

1991年の指導要録では、観点別学習状況の評価において、1) 関心・意欲・態度、2) 思考・判断、3) 技能・表現、4) 知識・理解が取り上げられたことにより、1) の重要度合がより増したようになった。それまでは、どちらかというとな筆記試験による4) が重視されていたが、それとは異なる学力観を打ち出すために1) が最初に配置されたといえる。ただし、1) に対して、主観ではなく客観性に準拠した評価とするためにはどうすればよいのかという問題（評価の公平性と公正性）は残ったままであった。

1998年の学習指導要領改訂に伴い、2001年に指導要録の改善に関する通知が出され、それまでの相対評価に代わるものとしての「目標に準拠した評価」に関してより一層の重視策が打ち出された。目標に準拠した評価とは、到達度評価における到達目標（行動目標）が狭く限定されるという課題を克服するために生み出されたといえる。基礎学力だけでなく、より幅広く、かつ、発展的な学力についても目標を設定して評価を行うというものである。

2010年の指導要録では、観点別学習状況の評価と総合的な評価を、学習指導要領で定めるところの目標に準拠した評価として実施することとしている。その観点別学習状況の評価において、1) 関心・意欲・態度、2) 思考・判断・表現、3) 技能、4) 知識・理解と、表現の構成要素が変更された。これらを、学力の3要素である i) 基礎的・基本的な知識技能、ii) 思考力・判断力・表現力、iii) 主体的に学習に取り組む態度（学習意欲）と関連づけると、3) および4) が i) を、2) が ii) を、1) が iii) を、それぞれ踏まえているとしている。以上によって、相対評価を事実上廃止したことになる。

2. 教育評価のあり方

目標に準拠した評価が普及するに従い、新たな問題が顕著になってきた。具体的には、教育目標を基準とする評価であるが、「評価きじゅん」となる教育目標を設定する際に、その「きじゅん」の扱いについて、「規準」と「基準」という用語をどのように使い分けるかということについて、現場で混乱を招いたことである。また、その中で、ルーブリックにおける教育評価が新たに見出しされるようになったという経緯がある。

2.1 評価規準と評価基準

そもそも「基準」と「規準」を広辞苑で調べてみると、

『【基準】はものごとの基礎となる標準である。比較して考えるためのよりどころ。【規準】は規範・標準とするもの。』

と記載されている。³⁾ これより、意味的には、ほぼ同義語となっている。

これに対して、橋本氏は、教育評価において「評価規準」と「評価基準」は異なるものと認識すべきであると提唱した。⁴⁾ それによると、評価規準（英語では、*criterion*）は教育評価を目標に準拠して行うという立場を表明するものであり、評価基準（英語では、*standards, scales*,

description) は学生が学習において到達したレベルをより具体的に・量的に・段階的に示したものであるとしている。

つまり、評価規準は質的な評価の観点を示しており、評価基準はその観点をどの程度達成できているかを示すものと言うことができる。具体的には、ある目標規準に対して、学生がこれこれ云々の基準を達成できていればレベル5、これこれ云々の基準を達成できていればレベル4、…、何も達成できていなければレベル0ということを明らかにすることで、教員が学生個々の目標に対する達成度について掌握することを意味している。

現在の「目標に準拠した評価」を実践する立場にある各教育現場において、どのように「規準」と「基準」を使い分けていくのかという課題について示唆を与えてくれるものとして、ルーブリックがあげられるとあってよい。

2.2 ルーブリック評価

教育評価の方法には、テスト法、レポート法、観察法、質問紙（アンケート調査）法、自己評価法、相互評価法、作品法、ポートフォリオ法などがある。⁵⁾

ルーブリック評価は、テスト法および質問紙法以外における観点別到達目標としての「思考・判断」「関心・意欲」「態度」「技能・表現」を網羅した評価に適しているといえ、いずれも実技を主体としたパフォーマンス課題で求められる質的あるいは定性的な到達目標に対応している。

ルーブリックの定義としては、濱名氏が次のように述べている。⁶⁾

『「目標に準拠した評価」のための「基準」つくりの方法論であり、学生が何を学習するのかを示す評価規準と学生が学習到達しているレベルを示す具体的な評価基準をマトリクス形式で示す評価指標である。』

まさに、評価規準と評価基準が使い分けられた文書となっている点に注目したい。

以上をもとに、ここでは、ルーブリックによる評価について取り上げる。⁷⁾

(1) ルーブリックの必要性

ルーブリックの評価対象となる課題は、ノート、レポート、書評、実験、実技、グループワーク、プレゼンテーション、ポートフォリオなど広範に及ぶ。その課題については、いくつかの構成要素に分割し、個々の要素毎に評価基準となるレベルを詳細に記述することによって評価を行うことになる。

ルーブリックの必要性が高まる要因としては、1) 同じようなレポート内容に対して、同じようなコメントを記載しなければならず、すぐく手間がかかる、2) 手書きでコメントを書くとき学生から字が読めないというクレームが入ったりする、3) 最初のレポートと最後のレポートでは自分（教員）の評価基準が変わってしまう、4) 同じ授業を他の教員がやっている場合、お互いに評価基準が異なってくる、5) 自分につけられた評価に対して納得できないと教員に文句を言ってくる学生がいる、などがあげられるが、これらの諸問題は、ルーブリックを採択することで解決できるといえる。

(2) ルーブリックの構成

ルーブリックは、4つの要素（「課題」「評価観点」「評価尺度」「評価基準」）から構成されている（表1）。

① 課題

教える側が学習者に対して期待する行動を、題目として明らかにしたものである。「課題」を記載することで、そのルーブリックがどのような行動を評価しようとしているのかが、学習者にも

表1 ルーブリックの構成
表の題目

課題	評価尺度[1]	評価尺度[2]	…	評価尺度[j]
評価観点[1]	評価基準[1,1]	評価基準[1,2]	…	評価基準[1,j]
評価観点[2]	評価基準[2,1]	評価基準[2,2]	…	評価尺度[2,j]
⋮	⋮	⋮	…	⋮
評価観点[i]	評価基準[i,1]	評価基準[i,2]	…	評価基準[i,j]

明らかになる。学習者（とくに大学生）にとっては、科目を履修することで卒業に向けての単位を取得することが目的になるといっても過言ではない。その単位を取得するためにはどのような観点で評価されるかをあらかじめ知っていることは、学習者にとっても学習への動機づけ維持に結びつくといえる。そのために、その科目の評価基準が端的に記述された「課題」を掲げることは、学習効果の高揚を促すことにもなる。なお、「表の題目」と「課題」が一緒になったルーブリックでも構わない。

② 評価尺度

ルーブリックの「課題」に対して、どれだけ達成されたかを表す指標のことであり、表の最上行に並べられる。一般的には、個々の評価の観点についての習得度合や達成度合いを段階的に表したものとなる。その際に、肯定的な側面だけを見た場合、肯定的な部分と否定的な部分を両方取り入れた場合がある。たとえば、前者については「最良」「優秀」「良好」「普通」、後者については「最良」「良好」「低度」「最悪」などがあげられる。また、尺度の個数をいくつにするか、中庸的な尺度（「普通」「平均的」「中間」）を入れるか入れないかによって評価基準が変わってくる場合がある。多くのルーブリックは、3段階から5段階の尺度を用いることが多い。

③ 評価観点

課題に表したスキルを、より詳細な構成要素に分割することによって評価における観点を明らかにする。つまり、設定した課題を達成することによって、どういうことができるようになるのか、その行動変容を具体的に書き表せばよいわけである。「評価観点」を明らかにすることによって、スキル習得のための作業の構成要素が明確に特定できる。また、その個々の作業に対する有用性も把握できて、学習過程におけるきめ細かなフィードバックにも利用できる。

④ 評価基準

「評価観点」毎に、評価の尺度のレベルに応じて、どの採点基準に位置づけられるかを具体的に表したものである。「評価尺度」ではレベルの差しかわからないが、「評価基準」においてどのような行動や行為が伴うかが明らかになるので、評価のぶれがなくなるといえる。また、「評価基準」を学習者に事前に認知させることによって、自分のパフォーマンスがどのような基準に基づいて評価されるのかを把握することができる。

(3) ルーブリックの作成手順

ルーブリックを作成する際に、どの程度の分量で作成すべきかが問題となる。その一つの目安として、1ページで納めることがあげられる。これは、読みやすさおよび採点のしやすさといった観点から導き出された指針である。

最初に取り組むべきことは「課題」を明らかにすることであるが、多くの場合すでにシラバスに記載されているといつてよい。「課題」を明示することによって、評価の対象項目の全体像が明

らかになり、学生の成績評価に対する関心が高くなることが期待できる。

次に「評価尺度」(表の横方向)を記入するが、その際に、何段階にするかを決める必要がある。それには、1段階、3段階、4段階、5段階といった区分けが考えられる。1段階は、採点指針ルーブリックと呼ばれ、各「評価観点」における最高レベルの行動を示した場合である。また、これをもとにレベルを落としながら、3段階から5段階にブレイクダウンするという作成手順もある。3段階は最もよく使われるものであり、一般的には上級・中級・初級の行動レベルといった分け方になる。これをもとに、さらに5段階に拡張するという手順もよく使われる。これは、パフォーマンスの実践を見た上で、行動レベルを追加したい場合に用いられる。以上は奇数の段階により、真ん中に中庸となる平均的なレベルを想定しているが、優性か劣性かのどちらかに評価を偏らせるためにあえて4段階を採択することもできる。

その上で、最初に掲げた「課題」をいくつかの要素に分割した「評価観点」(表の縦方向)を書き並べる。それとともに、それぞれの「評価尺度」と「評価観点」に対応した「評価基準」を記載することによって、ルーブリックを作り上げる。「評価基準」の作成では、最高レベルの「評価尺度」における「評価基準」を、すべての「評価観点」について表すとよい。その上で、次のレベルの「評価基準」において、最高レベルとの差分を順に明らかにする。なお、最低レベルの「評価基準」では、達成できなかった行動を示すだけでなく、教育的な配慮から達成の可能性についても言及すべきである。

(4) eルーブリック

当初、ルーブリックは紙媒体として作成した。一度作成すれば、コピーを取ることで何枚でも配布して利用できる。これによって、教員だけでなく、学生も評価作業ができるようになる。ただし、ルーブリックの評価結果を点数化しようとした場合、教員の方で、マークされた「評価尺度」を点数に変換するといった手間が生じる。

そこで、ルーブリックそのものを電子化したeルーブリック (electronic Rubric) を作成する。eルーブリックの実装手段としては、表計算ソフトの利用、LMS (Learning Management System) の利用などがあげられる。ただし、eルーブリックを利用する場合は、評価者(教員、学生)がパソコン・タブレット・スマートフォン(以降、スマホと略す)といったICT (Information and Communication Technology) 機器でアクセスできる環境が必要となる。

① 表計算ソフトによる実装

スタンドアロン環境のパソコンかタブレットで、Excelのスプレッドシートによってeルーブリックを実装する。

そもそもルーブリックは表形式なので、スプレッドシートに変換しやすい。具体的には、「評価観点」を各行に、「評価尺度」を各列に、「評価基準」を各セルに、それぞれ対応させればよい。しかし、これだけでは単に手書きのルーブリックをスプレッドシートに置き換えただけとなりあまり意味がない。

そこで、スプレッドシートにGUI (Graphical User Interface) ベースのアイコンを配置するとともに、関数や計算式を組み込むことで、評点の計算まで自動化できることになる。その手順は、次のようになる。

1) リボンに[開発]タブの追加

メニューバーの[ファイル]タブ,[オプション],[リボンのユーザー設定]を順にクリックする。[メインタブ]の[開発]チェックボックスをオンにする。

2) ラジオボタンの設定

メニューバーの[開発]タブ, [挿入], [コントロールフォーム]の[ラジオボタン]アイコンをクリックする(図1の「ラジオボタン」)。マウスでドラッグして位置と範囲を指定し, 右クリックして[コントロールの書式設定]をクリックする。[値]をオフにし, [リンクするセル(L)]に\$G\$3を指定する。これによって, 何番目の[ラジオボタン](左から1, 2, 3, 4, 5, 何も選択していないと0)を押したかにより, その番号がG3セルに与えられる。

3) ラジオボタンのグループ化

1つの設問に対して, ラジオボタンを複数作る場合は, 設問毎にラジオボタンをグルーピングする必要がある。そこで, 再度[フォームコントロール]の[グループボックス]アイコンをクリックする(図1の「グループボックス」)。そして, ひとまとめにする[ラジオボタン](ここでは5つ)全体を括る。ただし, 囲み線が残るので, それを非表示にするためには, [Alt]キーと[F11]キーを同時に押し, [イミディエイト]欄に,

ActiveSheet.GroupBoxes.Visible=False
と入力する。Trueにすると表示される。

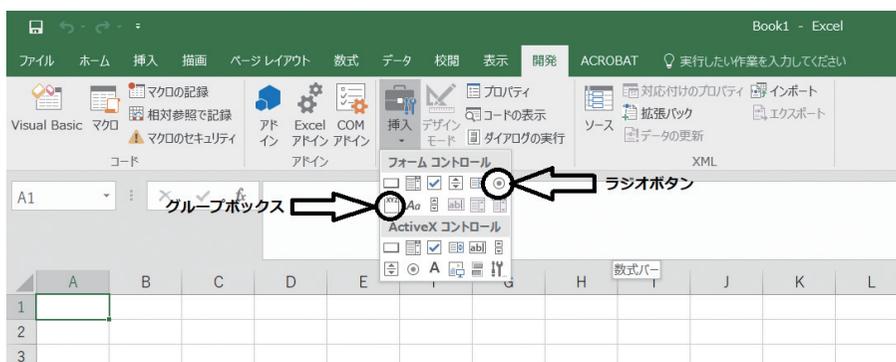


図1 GUIの設定

次に, IF関数を用いることで, レベル毎に点数をつける(レベル4:4点, レベル3:3点, レベル2:2点, レベル1:1点, レベル0:0点)こともできる。具体的には, 図2のH3セルに,
=IF(G3=1,4,IF(G3=2,3,IF(G3=3,2,IF(G3=4,1,0)))
とIF関数を入力する。これによって, H3セルに, 変換後の点数(0から4までの値)が入る。

	A	B	C	D	E	F	G	H	I
1		レベル4	レベル3	レベル2	レベル1	レベル0			
	大学における単位制度	正しく意味は理解しており, 正しく説明ができる	ある程度は理解しており, 大まかに説明ができる	ある程度は理解しているが, スライドを読むだけ	ほとんど理解していないため, 説明が難しい	全く理解していないため, 説明ができない			
2									
3	評点	●	○	○	○	○	1	4	
4									
5									

図2 ルーブリックの点数化

以上の形で、ルーブリックをExcelで設定することによって、パフォーマンスの現場においてリアルタイムに評価をつけられるだけでなく、評点の点数も自動計算できる。

② LMSによる実装

①による方法では、ルーブリックに対応したスプレッドシートを作成するための手間がかかる。そこで、ルーブリック機能を提供するLMSを活用することを提案する。そのLMSとしては、本学に2016年度に導入されたMoodleを用いる。これについては、次章で取り上げる。

3. Moodleによるルーブリック評価

Moodleは、オープンソースのeラーニングプラットフォームである。LMSというよりも、どちらかというところではCMS（Course Management System）に分類される。授業のコースや教材コンテンツ、そして、学習過程を管理するためのソフトウェアである。

Moodleの特徴の一つに、オープンソースであることがあげられる。これは、当初、Pythonで開発できるZopeというフレームワークを使用していたが、すべてPHP（元々は、Personal Home Page）スクリプトで書き直したことに起因している。また、オープンソースであることから、常時、さまざまな改変や機能の追加が行われている。⁸⁾⁹⁾

本学に導入されているMoodleは、パソコンやタブレットだけでなく、スマートフォンでもアクセス可能である。そのためのMobile Moodleというアプリケーションを提供している。これによって、学生がいつでもどこでもスマホでMoodleにアクセスできるようになっている。ただし、スマホの場合、機種によってはアプリケーションビューアがないものもあるので、教材コンテンツを提供する際にはPDFに変換してMoodleにアップロードする必要がある。

Moodleには、ルーブリックによる評価の機能が含まれている。ここでは、それらの機能について、具体的に取り上げる

3.1 「初年次演習」の概要

本稿では、ルーブリック評価の対象科目として、全学共通の「初年次演習」を取り上げる。当初は、2013年度から全学共通で開講することになった「演習(1)」において、アカデミックスキル習得のための初年次教育を実施していた。その後、科目名が「初年次演習」になるとともに、アクティブラーニングを取り入れた実践授業や研究倫理に関する話題の採択などが推奨されてきた。

筆者の研究室では、2013年度からeラーニングに関する研究活動を進めてきた。その一環として、「演習(1)」をeラーニングによる反転授業として実施することを目的に、アカデミックスキル教育向けの教材コンテンツを独自に開発した。¹⁰⁾ その上で、クラウド型のeラーニングシステム(2014年度はファカルタス社のSeLPS, 2015年度はキャストリア社のgoocus)とグループウェア(サイボウズLive)を用いて、反転授業の実証実験を行った。¹¹⁾⁻¹³⁾

2016年度にはMoodleが導入されたことで、「初年次演習」を、Moodleを用いて実践することになった。そのために、クラウド型のeラーニングシステムにアップロードしていた教材コンテンツをすべてMoodleに移植した。

2017年度については、すでに春学期が終了した段階であるが、この期間においてMoodleを用いたルーブリック評価を新たに取り入れた。具体的には、Moodleの「初年次演習」コースに、表2のような教材コンテンツ(活動/リソース)を置き、毎回Moodleを使う形で授業を進めた。な

お、秋学期については、第3クォーターにテクニカルライティング演習とディベート演習を、第4クォーターにプレゼンテーション演習を予定している。

表2にあるように、「初年次演習」では、アカデミックスキルの習得を目指した。そのスキルとしては、学修スキル、ノートテイキングスキル、情報検索スキル、情報発信スキル、アカデミックリーディングスキルとした。いずれも、パフォーマンス（学ぶ、書く、調べる、見せる、読む）をベースとした活動を含むことから、筆記テストよりもルーブリック評価が適しているといえる。そこで、Moodleを利用しながら、ルーブリック評価を試みた。

表2 Moodleの教材コンテンツ

トピック名	活動/リソース名	コンテンツの種類		内容
		活動	リソース	
新入生向け情報ブレースメントテスト	事前アンケート	フィードバック		個人のプロフィール、高校までの情報教育に関する履歴
	情報ブレースメントテスト	小テスト		一般情報教育に関する出題（「わからない」という選択肢含む）
受講事前アンケート	初年次演習に向けての受講事前アンケート	フィードバック		「初年次演習」受講に対する思いや印象についての調査
学修プラン	学修プラン	課題		商学部のカリキュラムと科目シラバスを閲覧しながら、1年間分の時間割をExcelで作成してを提出
	学修プランに関するルーブリック	フィードバック		「学修プラン」を学習した結果を自己評価
ノートテイキング	講義ノートの取り方		URL	慶応大学はじめてのアカデミックスキルズ「講義ノートの取り方」のビデオ
	ノートテイキング		ファイル(PDF)	講義ノートの取り方を解説したスライド
	コーネル式ノート		URL	Webサイト「講義ノートの取り方と復習のコツ」
	模擬授業1		URL	静岡理科大学体験講義「コンピュータに作文はできるか？」のビデオ
	課題1：ノートテイキングのeルーブリック	課題		模擬授業1を聴講し、コーネル式ノートのWordテンプレートにより、ノートを作成して提出
	各人のノートテイキングの結果		ファイル(ZIP)	10名分の提出されたノートをPDFにして圧縮したファイル
	各人の評価（10名分）	小テスト		ルーブリックを小テストに変換し、相互評価
	課題1の相互評価の結果		ファイル(PDF)	各人の相互評価の結果を、Excelのレーダーチャートに変換したファイル
	模擬授業2		URL	ニック・ポストロム氏講演「人工知能が人間より高い知性を持つようになったとき何が切るか？」
	課題2：ノートテイキングのeルーブリック	課題		模擬授業2を聴講し、コーネル式ノートのWordテンプレートにより、ノートを作成して提出
	ノートテイキングに関するルーブリック	フィードバック		「ノートテイキング」を学習した結果を自己評価
情報検索	情報検索（図書館とインターネット）		ファイル(PP)	4年ゼミ生が作成した「図書館とインターネット」のスライド
	情報検索の基本とデータベース		URL	慶応大学はじめてのアカデミックスキルズ「情報検索の基本とデータベース」のビデオ
	Google検索		URL	Webサイト「Googleの検索効率が超あがるオススメの検索技13個まとめ」
	課題：情報検索	課題		7個の問いについて、インターネットで検索し、回答と閲覧したURLを提出
図書館見学	WebOPACについて		URL	Webサイト「東京国際大学図書館webOPACへようこそ」
	情報検索に関するルーブリック	フィードバック		「情報検索」と「図書館見学」を学習した結果についての自己評価

施設案内と設備利用	PowerPointの基本操作		URL	Webサイト「PowerPointの基本操作」
	写真の素材3ファイル		フォルダ	「PowerPointの基本操作」で使う画像ファイル
	課題について	課題		2人で1グループとし、本学の施設案内と設備利用に関するスライドをPowerPointで作成して提出
	施設案内と設備利用のワークショップ	ワークショップ		スライドを用いてプレゼンした結果を、相互評価
	施設案内と設備利用に関するルーブリック	フィードバック		「施設案内と設備利用」を学習した結果についての自己評価
アカデミックリーディング	クリティカルリーディングのやり方		URL	慶応大学はじめてのアカデミックスキルズ「クリティカルリーディングのやり方」のビデオ
	文章の要約		URL	Webサイト「要約文の書き方のコツとは？」
	要約する文章（その1）		URL	Webサイト内田樹の研究室「学ぶ力」
	課題1：要約文の作成	課題		「学ぶ力」の要約を、Wordの原稿用紙テンプレートで作成して提出
	要約する文章（その2）		URL	Webサイト内田樹の研究室「大学のグローバル化が日本を減ぼす」
	リーディングのワークショップ	ワークショップ		各人の要約文を相互評価
	アカデミックリーディングに関するルーブリック評価	フィードバック		「アカデミックリーディング」を学習した結果を自己評価
中間アンケート	中間アンケート	フィードバック		春学期受講した結果についての授業評価

3.2 [フィードバック]を用いたルーブリック評価

Moodleでは、[フィードバック]を用いてレポートを提出させることができる。これをルーブリックに変換することで、学生による自己評価を実施した。

ルーブリックのスプレッドシートをMoodleの[フィードバック]に変換するためには、ルーブリックの「評価観点」を[フィードバック]の質問文に、「評価基準」を[フィードバック]のラジオボタンによる多肢選択文に対応させればよい（図3）。

	A	B	C	D	E	F
1		レベル4	レベル3	レベル2	レベル1	レベル0
2	大学における単位制度	正しく意味は理解しており、正しく説明ができる	ある程度は理解しており、大まかに説明ができる	ある程度は理解しており、誰かにサポートしてもらいながら説明できる	ほとんど理解していないため、説明が難しい	全くわからず、説明すらできない
		入学前に商学部について詳細に把握できてお	商学部の教育方針を理解してい	商学部の教育方針がある程度は	商学部の教育方針もあまりわか	何となく商学部に入学してしま

← Excelによるルーブリック

☑ (1) 大学における単位制度について*

- 正しく意味は理解しており、きちんと説明できる
- ある程度は理解しており、大まかに説明ができる
- ある程度は理解しており、誰かにサポートしてもらいながら説明できる
- ほとんど理解していないため、説明が難しい
- 全くわからず、説明すらできない

← Moodleの「フィードバック」へ変換

図3 ExcelのスプレッドシートをMoodleの[フィードバック]に変換

その場合のMoodleでの操作手順は、次のようになる。

[初年次演習]コースを選び、[編集モードの開始]をクリックする。[活動またはリソースを追加する]で[フィードバック]を追加してから、[すべてを展開する]をクリックする。

[▼一般]の[名称]と[説明]とレ点、[▼利用]の[開始日時]と[終了日時]を、それぞれ入力する、必要であれば、[▼質問および回答設定][▼回答送信後][▼モジュール共通設定][▼利用制限][▼タグ][▼コンピテンシー]の各項目を入力する。最後に、[保存してコースに戻る]をクリックする。

次に、生成された[フィードバック]のアイコンをクリックし、[質問を編集する]をクリックする。[質問を追加する]のセレクトボックスから[多肢選択]をクリックする。

[▼多肢選択]の画面において、[必須]にレ点を入れ、[質問]にループリックの評価観点を入力する。[ラベル]は1つ目の評価観点の場合は[1]（以降、1ずつ加算）を入力する。[多肢選択タイプ]のセレクトボックスで[多肢選択・単一回答]を選ぶと、ラジオボタンが設定される。[多肢選択・複数回答]にすると、チェックボックスが設定される。

[表示方向]は複数の「評価基準」の並ぶ方向を指定でき、[垂直]は縦方向に、[水平]は横方向となる。[未選択オプションを隠す]のセレクトボックスで[No]を選ぶことで選択文の先頭に[○未選択]が表示され、[Yes]で非表示となる。[空の送信を分析しない]のセレクトボックスでは[No]を選ぶ。[多肢選択値]には、ループリックの「評価基準」を入力する。その際に、1つの「評価基準」を入力し改行キーを押すことで、1行分の多肢選択文が設定される。

最後に、[質問を保存する]をクリックすることで、1つ目の「評価観点」と「評価基準」の組合せが設定できる。以上の操作を、すべての「評価観点」に対して行うことで、[フィードバック]が出来上がる。

「初年次演習」（春学期）では、学修スキル（学修プラン）、ノートテイキングスキル、情報検索スキル（情報検索と図書館見学）、情報発信スキル（施設案内と設備利用）、アカデミックリーディングスキルのループリック評価に、それぞれMoodleの[フィードバック]を用いた。

3.3 [課題]を用いたループリック評価

Moodleでは、[課題]を用いてレポートを提出させることができる。その[課題]の[評点方法]を指定するときに[ループリック]を選ぶことで、ループリックを用いた評価ができる。これを教員による他己評価として実施した。具体的なMoodleでの操作手順は、次のようになる。

[初年次演習]コースを選び、[編集モードの開始]をクリックする。[活動またはリソースを追加する]で[課題]を追加してから、[すべてを展開する]をクリックする。

[▼一般]の[課題名]と[説明]にレ点を[▼利用]の[開始日時]と[終了日時]を、それぞれ入力する、[▼提出タイプ]では、[提出タイプ]は[ファイル提出]にレ点を、[最大アップロードファイル数]は[1]を、[最大提出サイズ]のセレクトボックスから[サイト アップロード上限(20 MB)]を、それぞれ指定する。これは、ノートテイキングの課題として、Wordで作成したコーネル式ノートのテンプレートをダウンロードし、ビデオで聴講した授業内容に応じたノートを作成し出来上がったdocxファイルをアップロードさせるようにしたためである。

[▼フィードバックタイプ]、[▼提出設定]、[▼グループ提出設定]、[▼通知]は、そのままとする。[▼評点]では、[タイプ]のセレクトボックスから[評点]を、[最大評点]は[100]を、[評定方法はループリック]を、[評定カテゴリ]は「カテゴリなし」を、[ブラインド設定]は[No]を、[採点ワークフローを使用する]は[No]を、[採点割り当てを使用する]は[No]を、それぞれ指定する。必要であれば、[▼モジュール共通設定][▼利用制限][▼タグ][▼コンピテンシー]の各項目を入力す

る。最後に、[保存して表示する]をクリックする。

画面が変わり、[高度な評定]において、[新しい評定フォームを最初から定義する]をクリックする。[ルーブリックを定義する]画面で、[名称]と[説明]をそれぞれ入力後、[ルーブリック]に移動する。

[クリックしてクライテリアを編集する]をクリックし、ルーブリックの「評定観点」を入力する。右に並ぶ[クリックしてレベルを編集する]で、ルーブリックの「評定基準」を入力する。右方向の各レベルは、0点から2点までなので、必要であれば[レベルを追加する]をクリックして増やすことができる。同様に、下方向の各クライテリアは、[クライテリアを追加する]をクリックすることで増やすことができる。[ルーブリックオプション]については、基本点にレ点を入れたままでよい。以上の操作を終了してから、[ルーブリックを保存して利用可にする]をクリックする。

以上の操作手順で作成したノートテイキングのルーブリックの事例を表3に示す。

表3 [課題]におけるルーブリック

評点						
評点:						
授業内容の網羅度合について	全くできていない 0点	部分的にしか書かれていないので、よくわからない 1点	全体的な概要しかわからない 2点	部分的には詳細に書かれている 3点	詳細に書かれており、授業の再現ができる 4点	
コーネル式ノートの書き方について	全く異なり自己流の書き方になっている 0点	ほとんど自己流の書き方になっている 1点	3つの区分の意味がわかっていない 2点	ノート部だけはきちんと書かれている 3点	きちんと準拠しており、全く問題ない 4点	
ノート部について	何も書かれていない 0点	ほんの少ししか書かれていない 1点	全体的に記述量が少ない 2点	部分的には詳細に書かれている 3点	聴講内容が詳細に記録されている 4点	
キュー部について	何も書かれていない 0点	ほんの少ししか書かれていない 1点	キューの意味がわかっていない 2点	部分的には詳細に書かれている 3点	詳細かつ厳密に書かれている 4点	
サマリー部について	何も書かれていない 0点	ほんの少ししか書かれていない 1点	サマリーの意味がわかっていない 2点	部分的には詳細に書かれている 3点	詳細にかつ緻密に書かれている 4点	

学生に通知する

変更を保存する

リセット

「初年次演習」(春学期)では、ノートテイキングスキルのルーブリック評価において用いた。Moodleの[課題]で作成した[ルーブリック]において、該当する「評価基準」の箇所をクリック(表3にある緑色)するだけで評点が自動計算される。表3では、100点満点で5個のクライテリアが

あるので、1つのクライテリアは20点となり、[0点]は0点に、[1点]は5点に、[2点]は10点に、[3点]は15点に、[4点]は20点にそれぞれ換算される。この事例では40点（5点+10点+10点+10点+5点）となる。また、[フィードバックコメント]には、個々の学生に対して提出された課題についてのコメントを入力することで、学生が参照できるようになる。

3.4 [小テスト]を用いたルーブリック評価

Moodleでは、[小テスト]を用いて確認テストを行うことができる。これをルーブリックに適用することによって、学生による相互評価（ただし、自分の評価も含めた）を実施した。具体的なMoodleでの操作手順は、次のようになる。

[小テスト]では、まず問題を作成する必要がある。そこで、「管理」の[▼問題バンク]の[問題]をクリックする。[問題バンク]画面にある[新しい問題を作成する…]をクリックする。[追加する問題タイプを選択する]で、[多肢選択問題]を追加する。

[多肢選択問題の追加]画面において、[▼一般]の[問題名]と[問題テキスト]と[デフォルト評点]を入力する。[問題テキスト]には、ルーブリックの「評価観点（1行目）」をそのまま入力する。[単一または複数回答?]のセレクトボックスからは、[単一解答のみ]を指定する。[選択肢をシャッフルしますか?]のレ点はずす。

[▼答え]の[選択肢1]にはルーブリックの「評価基準（1行1列目）」を入力し、[評点]のセレクトボックスからは[100%]を指定する。[選択肢2]にはルーブリックの「評価基準（1行2列目）」を入力し、[評点]のセレクトボックスからは[75%]を指定する。以降、[選択肢5]まで繰り返す。なお、[評点]は、[選択肢3]が[50%]、[選択肢4]が[25%]、[選択肢5]が[なし]と、それぞれ指定する。

[▼総合フィードバック]では、[すべての正答]には「あなたの答えは正解です。」を、[すべての部分的に正しい解答]には「あなたの答えは部分的に正解です。」を、[オプション]にはレ点を、[すべての不正解]には「あなたの答えは正しくありません。」を、それぞれ入力する。

[▼複数受験][タグ]はそのままとし、[変更を保存する]をクリックすると、[小テスト]の[問題1]が、[問題バンク]に生成される。生成された[問題]は、図4のようになる。以上の操作を、ルーブリックの「評価観点」分繰り返す。

問題をプレビューする: ノートテイキングのルーブリック

問題 1
未解答
最大評点 1.00

授業内容の網羅度合について

1つ選択してください:

- a. 詳細に書かれており、授業の再現ができる
- b. 部分的には詳細に書かれている
- c. 全体的な概要しかわからない
- d. 部分的にしか書かれていないので、よくわからない
- e. 全くできていない

再開する 保存 正解を表示する 送信して終了する プレビューを閉じる

図4 [小テスト]の[問題]例

次に、[小テスト]の作成を行う。[初年次演習]コースを選び、[編集モードの開始]をクリックする。[活動またはリソースを追加する]で[小テスト]を追加してから、[すべてを展開する]をクリックする。

[▼一般]の[名称]と[説明]にレ点、[▼タイミング]の[小テスト公開日時]と[小テスト終了日時]を、それぞれ入力する、[▼評点]はそのまま、[▼レイアウト]の[新しいページ]のセレクトボックスから[問題1問ごと]を指定する。[▼問題の挙動][▼レビューオプション][▼アピアランス][▼受験に関する特別制限][▼全体のフィードバック][▼モジュール共通設定][▼利用制限][▼タグ][▼コンピテンシー]はそのままとし、[保存してコースに戻る]をクリックする。

追加されたトピックにある「小テスト」をクリックする。すると、「まだ問題が追加されていません。」と表示されるので、[小テストを編集する]をクリックする。[追加]をクリックするとセレクトボックスが表示され、[問題バンクから]を指定する。画面が問題バンクー覧に変わり、そこから該当する問題にレ点を入れ、[選択した問題を小テストに追加する]をクリックする。

[小テストの編集：テスト]の画面に戻ったら、各問題の点数を[4.00]に、最大評点を[20.00]に指定する。これは、問題が5個あり、1問につき4点満点とすることで、最大評点が20点になるからである。また、各問題に対して、選択肢1 (a) の評点は100%なので4点、選択肢2 (b) の評点は75%なので3点、選択肢3 (c) の評点は50%なので2点、選択肢4 (d) の評点は25%なので1点、選択肢5 (e) の評点は0%なので0点となる。

「初年次演習」(春学期)では、ノートテイキングスキルのルーブリック評価(学生同士の相互評価)に、Moodleの[小テスト]を用いた。具体的には、各人の提出した課題1のコーネル式ノートのdocxファイルをPDFに変換し、Moodleにアップロードした。それらを学生が閲覧しながら、[小テスト]のルーブリックを用いて自己評価と他己評価を行った。

すべての評価が終わってから、[受験件数：10]をクリックし、[テーブルデータをダウンロードする]のセレクトボックスから[Microsoft Excel(.xlsx)]を指定し、[ダウンロード]をクリックする。表4(ただし、不要な列は削除)のように、ダウンロードしたファイルには、自分を含め、全員分の[小テスト]の結果が入っている。

表4 ダウンロードファイルの中身

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
1	名前	学籍番号	状態	開始日時	受験完了	所要時間	評点/20.0	Q. 1 /4.00	Q. 2 /4.00	Q. 3 /4.00	Q. 4 /4.00	Q. 5 /4.00
2		1	3 終了	2017年 05月 17日	2017年 05月 17日	16 秒	20.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00
3		1	3 終了	2017年 05月 17日	2017年 05月 17日	1 分 27 秒	15.00	2.00	4.00	3.00	3.00	3.00
4		1	9 終了	2017年 05月 17日	2017年 05月 17日	1 分 8 秒	14.00	3.00	1.00	3.00	3.00	4.00
5		1	4 終了	2017年 05月 17日	2017年 05月 17日	20 秒	20.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00
6		1	0 終了	2017年 05月 17日	2017年 05月 17日	1 分 18 秒	15.00	3.00	4.00	2.00	3.00	3.00
7		1	1 終了	2017年 05月 17日	2017年 05月 17日	1 分 17 秒	19.00	4.00	4.00	3.00	4.00	4.00
8		1	2 終了	2017年 05月 17日	2017年 05月 17日	22 秒	20.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00
9		1	9 終了	2017年 05月 17日	2017年 05月 17日	1 分	18.00	4.00	4.00	4.00	3.00	3.00
10		1	2 進行中	2017年 05月 17日	-	-	-	-	-	-	-	-
11		1	2 終了	2017年 05月 17日	2017年 05月 17日	1 分 15 秒	16.00	3.00	4.00	3.00	3.00	3.00
12		1	8 終了	2017年 05月 17日	2017年 05月 17日	37 秒	19.00	4.00	4.00	4.00	3.00	4.00
13	全平均						17.60	3.50	3.70	3.40	3.40	3.60

このファイルから、学生個人と全平均のデータを抽出し、それをExcelのレーダーチャットに変換すると、図5のようになる。これによって、自分と他学生の評価が簡単にわかる。

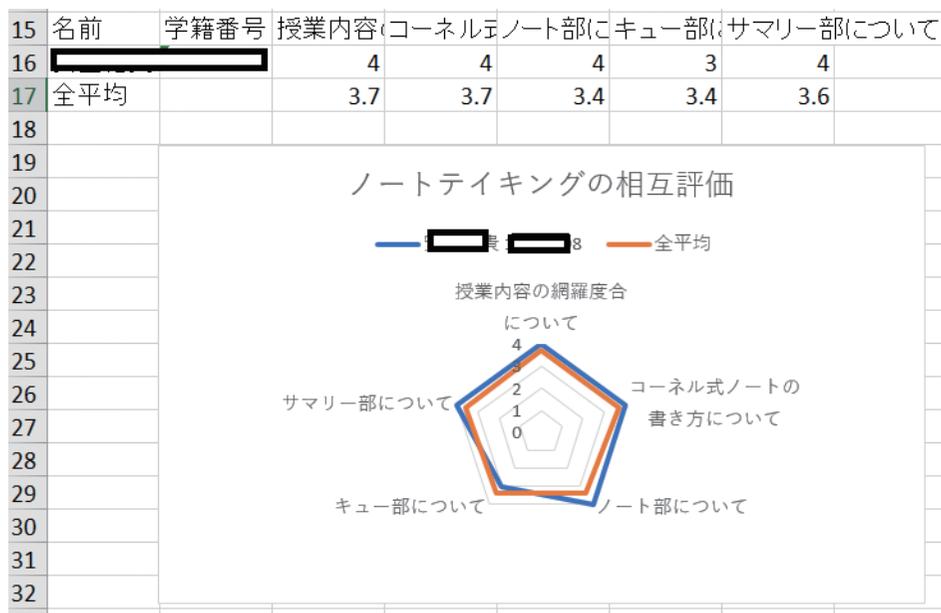


図5 ルーブリック評価をレーダーチャート化

3.5 [ワークショップ]を用いたルーブリック評価

3.4では、[小テスト]を用いて、学生同士の相互評価をレーダーチャートによって表したが、評価データの収集や加工あるいは編集に手間がかかる。そこで、Moodleの教員の手作業（評価資料の配布、学生同士の相互評価、回収と集計など）をすべて電子化できる[ワークショップ]の機能を用いる。¹⁴⁾ 具体的なMoodleでの操作手順は、次のようになる。

[初年次演習]コースを選び、[編集モードの開始]をクリックする。[活動またはリソースを追加する]で[ワークショップ]を追加してから、[すべてを展開する]をクリックする。

[▼一般]の[ワークショップ名]と[説明]にレ点を入力する。[説明]には、課題内容やレポートの提出方法、提出日時などを記載する。

[▼評定設定]の[評定方法]のセレクトボックスから[ルーブリック]を指定する。これによって、学生はルーブリックを用いて相互評価ができるようになる。[提出に対する評点]には、[50]を指定する。これは、学生のパフォーマンス（プレゼンテーションや作成されたスライド）に対して、自分あるいは他の学生が50点満点として評点をつけるためである。[評価に対する評点]にも、[50]を指定する。これは、他の学生につけた評価に対する評点であり、50点満点（これについては自動計算される）とした。なお、[提出に対する評点]と[評価に対する評点]の合計が100になるように設定する。

[▼提出設定]の[提出のインストラクション]では、学生が課題を提出する際の画面で表示される事柄（課題内容、提出期限、提出の際の留意点など）を記載する。[提出の最大添付数]は[1]を、[送信添付で教科されたファイルタイプ]は[ppt, pptx]を、[最大提出添付サイズ]は[サイトアップロード上限(20 MB)]を、それぞれ指定する。[提出期限後の提出を許可します。]では、学生の提出が遅れた場合、その学生の提出を認めるか否かを設定する。

[▼評価設定]の[評価のインストラクション]では、評価の手順あるいは締切などについて記載する。[学生は自分自身のワークを評価することができます。]にレ点をつけることで、自己評価もできるようにする。

[▼フィードバック]の[全体フィードバックモード]のセレクトボックスから[有効および任意]を指定する。[全体フィードバックの最大添付数]は[0]を、および、[結論]を入力する。[結論]は、学生に対して評価成績とともに表示される教員からのメッセージに相当する。

[▼提出例]の[提出練習としての提出例が提供されます。]のレ点はずす。

[▼利用]の[提出開始日時]「提出終了日時」を入力し、[提出終了日時後、次のフェーズに移行する。]にレ点をつける。これによって、課題の提出終了日時以降に、自動的に「評価フェーズ」に変わる。レ点をつけない場合は、教員が手動で切換えを行う。[評価開始日時]と[評価終了日時]を入力するが、ある一定の時間をあけるように設定する。

[▼モジュール共通設定][▼利用制限][タグ][▼コンピテンシー]はそのままとし、[保存して表示する]をクリックする。

以上によって、図6のような各フェーズを設定する画面が表示されるので、セットアップフェーズから順番に進める。

施設案内と設備利用のワークショップ®

セットアップフェーズ

セットアップフェーズ	提出フェーズ	評価フェーズ	成績評価フェーズ	終了
<ul style="list-style-type: none"> ✓ ワークショップ説明を設定する ✓ 提出のインストラクションを記述する ✓ 評価フォームを編集する 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 評価のインストラクションを記述する ✓ 提出を割り当てる 期待数: 10 割り当て数: 0 ① 提出開始日時: 2017年 06月 14日(水曜日) 10:40 (66 日前) ① 提出終了日時: 2017年 06月 23日(金曜日) 23:55 (66 日前) ① あなたには時間制限は適用されません。 	<ul style="list-style-type: none"> ① 評価開始日時: 2017年 06月 28日(水曜日) 10:00 (52 日前) ① 評価期限: 2017年 06月 28日(水曜日) 23:55 (51 日前) ① あなたには時間制限は適用されません。 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 提出に対する評点を計算する 期待数: 10 計算数: 10 ✓ 評価に対する評点を計算する 期待数: 10 計算数: 9 ✓ 活動の結論を提供する 	

図6 ワークショップの設定画面

(1) 「セットアップフェーズ」

[ワークショップ説明を設定する][提出のインストラクションを記述する]については、上述したようにすでに入力を終えているのでそのままにする。

[評価フォームを編集する]をクリックすると、ルーブリックに変換するための画面が表示される。

[▼クライテリア1]にルーブリックの「評価観点」を、[レベル評価および定義]にルーブリックの「評価基準」(レベル0からレベル3まで)を入力する。以降、「評価観点」分のクライテリアの入力を繰り返す。

[▼ルーブリック設定]の[ルーブリックレイアウト]は[グリッド]を選ぶ。これによって、ルーブリックは表形式で表示される。[リスト]を選ぶと、[フィードバック]の表示となり、「評価観点」の下にラジオボタンがついた「評価基準」が並ぶ。最後に、[保存してプレビューする]をクリックすると設定したルーブリックが表示され、[保存して閉じる]で終了する。

(2) 「提出フェーズ」

[評価のインストラクションを記述する][提出を割り当てる]についても、上述したようにすでに入力を終えているのでそのままにする。

[スケジュール割り当てをセットアップする]をクリックすると、スケジュール割り当て設定画面が表示される。

[手動割り当て][ランダム割り当て][スケジュール割り当て]の3つのタブの中から、[スケジュール割り当て]を選ぶ。

[▼スケジュール割り当て設定]の[提出フェーズの後、提出を自動的に割り当てる]にレ点をつける。これによって、スケジュール割り当てを有効にする。

[▼割り当て設定]の[レビュー数]は、[9]と[評価者あたり]を指定する。これは、評価者（学生）が9名分を評価することを意味している。「初年次演習」では10名の学生が履修しており自分を含めないことになるが、別途[自己評価を追加する]にレ点をつければよい。

(3) 「評価フェーズ」

ここでは、[ワークショップ評価レポート]が表示されており、学生が自分の欄に記載されている他の学生におけるパフォーマンス（スライドの出来具合とプレゼンテーションの様子）を、ループリックを用いて評価する。評価対象となる学生毎にループリックが表示され、該当する「評価基準」の箇所のラジオボタンをクリックするとともに、全体フィードバックにコメントを入力する。これによって、評点が自動計算されて、[与えた評点]に表示される。また、他の学生が自分のパフォーマンスに対して評価した結果は、[与えられた評点]に表示される。

(4) 「成績評価フェーズ」

[▼成績評価設定]の[評価の比較]におけるセレクトボックスには、[非常に厳しい][厳しい][公平][甘い][非常に甘い]の5段階が設定されている。これは、相互評価において、自分の評価と他人の評価との差異を判定するための計算指標となる。これによって計算されたものをクライテリアの距離と呼び、これを合計したものを評価者の距離とする。その中で、最小値の評価を「最高評価」とし、再度計算を行う。こうして、最終的な評価者毎の距離を100から引いた値が評価点の%となる。学生毎の評価結果（[成績評価設定]を[非常に厳しい]とした場合）は、図7のようになる。

ワークショップ評定レポート

姓 / 名	提出 / 最終更新日時	与えられた評点	提出に対する評点 (最大 50)	与えた評点	評価に対する評点 (最大 50)
English Japanese plaza	修正日時: 2017年 06月 23日(金曜日) 12:32	43 (11)< 1 1 8 50 (50)< 1 1 2 50 (50)< 1 1 3 50 (50)< 1 1 4 50 (50)< 1 1 0 50 (50)< 1 1 9 43 (23)< 1 1 3 -(1)< 1 1715 40 (0)< 1 1 7 40 (0)< 1 1 7	46	43 (11)> 1 1 8 50 (35)> 1 1 32 37 (0)> 1 1 5 43 (35)> 1 1 34 27 (7)> 1 1 0 40 (2)> 1 1 9 40 (22)> 1 1 73 -(1)> 1 1715 50 (50)> 1 1 19 50 (50)> 1 1 42	24
English Japanese plaza	修正日時: 2017年 06月 23日(金曜日) 12:32	50 (35)< 1 1 8 23 (0)< 1 1 7	40	50 (50)> 1 1 8 23 (0)> 1 1 2	28

図7 学生による相互評価の結果

(5) 「終了」

ここで学生の評価が確定し、全学生が相互評価の結果を閲覧できるようになる。

以上、[ワークショップ]によるルーブリック評価について取り上げたが、いくつか課題もある。一つは、相互評価において評価者の名前が匿名にできないことがあげられる。本学の場合、昨年度まではコースの参加者については名前と学籍番号が表示されていたが、今年度からは学籍番号だけの表示となっている。しかし、学籍番号でも個人が特定される場合があり、学生同士の相互評価の際にトラブルとなる可能性もある。

もう一つは、[評価に対する評点]が他の評価者との相対的な比較のもとで算出されることがあげられる。たとえば、ある学生だけが提出された課題について詳細にチェックをして低評点を与え、以外の学生があまりチェックもせず平均的な評点を与えた場合、前者の学生の[評価に対する評点]が低くなる。その結果、学生から不満が生じる可能性がある。これらの課題については、今後のMoodleの改変に期待したい。

おわりに

筆者の「初年次演習」では、春学期からMoodleを常時使用してきた。その際に、教材コンテンツの配布や課題の回収だけでなく、アカデミックスキル習得における評価方法にも着目した。その中で、スキル評価には、ルーブリックが適していることが判明した。それとともに、ルーブリックの電子化を目指した。当初は、表計算ソフトを利用していたが、いろいろと手間がかかった。そこで、この手間を回避するために、Moodleによるルーブリック評価の実現に取りかかった。

[フィードバック]を用いたルーブリック評価では、ルーブリックのスプレッドシートを、Moodleのラジオボタンを並べた選択肢に単純変換する。これによって、教員による他己評価あるいは学生による自己評価ができる。[課題]を用いたルーブリック評価では、Moodleの[評定方法]のところで[ルーブリック]を指定することで、ルーブリックを用いた評価が可能になる。これによって、教員による他己評価ができる。[小テスト]を用いたルーブリック評価では、Moodleの[最大評点]と各[評点]の設定を工夫することで、直接Excelのレーダーチャートに変換することができる。これによって、学生の自己評価および相互評価ができる。

[ワークショップ]を用いたルーブリック評価では、Moodleの[評定方法]のところで「ルーブリック」を指定することによって、ルーブリックを用いた評価が可能になる。ワークショップと称していることから、パフォーマンス行動における学生同士の相互評価といった機能が提供されている。まさに、eルーブリックの実現ということができる。

現在、本学に導入されているMoodleのバージョンは3.1であるが、オープンソースであるが故に今後もいろいろな形で改変が進むことが期待される。それによって、我々の授業レベルも改善できる余地があるといえよう。

謝 辞

本報告は、科学研究費基盤研究(C)15K02728「反転授業評価モデルの開発」の補助に基づいて作成しました。

参考文献

- 1) 田中耕治編：よくわかる教育評価第2版，ミネルヴァ書房，2005年
- 2) 梶田毅一：改訂版 教育評価——学びと育ちの確かめ——，放送大学，1995年
- 3) 広辞苑第6版，岩波書店，2008年

- 4) 橋本重治：指導と評価「教育評価基本用語解説」, 日本教育評価研究会誌, 7月臨時増刊号(38), 1983年
- 5) 沖 裕貴：大学におけるルーブリック評価導入の実際, 立命館高等教育研究14号, pp. 71-90, 2014年
- 6) 濱名 篤：中央教育審議会大学教育部会濱名委員説明資料, 2011年
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/015/attach/1314260.htm
- 7) Dannelle D.Stevens, Antonia J.Levi: Introduction to RUBRICS, Second Edition, Stylus Publishing, LLC, 2013
- 8) Moodle Community driven, globally supported
<https://moodle.org/>
- 9) 井上博樹, 奥村晴彦, 中田 平：Moodle入門——オープンソースで構築するeラーニングシステム, 海文堂出版, 2006年
- 10) 河村一樹：e-Learningを用いたゼミナールにおける指導方略, 東京国際大学論叢商学部編, 第88号, pp. 83-104, 2013年
- 11) 加藤 大, 河村一樹：反転授業によるアカデミックスキルの初年次教育, 日本教育工学会第30回全国大会1p-02B-05, 2014年
- 12) 河村一樹：e-Learningによる反転授業の試み——演習(1)のアカデミックスキル教育での適用——, 東京国際大学論叢, 人間科学・複合領域研究, 第1号, pp. 99-117, 2016年
- 13) 河村一樹, 今井康博：大学における反転授業, 大学教育出版, 2017年
- 14) 古岡一志, 宇田川暢：Moodleワークショップモジュールのマニュアル作成と課題, 山口県立大学学術情報 第10号 [高等教育センター紀要 第1号], pp. 161-167, 2017年

卒業要件の確認スキームと Java アプリの構築

張 本 浩

Construction of a Scheme & a Java Application for Confirmation of Graduate Requirements

HARIMOTO, Hiroshi

abstract

The aim of the paper is to construct a scheme and a Java application for the senior students of the department of commerce to confirm whether they could meet graduation requirements by checking acquired curriculum subjects in the check sheets. For convenience, the primary target of the paper is limited to the curriculum of the department of commerce. It is, however, possible for you to construct some applications for other departments easily just to renew the titles and the names of curriculum subjects in the check sheets.

key words: Java application, confirmation of graduate requirement, department of commerce, curriculum subject, check sheet.

目 次

1. はじめに
2. カリキュラム体系と卒業要件
3. 情報処理の概要
 - 3.1 情報処理スキーム (information processing scheme)
 - 3.2 フレーム間の情報の流れ
4. Java プログラムと実行結果
 - 4.1 Java プログラム
 - 4.2 実行結果
5. おわりに

1. はじめに

本稿は、本学商学部の卒業年次の学生たちがブラウザ上のチェックシート（check sheet）のなかの単位取得済み科目をチェックすることによって卒業要件を満たしているかどうかを自身で確かめられるようにするアプリを構築することを目的としている。便宜上、商学部のカリキュラムのみを対象とするが、入力画面表示用のタイトルや学科目を入れ替えるだけで他学部用のアプリも容易に構築することができる。

2. カリキュラム体系と卒業要件

現在（2017年9月）、商学部のカリキュラムには、授業科目名で数えると、211の科目（TIUコア科目4、教養コア科目29、言語スキル科目34、自由選択科目25、専門100番台科目7、専門200番台科目38、専門300番台科目73、専門400番台科目1）が置かれ、授業科目区分ごとに卒業に必要な単位数が決められている。商学部ガイドブック（p. 74）に掲載されている卒業要件は次のとおりである。

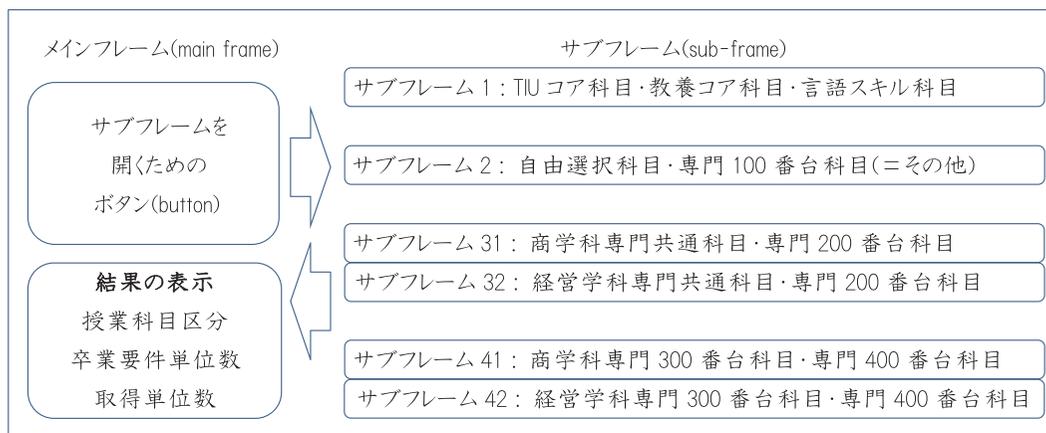
授業科目区分		卒業要件単位数	
必修	TIU コア科目	8	
選択	教養コア科目	20	
	言語スキル科目		
	学科内専門共通科目	4	12
	専門 200 番台科目	8	
	専門 300 番台科目および専門 400 番台科目	32	
その他		52	
合 計		124	

上記の卒業要件表で特記すべき事項は次の3点に絞られる。まず、「学科内専門共通科目」の中から4単位を超えて習得した単位は専門200番台科目の単位として扱われるとしている。次に、「その他」には「自由選択科目」、「専門100番台科目」、および「他学科・他学部履修科目」の中から習得した単位に、「教養コア科目、言語スキル科目、専門200番台科目、専門300番台科目および専門400番台科目」の中から規定以上に習得した単位を加えるとしている。最後に、他大学や他学部、および他学科で履修した授業科目の単位は60単位までを商学部の単位として認め「その他」の単位に算入されることになっている。

3. 情報処理の概要

3.1 情報処理スキーム (information processing scheme)

以上の卒業要件単位と特記事項を組み込み卒業判定を行うための基本フレームは下図のようにする。



- (1) メインフレームの該当ボタンをクリックするとサブフレームが開かれるようにし、各サブフレームに該当する履修学科目を配置する。
- (2) サブフレーム 1 には「TIU コア科目・教養コア科目・言語スキル科目」を配置し、サブフレーム 2 には「自由選択科目・専門 100 番台科目 (=その他)」を配置する。これらの科目は商学科と経営学科の共通科目であるので、それぞれ 1 つのフレームを設ける。
- (3) 商学部内の他学科履修科目の単位は「自由選択科目・専門 100 番台科目 (=その他)」の単位として加算しなければならないので、商学科と経営学科で設置科目の異なる「学科専門共通科目」、「専門 200 番台科目」、および「専門 300 番台科目および専門 400 番台科目」はそれぞれ 2 つのサブフレーム (商学科サブフレームと経営学科フレーム) を設ける必要がある。したがって、サブフレーム 3 とサブフレーム 4 にはそれぞれサブフレーム 31 (商学科)・サブフレーム 32 (経営学科) とサブフレーム 41 (商学科)・サブフレーム 42 (経営学科) を設ける。
- (4) 各サブフレームでそれぞれの分野の習得単位を求めメインフレームに引き渡した後、規定以上に習得した単位 (超過単位) を「自由選択科目・専門 100 番台科目 (=その他)」の単位に加算する。各学科における「その他」としての取得単位は以下の各項目で習得した単位の合計値となる。
 - ① 「自由選択科目・専門 100 番台科目 (=その他)」の中から習得した単位
 - ② 「教養コア科目・言語スキル科目」の中から規定以上に習得した単位
 - ③ 「学科内専門共通科目・専門 200 番台科目」の中から規定以上に習得した単位
 - ④ 「専門 300 番台科目および専門 400 番台科目」の中から規定以上に習得した単位
 - ⑤ 他大学・他学部・他学科で習得した単位

3.2 フレーム間の情報の流れ

メインフレーム (main frame) とサブフレーム (sub-frame) 間の情報の流れは以下のようにまとめられる。

まず、メインフレームからサブフレームを呼び出すと、該当する授業科目区分に属する授業科目がチェックボックス・リスト (checkbox list) の形で表示される。単位取得済みの科目にチェックを入れていくとその授業科目区分の総取得単位と、規定以上に取得した単位 (超過単位) がサブフレームの下の方に表示される。ここで、メインフレームの授業科目区分のボタンをクリックすると、先ほど開いていたサブフレームで求められた総取得単位と、超過単位がメインフレームに引き渡されメインフレームの下の方にそれらの単位が表示される。例えば、メインフレームで「《商学部共通》TIUコア科目・教養コア科目・言語スキル科目」のボタンをクリックすると、サブフレーム1が開かれ「TIUコア科目・教養コア科目・言語スキル科目」がすべて表示される。単位取得済みの科目にチェックを入れていくと、下の方に、①TIUコア科目の取得単位数、②教養コア科目+言語スキル科目の取得単位数、および③その他に回される単位数、が表示される。ここでメインフレームのいずれのボタンをクリックすると、先ほどのサブフレームで求められた単位数がメインフレームに引き渡されメインフレームの下の方の該当するテキストフィールドにそれらの単位数が表示される。

4. Javaプログラムと実行結果

4.1 Javaプログラム

```
//Graduate Requirements Confirmation Program
import java.awt.*;
import java.awt.event.*;
import java.applet.*;

<applet code=grache2.class width=850 height=800></applet>

public class grache2 extends Applet implements ActionListener{
    subFrame1 sf1;
    subFrame2 sf2;
    subFrame31 sf31;
    subFrame32 sf32;
    subFrame41 sf41;
    subFrame42 sf42;
    Font font, afont;
    Label step1=new Label("【Step 1】所属学科を選択せよ(初期値=商学科)");
    Button com=new Button("商学科");
    Button man=new Button("経営学科");
    Label step2=new Label("【Step 2】以下のボタンをクリックして各ページを開き単位習得済みの科目をチェックせよ");
    Button bt1=new Button("《商学部共通》TIUコア科目・教養コア科目・言語スキル科目");
```

```

Button bt2=new Button("《商学部共通》自由選択科目・専門100番台科目(=その他)");
Button bt31=new Button("《商学科》専門共通科目・専門200番台科目");
Button bt32=new Button("《経営学科》専門共通科目・専門200番台科目");
Button bt41=new Button("《商学科》専門300番台科目・専門400番台科目");
Button bt42=new Button("《経営学科》専門300番台科目・専門400番台科目");
String[] str1={"【授業科目区分・卒業要件単位数・取得単位数】",
               "■TIUコア科目",
               "■教養コア科目・言語スキル科目",
               "■自由選択科目・専門100番台科目(=その他)",
               "■学科内専門共通科目・専門200番台科目",
               "■専門300番台科目・専門400番台科目",
               "■合計取得単位数"};
String[] str2={" ", "(8単位以上)", "(20単位以上)", "(52単位以上)",
               "(12単位以上)", "(32単位以上)", "(124単位以上)"};
Label[] subj=new Label[str1.length];
Label[] unit=new Label[str2.length];
TextField[] tf=new TextField[str2.length];
Label step3=new Label("【Step 3】他大学・他学部で習得した総単位数を入力しエンターキー
                       を押下せよ⇒");
TextField other=new TextField(50);
Button bt5=new Button("【授業科目区分・卒業要件単位数・取得単位数】");
int[] result=new int[str2.length];
int[] limit={0, 8, 20, 52, 12, 32, 124};
int i, j, k, xPos, yPos;
int tiuScore, genLanScore, sonota, otherUnit;
int f1Score, s21Score, f1s21, f2Score, s22Score, f2s22;
int s31Score, s31ScoreA, s32Score, s32ScoreA;
int over1, over21, over22, over31, over32;

public void init(){
    //サブフレーム・オブジェクトの生成
    sf1=new subFrame1("■TIUコア科目・教養コア科目・言語スキル科目");
    sf1.setSize(1800, 1000);
    sf1.setLocation(800, 20);
    sf2=new subFrame2("■自由選択科目・専門100番台科目");
    sf2.setSize(1800, 1000);
    sf2.setLocation(800, 20);
    sf31=new subFrame31("■商学科専門共通科目・専門200番台科目");
    sf31.setSize(1800, 1000);
    sf31.setLocation(800, 20);
    sf32=new subFrame32("■経営学科専門共通科目・専門200番台科目");

```

```
sf32.setSize(1800, 1000);
sf32.setLocation(800, 20);
sf41=new subFrame41("■商学科専門300番台科目・専門400番台科目");
sf41.setSize(1800, 1000);
sf41.setLocation(800, 20);
sf42=new subFrame42("■経営学科専門300番台科目・専門400番台科目");
sf42.setSize(1800, 1000);
sf42.setLocation(800, 20);
font=new Font("serif", Font.PLAIN, 18);
setFont(font);
setLayout(null);
step1.setBounds(20, 20, 400, 40);
step1.setBackground(Color.black);
step1.setForeground(Color.white);
com.setFont(afont);
com.setBounds(30, 70, 380, 60);
com.setBackground(Color.yellow);
com.setForeground(Color.black);
man.setFont(afont);
man.setBounds(420, 70, 390, 60);
man.setBackground(Color.blue);
man.setForeground(Color.white);
step2.setBounds(20, 150, 750, 40);
step2.setBackground(Color.black);
step2.setForeground(Color.white);
bt1.setBounds(20, 200, 800, 40);
bt1.setBackground(Color.orange);
bt1.setForeground(Color.black);
bt2.setBounds(20, 250, 800, 40);
bt2.setBackground(Color.orange);
bt2.setForeground(Color.black);
bt31.setBounds(20, 300, 395, 40);
bt31.setBackground(Color.yellow);
bt31.setForeground(Color.black);
bt32.setBounds(420, 300, 400, 40);
bt32.setBackground(Color.blue);
bt32.setForeground(Color.white);
bt41.setBounds(20, 350, 395, 40);
bt41.setBackground(Color.yellow);
bt41.setForeground(Color.black);
bt42.setBounds(420, 350, 400, 40);
```

```
bt42.setBackground(Color.blue);
bt42.setForeground(Color.white);
step3.setBounds(20, 410, 670, 40);
step3.setBackground(Color.black);
step3.setForeground(Color.white);
other.setBounds(700, 410, 100, 40);
add(step1);
add(com); add(man);
add(step2);
add(bt1);
add(bt2);
add(bt31); add(bt32);
add(bt41); add(bt42);
add(step3); add(other);
bt5.setBounds(100, 470, 590, 60);
bt5.setBackground(Color.green);
bt5.setForeground(Color.black);
add(bt5);
xPos=100;
yPos=540;
for(i=1; i<str1.length; i++){
    subj[i]=new Label(str1[i]);
    subj[i].setBounds(xPos, yPos, 370, 30);
    subj[i].setForeground(Color.black);
    subj[i].setBackground(Color.white);
    subj[i].setAlignment(Label.LEFT);
    add(subj[i]);
    unit[i]=new Label(str2[i]);
    if(i == 6) unit[i].setBounds(xPos+370, yPos, 120, 30);
    else unit[i].setBounds(xPos+380, yPos, 120, 30);
    unit[i].setForeground(Color.red);
    unit[i].setBackground(Color.white);
    unit[i].setAlignment(Label.LEFT);
    add(unit[i]);
    tf[i]=new TextField(100);
    tf[i].setBounds(xPos+510, yPos, 80, 30);
    tf[i].setForeground(Color.black);
    tf[i].setBackground(Color.white);
    add(tf[i]);
```

```
        yPos+=35;
    }
    com.addActionListener(this);
    man.addActionListener(this);
    bt1.addActionListener(this);
    bt2.addActionListener(this);
    bt31.addActionListener(this);
    bt32.addActionListener(this);
    bt41.addActionListener(this);
    bt42.addActionListener(this);
    other.addActionListener(this);
} //The end of init()

public void actionPerformed(ActionEvent e){
    if(e.getSource()==com){
        sf1.setVisible(false);
        sf2.setVisible(false);
        sf31.setVisible(false);
        sf32.setVisible(false);
        sf41.setVisible(false);
        sf42.setVisible(false);
        k=0;
    }
    else if(e.getSource()==man){
        sf1.setVisible(false);
        sf2.setVisible(false);
        sf31.setVisible(false);
        sf32.setVisible(false);
        sf41.setVisible(false);
        sf42.setVisible(false);
        k=1;
    }
    else if(e.getSource()==bt1){
        sf1.setVisible(true);
        sf2.setVisible(false);
        sf31.setVisible(false);
        sf32.setVisible(false);
        sf41.setVisible(false);
        sf42.setVisible(false);
    }
}
```

```
else if(e.getSource()==bt2){
    sf1.setVisible(false);
    sf2.setVisible(true);
    sf31.setVisible(false);
    sf32.setVisible(false);
    sf41.setVisible(false);
    sf42.setVisible(false);
}
else if(e.getSource()==bt31){
    sf1.setVisible(false);
    sf2.setVisible(false);
    sf31.setVisible(true);
    sf32.setVisible(false);
    sf41.setVisible(false);
    sf42.setVisible(false);
}
else if(e.getSource()==bt32){
    sf1.setVisible(false);
    sf2.setVisible(false);
    sf31.setVisible(false);
    sf32.setVisible(true);
    sf41.setVisible(false);
    sf42.setVisible(false);
}
else if(e.getSource()==bt41){
    sf1.setVisible(false);
    sf2.setVisible(false);
    sf31.setVisible(false);
    sf32.setVisible(false);
    sf41.setVisible(true);
    sf42.setVisible(false);
}
else if(e.getSource()==bt42){
    sf1.setVisible(false);
    sf2.setVisible(false);
    sf31.setVisible(false);
    sf32.setVisible(false);
    sf41.setVisible(false);
    sf42.setVisible(true);
}
else if(e.getSource()==other){
```

```
sf1.setVisible(false);
sf2.setVisible(false);
sf31.setVisible(false);
sf32.setVisible(false);
sf41.setVisible(false);
sf42.setVisible(false);
otherUnit=Integer.parseInt(other.getText());
}
else{
    //brake;
}
over1=over21=over22=over31=over32=0;
//TIU コア科目の習得単位
result[1]=sf1.getTiuScore();
genLanScore=sf1.getGenLanScore();
if(genLanScore > 20){
    over1=genLanScore-20;
    genLanScore=20;
}
else over1=0;
result[2]=genLanScore;
sonota=sf2.getSonotaScore()+otherUnit;
//商学科専門共通科目・専門200番台科目の習得単位
f1Score=sf31.getF1Score();
s21Score=sf31.getS21Score();
f1s21=f1Score+s21Score;
//経営学科専門共通科目・専門200番台科目の習得単位
f2Score=sf32.getF2Score();
s22Score=sf32.getS22Score();
f2s22=f2Score+s22Score;
//商学科専門300番台科目・専門400番台科目の習得単位
s31Score=sf41.getS31Score();
//経営学科専門300番台科目・専門400番台科目の習得単位
s32Score=sf42.getS32Score();
//規定以上の習得単位
if(k == 0){//商学科の場合
    if(f1s21 > 12){
        over21=f1s21-12;
        f1s21=12;
    }
    if(s31Score > 32){
```

```

        over31=s31Score-32;
        s31Score=32;
    }
    result[3]=sonota+over1+over21+over31+f2s22+s32Score;
    result[4]=f1s21;
    result[5]=s31Score;
    result[6]=result[1]+result[2]+result[3]+result[4]+result[5];
}
else{// 経営学科の場合
    if(f2s22 > 12){
        over22=f2s22-12;
        f2s22=12;
    }
    if(s32Score > 32){
        over32=s32Score-32;
        s32Score=32;
    }
    result[3]=sonota+over1+over22+over32+f1s21+s31Score;
    result[4]=f2s22;
    result[5]=s32Score;
    result[6]=result[1]+result[2]+result[3]+result[4]+result[5];
}
repaint();
} //The end of actionPerformed()

public void paint(Graphics g){
    xPos=20;
    yPos=595;
    for(i=1; i<str1.length; i++){
        if(i == 4){
            if((f1Score >= 4 || f2Score >= 4) && (result[i] >= limit[i]))
                tf[i].setBackground(Color.green);
            else tf[i].setBackground(Color.white);
        }
        else{
            if(result[i] >= limit[i]) tf[i].setBackground(Color.green);
            else tf[i].setBackground(Color.white);
        }
        if(result[i] >=10) tf[i].setText(" "+result[i]);
        else tf[i].setText(" "+result[i]);
    }
} //The end of for()

```



```
        tiuBox[i]=new Checkbox(tiuCore[i]);
        tiuBox[i].setBounds(xPos, yPos, boxW, boxH);
        tiuBox[i].setForeground(Color.black);
        tiuBox[i].setBackground(Color.yellow);
        tiuBox[i].addItemListener(this);
        add(tiuBox[i]);
        xPos+=(boxW+5);
    }
    xPos=50;
    yPos+=35;
    //教養コア科目の表示
    head1.setBounds(xPos, yPos, boxW, 30);
    head1.setForeground(Color.white);
    head1.setBackground(Color.black);
    head1.setAlignment(Label.LEFT);
    head1.setVisible(true);
    add(head1);
    for(i=0; i<genNum; i++){
        if(i%5 == 0){
            xPos=50;
            yPos+=35;
        }
        genBox[i]=new Checkbox(genCore[i]);
        genBox[i].setBounds(xPos, yPos, boxW, boxH);
        genBox[i].setForeground(Color.black);
        genBox[i].setBackground(Color.yellow);
        genBox[i].addItemListener(this);
        add(genBox[i]);
        xPos+=(boxW+5);
    }
    xPos=50;
    yPos+=35;
    //言語スキル科目の表示
    head2.setBounds(xPos, yPos, boxW, 30);
    head2.setForeground(Color.white);
    head2.setBackground(Color.black);
    head2.setAlignment(Label.LEFT);
    head2.setVisible(true);
    add(head2);
    for(i=0; i<lanNum; i++){
        if(i%5 == 0){
```

```

        xPos=50;
        yPos+=35;
    }
    lanBox[i]=new Checkbox(lanSkill[i]);
    lanBox[i].setBounds(xPos, yPos, boxW, boxH);
    lanBox[i].setForeground(Color.black);
    lanBox[i].setBackground(Color.yellow);
    lanBox[i].addItemListener(this);
    add(lanBox[i]);
    xPos+=(boxW+5);
}
xPos=50;
yPos+=50;
// 選択結果表示用ラベルとテキストフィールドの表示
for(i=0; i<str1.length; i++){
    show[i]=new Label(str1[i]);
    tf[i]=new TextField(50);
    show[i].setBounds(xPos, yPos, 350, 30);
    tf[i].setBounds(xPos+355, yPos, 100, 30);
    add(show[i]);
    if(i != 0) add(tf[i]);
    yPos+=40;
}
} //The end of showSub1()

public void itemStateChanged(ItemEvent ie){
    int xPos=50, yPos=200, hei=30;
    tiuScore=genScore=lanScore=over=0;
    //TIU コア科目の習得単位 (tiuScore)
    for(j=0; j<tiuNum; j++){
        if(tiuBox[j].getState()){
            tiuScore+=tiuUnit[j];
            tiuBox[j].setBackground(Color.green);
        }
        else tiuBox[j].setBackground(Color.yellow);
    }
    //教養コア科目の習得単位 (genScore)
    for(j=0; j<genNum; j++){
        if(genBox[j].getState()){
            genScore+=genUnit[j];
            genBox[j].setBackground(Color.green);
        }
    }
}

```

```
    }
    else genBox[j].setBackground(Color.yellow);
}
//言語スキル科目の習得単位 (lanScore)
for(j=0; j<lanNum; j++){
    if(lanBox[j].getState()){
        lanScore+=lanUnit[j];
        lanBox[j].setBackground(Color.green);
    }
    else lanBox[j].setBackground(Color.yellow);
}
//TIU コア科目の習得単位の表示
if(tiuScore >= 8) tf[1].setBackground(Color.green);
else tf[1].setBackground(Color.white);
tf[1].setText(" "+tiuScore);
//教養コア科目・言語スキル科目の習得単位 (genLanScore) と
//規定以上習得した単位 (over) の表示
genLanScore=genScore+lanScore;
if(genLanScore > 20) over=genLanScore-20;
else over=0;
if(genLanScore >= 20) tf[2].setBackground(Color.green);
else tf[2].setBackground(Color.white);
tf[2].setText(" "+genLanScore);
tf[3].setText(" "+over);
repaint();
} //The end of itemStateChanged()
public void paint(Graphics g){
    //g.drawString("subFrame1", 20, 750);
}
public int getTiuScore(){
    return tiuScore;
}
public int getGenLanScore(){
    return genLanScore;
}
} //The end of subFrame1

class subFrame2 extends Frame implements ItemListener{
    int xPos=50, yPos=50;
    int i, j, k, n;
    int freScore, slScore, sonota;
```

```

Font font;
//自由選択科目
String[] freSelect={"インターンシップ入門","インターンシップ(体験型1単位)","インターンシップ(体験型2単位)","インターンシップ(実践学習型3単位)","インターンシップ(実践学習型4単位)","ボランティア活動(1回目)","ボランティア活動(2回目)","アカデミック・ライティング","地域の安全と警察","観光まちおこしワークショップ入門","観光まちおこしワークショップ実践A","観光まちおこしワークショップ実践B","観光まちおこしワークショップ実践C","留学準備(ASP Prep)","海外ゼミナールA","海外ゼミナールB","特別授業A","特別授業B","特別実習 I A","特別実習 I B","特別実習 II A","特別実習 II B","特別実習 III A","特別実習 III B","特別実習 IV A","特別実習 IV B","基礎科目特殊講義A","基礎科目特殊講義B"};

int[] freUnit={2,1,2,3,4,1,1,2,2,2,2,2,1,4,2,2,4,2,2,2,2,2,2,2,2,4};
int freNum=freUnit.length;
Checkbox[] freBox=new Checkbox[freNum];
//専門100番台科目
String[] s1={"簿記","簿記演習","公務員対策講座(教養)A","公務員対策講座(教養)B","公務員対策講座(教養)C","公務員対策講座(教養)D","公務員対策講座(教養)E","公務員対策講座(教養)F","公務員対策講座(教養)G","公務員対策講座(教養)H","公務員対策講座(教養)I","公務員対策講座(教養)J","公務員対策講座(教養)K","公務員対策講座(教養)L","税理士対策講座A","税理士対策講座B","数学入門","社会史A","社会史B"};

int[] s1Unit={4,2,2,2,2,2,2,2,2,2,2,2,2,2,4,4,4};
int s1Num=s1Unit.length;
Checkbox[] s1Box=new Checkbox[s1Num];
//チェックボックスのタイトル表示用ラベルの生成
Label head0=new Label("自由選択科目");
Label head1=new Label("専門100番台科目");
//結果表示用ラベルとテキストフィールドの生成
String[] str1=["取得単位数","■自由選択科目・専門100番台科目(=その他)"];
Label[] show=new Label[str1.length];
TextField[] tf=new TextField[str1.length];
//subFrame2のコンストラクター
subFrame2(String title){
    super(title);
    font=new Font("TimeNewRoman", Font.PLAIN, 18);
    setFont(font);
    setLayout(null);
    showSub2();
    addWindowListener(new WindowAdapter()){

```

```
        public void windowClosing(WindowEvent e){
            setVisible(false);
        }
    });
} //The end of subFrame2( )
```

```
public void showSub2( ){
    int xPos=50, yPos=80, boxW=330, boxH=30;
    //自由選択科目の表示
    head0.setBounds(xPos, yPos, boxW, 30);
    head0.setForeground(Color.white);
    head0.setBackground(Color.black);
    head0.setAlignment(Label.LEFT);
    head0.setVisible(true);
    add(head0);
    for(i=0; i<freNum; i++){
        if(i%5 == 0){
            xPos=50;
            yPos+=35;
        }
        freBox[i]=new Checkbox(freSelect[i]);
        freBox[i].setBounds(xPos, yPos, boxW, boxH);
        freBox[i].setForeground(Color.black);
        freBox[i].setBackground(Color.yellow);
        freBox[i].addItemListener(this);
        add(freBox[i]);
        xPos+=(boxW+5);
    }
    xPos=50;
    yPos+=35;
    //専門100番台科目の表示
    head1.setBounds(xPos, yPos, boxW, 30);
    head1.setForeground(Color.white);
    head1.setBackground(Color.black);
    head1.setAlignment(Label.LEFT);
    head1.setVisible(true);
    add(head1);
    for(i=0; i<s1Num; i++){
        if(i%5 == 0){
            xPos=50;
            yPos+=35;
        }
    }
}
```

```

    }
    s1Box[i]=new Checkbox(s1[i]);
    s1Box[i].setBounds(xPos, yPos, boxW, boxH);
    s1Box[i].setForeground(Color.black);
    s1Box[i].setBackground(Color.yellow);
    s1Box[i].addItemListener(this);
    add(s1Box[i]);
    xPos+=(boxW+5);
}
xPos=50;
yPos+=50;
for(i=0; i<str1.length; i++){
    show[i]=new Label(str1[i]);
    tf[i]=new TextField(50);
    show[i].setBounds(xPos, yPos, 370, 30);
    tf[i].setBounds(xPos+375, yPos, 100, 30);
    add(show[i]);
    if(i != 0) add(tf[i]);
    yPos+=40;
}
} //The end of showSub2()

public void itemStateChanged(ItemEvent ie){
    int xPos=50, yPos=200, hei=30;
    freScore=s1Score=sonota=0;
    //自由選択科目の習得単位 (freScore)
    for(j=0; j<freNum; j++){
        if(freBox[j].getState()){
            freScore+=freUnit[j];
            freBox[j].setBackground(Color.green);
        }
        else freBox[j].setBackground(Color.yellow);
    }
    //専門100番台科目の習得単位 (s1Score)
    for(j=0; j<s1Num; j++){
        if(s1Box[j].getState()){
            s1Score+=s1Unit[j];
            s1Box[j].setBackground(Color.green);
        }
        else s1Box[j].setBackground(Color.yellow);
    }
}

```

```
sonota=freScore+s1Score;
if(sonota >= 52) tf[1].setBackground(Color.green);
else tf[1].setBackground(Color.white);
tf[1].setText(""+sonota);
} //The end of itemStateChanged()
public void paint(Graphics g){
    //g.drawString("subFrame2", 20, 750);
}
public int getSonotaScore(){
    return sonota;
}
} //The end of subFrame2

class subFrame31 extends Frame implements ItemListener{
    int xPos=50, yPos=50;
    int i, j, k, n;
    int f1Score, s21Score, over;
    Font font;
    //商学科専門共通科目
    String[] f1Comm={"商学概論", "ファイナンス概論"};
    int[] f1Unit={4,4};
    int f1Num=f1Unit.length;
    Checkbox[] f1Box=new Checkbox[f1Num];
    //商学科専門200番台科目
    String[] s2={"基礎演習(2年春)", "基礎演習(2年秋)", "商業史", "貿易論", "経営学概論", "金融
        論", "国際経済学", "財政学", "公共経済学", "民法", "労働法", "国際法", "スポーツ
        産業論基礎", "生涯スポーツ論", "スポーツ英語", "スポーツ心理学基礎", "トレー
        ニング論", "会計学概論", "情報社会と情報論理", "ウェブアプリ論", "ソーシャル
        メディア論", "データベース論", "公務員対策講座(専門) A", "公務員対策講座(専
        門) B", "公務員対策講座(専門) C", "公務員対策講座(専門) D", "税理士対策講座
        C", "税理士対策講座 D", "ビジネス英語", "ビジネス中国語", "ビジネススペイン語"};
    int[] s2Unit={2,2,4,4,4,4,4,4,4,4,4,2,2,2,2,2,4,4,4,2,2,2,2,2,2,4,4,4};
    int s2Num=s2Unit.length;
    Checkbox[] s2Box=new Checkbox[s2Num];
    //チェックボックスのタイトル表示用ラベルの生成
    Label head0=new Label("商学科専門共通科目");
    Label head1=new Label("商学科専門200番台科目");
    //結果表示用ラベルとテキストフィールドの生成
    String[] str1={"取得単位数",
        "■商学科専門共通科目・専門200番台科目",
        "■その他に回される単位数"};
```

```

Label[ ] show=new Label[str1.length];
TextField[ ] tf=new TextField[str1.length];
//subFrame31 のコンストラクター
subFrame31(String title){
    super(title);
    font=new Font("TimesNewRoman", Font.PLAIN, 18);
    setFont(font);
    setLayout(null);
    showSub31( );
    addWindowListener(new WindowAdapter(){
        public void windowClosing(WindowEvent e){
            setVisible(false);
        }
    });
}
} //The end of subFrame31( )

```

```

public void showSub31( ){
    int xPos=50, yPos=80, boxW=330, boxH=30;
    //商学科専門共通科目
    head0.setBounds(xPos, yPos, boxW, 30);
    head0.setForeground(Color.white);
    head0.setBackground(Color.black);
    head0.setAlignment(Label.LEFT);
    head0.setVisible(true);
    add(head0);
    for(i=0; i<flNum; i++){
        if(i%5 == 0){
            xPos=50;
            yPos+=35;
        }
        flBox[i]=new Checkbox(flComm[i]);
        flBox[i].setBounds(xPos, yPos, boxW, boxH);
        flBox[i].setForeground(Color.black);
        flBox[i].setBackground(Color.yellow);
        flBox[i].addItemListener(this);
        add(flBox[i]);
        xPos+=(boxW+5);
    }
    xPos=50;
    yPos+=35;
    //商学科専門200番台科目

```

```
head1.setBounds(xPos, yPos, boxW, 30);
head1.setForeground(Color.white);
head1.setBackground(Color.black);
head1.setAlignment(Label.LEFT);
head1.setVisible(true);
add(head1);
for(i=0; i<s2Num; i++){
    if(i%5 == 0){
        xPos=50;
        yPos+=35;
    }
    s2Box[i]=new Checkbox(s2[i]);
    s2Box[i].setBounds(xPos, yPos, boxW, boxH);
    s2Box[i].setForeground(Color.black);
    s2Box[i].setBackground(Color.yellow);
    s2Box[i].addItemListener(this);
    add(s2Box[i]);
    xPos+=(boxW+5);
}
xPos=50;
yPos+=50;
for(i=0; i<str1.length; i++){
    show[i]=new Label(str1[i]);
    tf[i]=new TextField(50);
    show[i].setBounds(xPos, yPos, 350, 30);
    tf[i].setBounds(xPos+355, yPos, 100, 30);
    add(show[i]);
    if(i != 0) add(tf[i]);
    yPos+=40;
}
} //The end of showSub31( )

public void itemStateChanged(ItemEvent ie){
    int xPos=50, yPos=200, hei=30, total;
    flScore=s21Score=over=0;
    //商学科専門共通科目習得単位 (flScore)
    for(j=0; j<fl1Num; j++){
        if(fl1Box[j].getState()){
            flScore+=fl1Unit[j];
            fl1Box[j].setBackground(Color.green);
        }
    }
}
```

```

        else f1Box[j].setBackground(Color.yellow);
    }
    //商学科専門200番台科目習得単位 (s21Score)
    for(j=0; j<s2Num; j++){
        if(s2Box[j].getState()){
            s21Score+=s2Unit[j];
            s2Box[j].setBackground(Color.green);
        }
        else s2Box[j].setBackground(Color.yellow);
    }
    //商学科専門共通科目・専門200番台科目 (total)
    total=f1Score+s21Score;
    if((f1Score >= 4) & (total >= 12)) tf[1].setBackground(Color.green);
    else tf[1].setBackground(Color.white);
    if(total > 12) over=total-12;
    else over=0;
    tf[1].setText(""+total);
    tf[2].setText(""+over);
} //The end of itemStateChanged()
public void paint(Graphics g){
    //g.drawString("subFrame31", 20, 750);
}
public int getF1Score(){
    return f1Score;
}
public int getS21Score(){
    return s21Score;
}
} //The end of subFrame31

class subFrame32 extends Frame implements ItemListener{
    int xPos=50, yPos=50;
    int i, j, k, n;
    int f2Score, s22Score, over;
    Font font;
    //経営学科専門共通科目
    String[] f2Comm={"経営学概論", "会计学概論", "情報処理と情報倫理", "情報処理論"};
    int[] f2Unit={4,4,2,2};
    int f2Num=f2Unit.length;
    Checkbox[] f2Box=new Checkbox[f2Num];
    //経営学科専門200番台科目

```

```
String[] s2={"基礎演習(2年春)","基礎演習(2年秋)","商業概論","経営史","国際ビジネス論","ファイナンス概論","金融論","国際経済学","財政学","民法","スポーツ産業論基礎","中級簿記","工業簿記","中級簿記演習","工業簿記演習","ウェブアプリ論","ソーシャルメディア論","データベース論","経営科学","プログラミング基礎","公務員対策講座(専門)A","公務員対策講座(専門)B","公務員対策講座(専門)C","公務員対策講座(専門)D","税理士対策講座C","税理士対策講座D","ビジネス英語","ビジネス中国語","ビジネススペイン語"};

int[] s2Unit={2,2,4,4,4,4,4,4,4,4,2,4,4,4,4,2,2,4,4,4,4,2,2,2,2,2,4,4,4};
int s2Num=s2Unit.length;
Checkbox[] s2Box=new Checkbox[s2Num];
//チェックボックスのタイトル表示用ラベルの生成
Label head0=new Label("経営学科専門共通科目");
Label head1=new Label("経営学科専門200番台科目");
//結果表示用ラベルとテキストフィールドの生成
String[] str1={"取得単位数",
              "■経営学科専門共通科目・専門200番台科目",
              "■その他に回される単位数"};
Label[] show=new Label[str1.length];
TextField[] tf=new TextField[str1.length];
//subFrame31のコンストラクター
subFrame32(String title){
    super(title);
    font=new Font("TimesNewRoman", Font.PLAIN, 18);
    setFont(font);
    setLayout(null);
    showSub32();
    addWindowListener(new WindowAdapter(){
        public void windowClosing(WindowEvent e){
            setVisible(false);
        }
    });
}
//The end of subFrame32()
public void showSub32(){
    int xPos=50, yPos=80, boxW=330, boxH=30;
    //経営学科専門共通科目
    head0.setBounds(xPos, yPos, boxW, 30);
    head0.setForeground(Color.white);
    head0.setBackground(Color.black);
    head0.setAlignment(Label.LEFT);
    head0.setVisible(true);
    add(head0);
}
```

```
for(i=0; i<f2Num; i++){
    if(i%5 == 0){
        xPos=50;
        yPos+=35;
    }
    f2Box[i]=new Checkbox(f2Comm[i]);
    f2Box[i].setBounds(xPos, yPos, boxW, boxH);
    f2Box[i].setForeground(Color.black);
    f2Box[i].setBackground(Color.yellow);
    f2Box[i].addItemListener(this);
    add(f2Box[i]);
    xPos+=(boxW+5);
}
xPos=50;
yPos+=35;
//経営学科専門200番台科目
head1.setBounds(xPos, yPos, boxW, 30);
head1.setForeground(Color.white);
head1.setBackground(Color.black);
head1.setAlignment(Label.LEFT);
head1.setVisible(true);
add(head1);
for(i=0; i<s2Num; i++){
    if(i%5 == 0){
        xPos=50;
        yPos+=35;
    }
    s2Box[i]=new Checkbox(s2[i]);
    s2Box[i].setBounds(xPos, yPos, boxW, boxH);
    s2Box[i].setForeground(Color.black);
    s2Box[i].setBackground(Color.yellow);
    s2Box[i].addItemListener(this);
    add(s2Box[i]);
    xPos+=(boxW+5);
}
xPos=50;
yPos+=50;
for(i=0; i<str1.length; i++){
    show[i]=new Label(str1[i]);
    tf[i]=new TextField(50);
    show[i].setBounds(xPos, yPos, 350, 30);
```

```
tf[i].setBounds(xPos+355, yPos, 100, 30);
add(show[i]);
if(i != 0) add(tf[i]);
yPos+=40;
}
} //The end of showSub32( )

public void itemStateChanged(ItemEvent ie){
    int xPos=50, yPos=200, hei=30, total;
    f2Score=s22Score=over=0;
    //経営学科専門共通科目習得単位 (f2Score)
    for(j=0; j<f2Num; j++){
        if(f2Box[j].getState()){
            f2Score+=f2Unit[j];
            f2Box[j].setBackground(Color.green);
        }
        else f2Box[j].setBackground(Color.yellow);
    }
    //経営学科専門200番台科目習得単位 (s22Score)
    for(j=0; j<s2Num; j++){
        if(s2Box[j].getState()){
            s22Score+=s2Unit[j];
            s2Box[j].setBackground(Color.green);
        }
        else s2Box[j].setBackground(Color.yellow);
    }
    //経営学科専門共通科目・専門200番台科目習得単位 (total)
    total=f2Score+s22Score;
    if((f2Score >= 4) & (total >= 12)) tf[1].setBackground(Color.green);
    else tf[1].setBackground(Color.white);
    if(total > 12) over=total-12;
    else over=0;
    tf[1].setText(""+total);
    tf[2].setText(""+over);
} //The end of itemStateChanged( )

public void paint(Graphics g){
    //g.drawString("subFrame32", 20, 750);
}

public int getF2Score(){
    return f2Score;
}
}
```



```
super(title);
font=new Font("TimeNewRoman", Font.PLAIN, 18);
setFont(font);
setLayout(null);
showSub41();
addWindowListener(new WindowAdapter(){
    public void windowClosing(WindowEvent e){
        setVisible(false);
    }
});
} //The end of subFrame41()
```

```
public void showSub41(){
    int xPos=50, yPos=80, boxW=330, boxH=30;
    //学科内専門共通科目
    head0.setBounds(xPos, yPos, boxW, 30);
    head0.setForeground(Color.white);
    head0.setBackground(Color.black);
    head0.setAlignment(Label.LEFT);
    head0.setVisible(true);
    add(head0);
    for(i=0; i<s3Num; i++){
        if(i%5 == 0){
            xPos=50;
            yPos+=35;
        }
        s3Box[i]=new Checkbox(s3[i]);
        s3Box[i].setBounds(xPos, yPos, boxW, boxH);
        s3Box[i].setForeground(Color.black);
        s3Box[i].setBackground(Color.yellow);
        s3Box[i].addItemListener(this);
        add(s3Box[i]);
        xPos+=(boxW+5);
    }
    xPos=50;
    yPos+=50;
    for(i=0; i<str1.length; i++){
        show[i]=new Label(str1[i]);
        tf[i]=new TextField(50);
        show[i].setBounds(xPos, yPos, 350, 30);
        tf[i].setBounds(xPos+355, yPos, 100, 30);
    }
}
```

```

        add(show[i]);
        if(i != 0) add(tf[i]);
        yPos+=40;
    }
} //The end of dispSub41()

public void itemStateChanged(ItemEvent ie){
    int xPos=50, yPos=200, hei=30;
    s31Score=over=0;
    // 専門300番台科目 (s3Score)
    for(j=0; j<s3Num; j++){
        if(s3Box[j].getState()){
            s31Score+=s3Unit[j];
            s3Box[j].setBackground(Color.green);
        }
        else s3Box[j].setBackground(Color.yellow);
    }
    if(s31Score >= 32) tf[1].setBackground(Color.green);
    else tf[1].setBackground(Color.white);
    if(s31Score > 32) over=s31Score-32;
    else over=0;
    tf[1].setText(""+s31Score);
    tf[2].setText(""+over);
} //The end of itemStateChanged()
public void paint(Graphics g){
    //g.drawString("subFrame41", 20, 950);
}
public int getS31Score(){
    return s31Score;
}
} //The end of subFrame41

class subFrame42 extends Frame implements ItemListener{
    int xPos=50, yPos=50;
    int i, j, k, n;
    int s32Score, over;
    Font font;
    // 経営学科専門300番台科目
    String[] s3={" 専門演習 (3年春)", " 専門演習 (3年秋)", " 専門演習 (4年春)", " 専門演習 (4年秋)",
        " 卒業研究", " マーケティング論", " 流通論", " 経営管理論", " 経営戦略論", " 産業・
        組織心理学", " 制度と組織の経済学", " 中小企業論", " 経営組織論", " 生産管理論",

```

"異文化リーダーシップ論", "現代企業論", "人的資源管理論", "多国籍企業論", "起業論", "企業評価論", "企業研究", "ファイナンス論", "ベンチャーファイナンス論", "地域金融口座", "日本経済論", "社会経済システム論", "福祉の経済学", "都市経済論", "地域経済社会事情(中東)", "地域経済社会事情(東アジア)", "地域経済社会事情(人の移動と地域)", "会社法", "商取引法", "スポーツ産業論", "スポーツ管理論", "スポーツ組織論", "財務会計論", "財務分析論", "上級簿記", "国際会計論", "原価計算論", "会計監査論", "税務会計論", "管理会計論", "パソコン財務会計", "企業情報システム論", "ビジネスゲーム", "表計算プログラミング", "問題解決技法", "FP 3級資格講座", "FP2級資格講座", "中小企業診断士資格講座", "税理士対策講座 E", "税理士対策講座 F", "税理士対策講座 G", "税理士対策講座 H", "税理士対策講座 I", "税理士対策講座 J", "税理士対策講座 K", "税理士対策講座 L", "税理士対策講座 M", "税理士対策講座 N", "事業継承", "職業指導", "環境問題とビジネス", "交通論", "立地論", "専門外国書研究(英語)", "商学部特殊講義 A", "商学部特殊講義 B");

```
int[] s3Unit={2,2,2,2,4,4,4,4,4,4,4,4,4,4,4,4,4,4,2,4,4,2,4,4,4,4,4,4,4,2,2,2,2,2,2,4,4,4,4,4,4,2,2,2,4,4,2,4,2,2,2,2,2,2,2,2,2,2,2,4,4,2,4,2,2,4};
```

```
int s3Num=s3Unit.length;
```

```
Checkbox[] s3Box=new Checkbox[s3Num];
```

```
//チェックボックスのタイトル表示用ラベルの生成
```

```
Label head0=new Label(" 専門300番台科目");
```

```
String[] str1={"取得単位数",  
              "■専門300番台科目",  
              "■その他に回される単位数"};
```

```
Label[] show=new Label[str1.length];
```

```
TextField[] tf=new TextField[str1.length];
```

```
//subFrame41のコンストラクター
```

```
subFrame42(String title){  
    super(title);  
    font=new Font("TimeNewRoman", Font.PLAIN, 18);  
    setFont(font);  
    setLayout(null);  
    showSub42();  
    addWindowListener(new WindowAdapter(){  
        public void windowClosing(WindowEvent e){  
            setVisible(false);  
        }  
    });  
}
```

```
//The end of subFrame41()
```

```
public void showSub42(){
```

```
    int xPos=50, yPos=80, boxW=330, boxH=30;
```

```

//経営学科専門300番台科目の表示
head0.setBounds(xPos, yPos, boxW, 30);
head0.setForeground(Color.white);
head0.setBackground(Color.black);
head0.setAlignment(Label.LEFT);
head0.setVisible(true);
add(head0);
for(i=0; i<s3Num; i++){
    if(i%5 == 0){
        xPos=50;
        yPos+=35;
    }
    s3Box[i]=new Checkbox(s3[i]);
    s3Box[i].setBounds(xPos, yPos, boxW, boxH);
    s3Box[i].setForeground(Color.black);
    s3Box[i].setBackground(Color.yellow);
    s3Box[i].addItemListener(this);
    add(s3Box[i]);
    xPos+=(boxW+5);
}
xPos=50;
yPos+=50;
for(i=0; i<str1.length; i++){
    show[i]=new Label(str1[i]);
    tf[i]=new TextField(50);
    show[i].setBounds(xPos, yPos, 350, 30);
    tf[i].setBounds(xPos+355, yPos, 100, 30);
    add(show[i]);
    if(i != 0) add(tf[i]);
    yPos+=40;
}
} //The end of showSub42( )

public void itemStateChanged(ItemEvent ie){
    int xPos=50, yPos=200, hei=30;
    s32Score=over=0;
    //専門300番台科目 (s3Score)
    for(j=0; j<s3Num; j++){
        if(s3Box[j].getState()){
            s32Score+=s3Unit[j];
            s3Box[j].setBackground(Color.green);
        }
    }
}

```

```

    }
    else s3Box[j].setBackground(Color.yellow);
}
if(s32Score >= 32) tf[1].setBackground(Color.green);
else tf[1].setBackground(Color.white);
if(s32Score > 32) over=s32Score-32;
else over=0;
tf[1].setText(""+s32Score);
tf[2].setText(""+over);
} //The end of itemStateChanged()
public void paint(Graphics g){
    //g.drawString("subFrame42", 20, 750);
}
public int getS32Score(){
    return s32Score;
}
} //The end of subFrame42

```

4.2 実行結果

[メインフレーム]

【授業科目区分・卒業要件単位数・取得単位数】		
■TIUコア科目	(8単位以上)	0
■教養コア科目・言語スキル科目	(20単位以上)	0
■自由選択科目・専門100番台科目(=その他)	(52単位以上)	0
■学科内専門共通科目・専門200番台科目	(12単位以上)	0
■専門300番台科目・専門400番台科目	(32単位以上)	0
■合計取得単位数	(124単位以上)	0

このメインフレームで、(a) 商学科をクリックした後、(b) 「《商学部共通》TIUコア科目・教養コア科目・言語スキル科目」のボタンをクリックすると以下のサブフレームが開き、単位取得済み科目にチェックを入れるとフレームの下に該当科目の取得単位数が表示される。

[サブフレーム 1]

TIUコア科目・教養コア科目・言語スキル科目

初年次演習(春)	初年次演習(秋)	ICT基礎	大学生生活デザイン演習	キャリア・Reスタート
2 哲学	倫理学	芸術論	文学	こころ学入門
アジア・アラブ史	アメリカ・ヨーロッパ史	日本史	地理学概論	人文地理学
日本の文化	異文化概論	文化人類学	Introduction to American Society	Life & Tradition in America
法学	憲法	政治学	経済学	社会学
現代の社会	心理学概論	自然科学概論	環境と自然	科学思想史
統計学入門	情報処理の基礎	健康スポーツ科学	健康スポーツ実技(1科目)	健康スポーツ実技(2科目)
健康スポーツ実技(3科目)	健康スポーツ実技(4科目)	健康スポーツ実技(5科目)	健康スポーツ実技(6科目)	健康スポーツ実技(7科目)
健康スポーツ実技(8科目)				
2 Oral Communication	Reading & Writing	English Workshop	Media English	TOEIC
英語特論	Communication Basic I	Communication Basic II	English Comprehension I	English Comprehension II
Basic Speaking	Basic Writing	Advanced Speaking & Listening A	Advanced Speaking & Listening B	Advanced Speaking & Listening C
Advanced Reading & Writing A	Advanced Reading & Writing B	ドイツ語入門	実践ドイツ語	実践ドイツ語
フランス語入門	実践フランス語	スペイン語入門	実践スペイン語	中国語入門
実践中国語	ハンガール入門	実践ハンガール	ロシア語入門	アラビア語入門
日本語文章理解・表現 I	日本語文章理解・表現 II	日本語文章理解・表現 III	聴解・口頭表現 I	聴解・口頭表現 II
総合日本語 I	総合日本語 II	基礎日本語文法 A	基礎日本語文法 B	ビジネス日本語

取得単位数

- TIUコア科目: 6
- 教養コア科目+言語スキル科目: 16
- その他に回される単位数: 0

ここで、メインフレームの「《商学部》専門共通科目・専門200番台科目」のボタンをクリックすると、メインフレームの下の「授業科目区分・卒業要件単位数・取得単位数」のところに先ほどの「《商学部共通》TIUコア科目・教養コア科目・言語スキル科目」のサブフレームの下に表示された取得単位数がメインフレームの下の「授業科目区分・卒業要件単位数・取得単位数」のところに集計表示されると同時に、「《商学部》専門共通科目・専門200番台科目」のサブフレームが開示されるので、こでも単位取得済み科目にチェックを入れるとフレームの下に該当科目の取得単位数が表示される。

[メインフレーム]

アプレット・ビューア: grache2.class

アプレット

【Step 1】 所属学科を選択せよ(初期値=商学科)

商学科 | 経営学科

【Step 2】 以下のボタンをクリックして各ページを開き単位取得済みの科目をチェックせよ

《商学部共通》TIUコア科目・教養コア科目・言語スキル科目

《商学部共通》自由選択科目・専門100番台科目(=その他)

《商学科》専門共通科目・専門200番台科目 | 《経営学科》専門共通科目・専門200番台科目

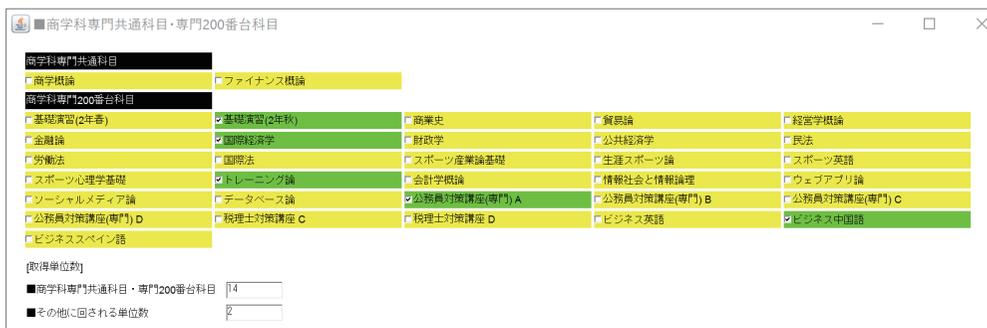
《商学科》専門300番台科目・専門400番台科目 | 《経営学科》専門300番台科目・専門400番台科目

【Step 3】 他大学・他学部で習得した総単位数を入力しエンターキーを押下せよ⇒

【授業科目区分・卒業要件単位数・取得単位数】

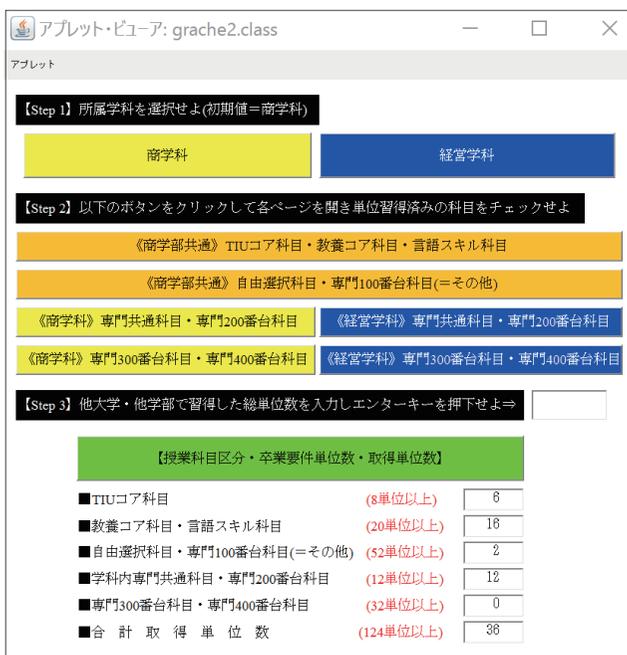
TIUコア科目	(8単位以上)	6
教養コア科目・言語スキル科目	(20単位以上)	16
自由選択科目・専門100番台科目(=その他)	(52単位以上)	0
学科内専門共通科目・専門200番台科目	(12単位以上)	0
専門300番台科目・専門400番台科目	(32単位以上)	0
合計取得単位数	(124単位以上)	22

[サブフレーム31]



ここで、メインフレームの「《商学部》専門300番台科目・専門400番台科目」のボタンをクリックすると、いままでチェックしたすべての単位取得済み科目の取得単位数がメインフレームの下の「授業科目区分・卒業要件単位数・取得単位数」のところに集計表示されると同時に、「《商学部》専門300番台科目・専門400番台科目」のフレームが開示される。

[メインフレーム]



[サブフレーム 41]

■商学科専門300番台科目・専門400番台科目				
■専門300番台科目				
■専門演習(3年春)	■専門演習(3年秋)	■専門演習(4年春)	■専門演習(4年秋)	■卒業研究
■マーケティング論	■流通論	■マーケティングコミュニケーション論	■マーケティングリサーチ	■マーケティング戦略論
■消費者行動論	■商業・流通政策	■製品ブランド論	■貿易実務	■グローバルマーケティング論
■リレーションシップマーケティング	■経営管理論	■経営戦略論	■ファイナンス論	■金融システム論
■国際金融論	■ベンチャーファイナンス論	■ファイナシャルプランニング論	■ファイナシャルマーケット論	■地域金融口座
■日本経済論	■産業経済論	■社会経済システム論	■福祉の経済学	■都市経済論
■地域経済社会事情(中東)	■地域経済社会事情(東アジア)	■地域経済社会事情(人の移動と地域)	■会社法	■行政法
■手形・小切手法	■商取引法	■スポーツ産業論	■スポーツ管理論	■スポーツ組織論
■財務会計論	■財務分析論	■管理会計論	■企業情報システム論	■FP3級資格講座
■FP2級資格講座	■中小企業診断士資格講座	■税理士対策講座E	■税理士対策講座F	■税理士対策講座G
■税理士対策講座H	■税理士対策講座I	■税理士対策講座J	■税理士対策講座K	■税理士対策講座L
■税理士対策講座M	■税理士対策講座N	■事業継承	■職業指導	■環境問題とビジネス
■交通論	■立地論	■専門外国語研究(英語)	■商学部特殊講義 A	■商学部特殊講義 B

取得単位数

■専門300番台科目

■その他に回される単位数

5. おわりに

前節のプログラムは以下の点で拡張可能である。

- プログラムの処理対象は「商学部2016年度以降入学の学生」を対象とするカリキュラムであり、実用のためには「2015年度以前入学の学生」を対象とするカリキュラムの内容を反映する必要がある。
- プログラムでは商学部の2学科のカリキュラムに含まれている諸科目が網羅されているので商学部の他学科の単位取得済み科目の単位計算には問題ないが、他大学および本学商学部以外の他学部の諸科目は含まれておらず、他大学と他学部で履修し単位取得した科目の単位は初期画面で直接数字入力するようになっている。したがって、実用上せめて他学部のカリキュラムに載っている諸科目まで取り扱えるようにすることが望まれる。

前節のプログラムは筆者のWebページ「<http://www2.tiu.ac.jp/~harimoto/>」からダウンロード可能であるので、応用的Javaプログラムの開発に関心のある人は筆者のWebページからプログラムをダウンロードし上記の拡張可能事項を組み込んだプログラムを開発されたい。

参考文献

- 1) 深井裕二『Java人工知能プログラミング』三恵社, 2016年.
- 2) 水野信也・中田 誠・上杉徳彦・永田正樹『Java GUI編』静岡学術出版, 2011年.
- 3) 森崎雅稔『最新Java コーディング作法』日経BP社, 2011年.
- 4) プライアン・ゲーツ, ダグ・リー『Java並行処理プログラミング』Soft Bank Creative, 2010年.
- 5) 伊藤俊秀・草薙信照『コンピュータ・シミュレーション』Ohmsha, 2006年.
- 6) 児玉公信『モデリングの本質』日経BP社, 2004年.
- 7) 峯村吉泰『コンピュータ・グラフィックス』森北出版, 2003年.
- 8) 速水治夫, 宮崎収兄, 山崎清明『データベース』Ohmsha, 2002年.
- 9) J. G. ヒューズ『オブジェクト指向データベース』サイエンス社, 1998年.
- 10) ティモシー A・パッド『オブジェクト指向プログラミング入門』アジソン・ウェスレイ, 1997年.

- 11) Daniel Shiffman, *Nature of Code*, Born Digital Inc. 2014.
- 12) Kirk Knoernschild, *Java Application Architecture*, Prentice Hall, 2012.
- 13) Robert Sedgewick, *Algorithms in Java*, Princeton University Press, 2010.
- 14) Cay S. Horstmann/Gary Cornell, *Core Java 2: Volume II-Advanced Features*, ASCII, 2006.
- 15) John. G. Hughes, *Object Oriented Database*, Science, 1998.

研究ノート

ローマへー「聖セバスチャン」のアイコノグラフィー
——三島事件の心的機序の研究③——

安 岡 真

**To Rome—Iconography of “St. Sebastian”:
A Study of the Psychological Mechanism
of the Mishima Incident ③**

YASUOKA, Makoto

Abstract

Yukio Mishima, one of the greatest novelists of post-war Japan, committed suicide (happy dispatch) on November 25, 1970. This has astounded his readers in Japan as well as readers abroad since the date of his death. What drove him to this horrific final act? The author of this paper hypothesized that Mishima was tortured over his evading conscription into the Japanese Army for medical reasons, and published the academic paper based upon this hypothesis in 2015. Furthermore, the author observed the importance of his 6-month long journey throughout the North and South America into Europe, which was done since the end of 1951 until the spring of 52, and discussed that Mishima had embraced a strong desire of life deeply in his mind. This means, inside of Mishima's existence, there was a strange and complex desire of living and dying at the same time. This recognition brought a fruit of one other academic paper, which was published in 2016. This new paper named 'To Rome-Iconography of "St. Sebastian"' deals with Guido Reni's 'St. Sebastian' that became, according to Mishima's 'Confessions of a Mask', an object of 13 year-old Mishima's first masturbation and analyzes how it meant to visit from Greece to Rome and appropriate ancient Greek ruins and drawings and sculptures of Rome for the novelist's existence. This is the newest and third edition by the author dealing with the Mishima Incident.

Reviewed by Ted Ribakowsky, Master of Arts, New York University

Key Words: Yukio Mishima, Mishima Incident, Confessions of a Mask, November 25, 1970, St. Sebastian, Guido Reni.

キーワード：三島由紀夫、三島事件、「仮面の告白」、1970年11月25日、ガイド・レーニ、聖セバスチャン

目 次

1. 廃墟
2. 直感
3. デルフィへ
4. 三島の性
5. ローマへ
6. 聖アントニオ
7. 崩壊の主題
8. 動乱の日本
9. リゴレットを聴く
10. ルネサンスとの出会い
11. ガイド・レーニ
12. ある疑問
13. 聖セバスチャンは実在したか
14. エロスの裏にあるもの
15. 幼児期コンプレックス
16. 三島由紀夫の「自己投影衝動」
17. 「見られる」作家
18. 「薔薇刑」
19. 周遊の果て
20. 旅の重さ

1. 廃墟

わずか4日だったとは言え、半年に及ぶこの長い世界周遊旅行で、やっとアテネに旅装を解くことができた。太陽と廃墟の王土、ギリシア悲劇を生んだ地を前にして、この後年の劇作家は、旅の疲れもものかは、こう呟いた、「希臘は私の眷恋の地である」¹⁾と。

貴重な4日間であった。

エリニコン国際空港から市内へと向かうバスの窓から初めてアクロポリスを目にした三島は、今で言うとライトアップされたこの王城を見て、またも興奮気味につぶやいた、「私は無上の幸に酔っている」と。

「私は今日ついにアクロポリスを見た！パルテノンを見た！ゼウスの宮居を見た！巴里で経済的窮境に置かれ、希臘行を断念しかかっていたころのこと、それらは私の夢にしばしば現われた。」だから「しばらくの間、私の筆が踊るのを恕してもらいたい。」²⁾

春であった。しかしエーゲ海に面し、これから乾期へ向かおうとするこの半島の空はあくまでも大きく、青く、どちらかと言えば精神に仄暗い穴を抱えていたこの作家に圧倒的な存在感を

もって襲いかかってきた。青い、この大きな存在が、作家みずからの認識を深めていく緒になっていく。

1952年4月24日のことだった。空は、この国のどの季節のどの一日ともおなじように、澄み渡っていた。エーゲ海の太陽が燦々と降りそそぎ、大量のオレンジ色があたりを包みこんだ。およそギリシアを表すどの写真も強調する、青と白の氾濫。それを前にして三島が「空の絶妙の青さは廃墟にとって必須のものである」と書いたのは当然だろう。旅人の目を三島は獲得していた。「パルテノン神殿の円柱（写真1）のあいだにこの空の代りに北欧のどんよりした空を置いてみれば、効果はおそらく半減するだろう。あまりその効果が著しいので、こうした青空は、廃墟のために予め用意され、その残酷な青い静謐は、トルコの軍隊によって破壊された神殿の運命を、予見していたかのようにさえ思われる。」³⁾ 心の内奥に「肉体の危険」と「精神の危険」を抱え込み、⁴⁾ 自覚的かどうかは別にして、裡にある分裂を何とかして取り繕おうと苦しんでいた三島は、廃墟をひととき強調するような青空にのしかかられて、それを「残酷な青い静謐」と観取する視点にいま立ち至った。おそらく自覚的だったのだろう。かの有名なディオニュソス劇場を見て、「ここではソフォクレスやエウリピデースの悲劇がしばしば演ぜられ、その悲劇の滅尽争(vernichteter Kampf ママ)を、同じ青空が黙然と見成っていたのである。」と書いている。青空によって際立つ廃墟、王土を破壊し尽くさずには置かなかった国の歩み、三島のアテネはこうして悲劇の舞台となり、これがギリシアを歩く作家の主調音となっていく。

「廃墟として見れば、むしろ美しいのは、アクロポリスよりもゼウスの宮居である。これはわずか十五基の柱を残し、その二本はかたわらに孤立している。中心部とこの二本との距離はほぼ五十米である。二本はただの孤立した円柱である。のこりの十三本は残された屋根の樑を支えている。この二つの部分の対比が、非左右相称の美の限りを尽しており、私ははからずも竜安寺の石庭の配置を思い出した。」⁵⁾



写真1 パルテノン神殿の円柱

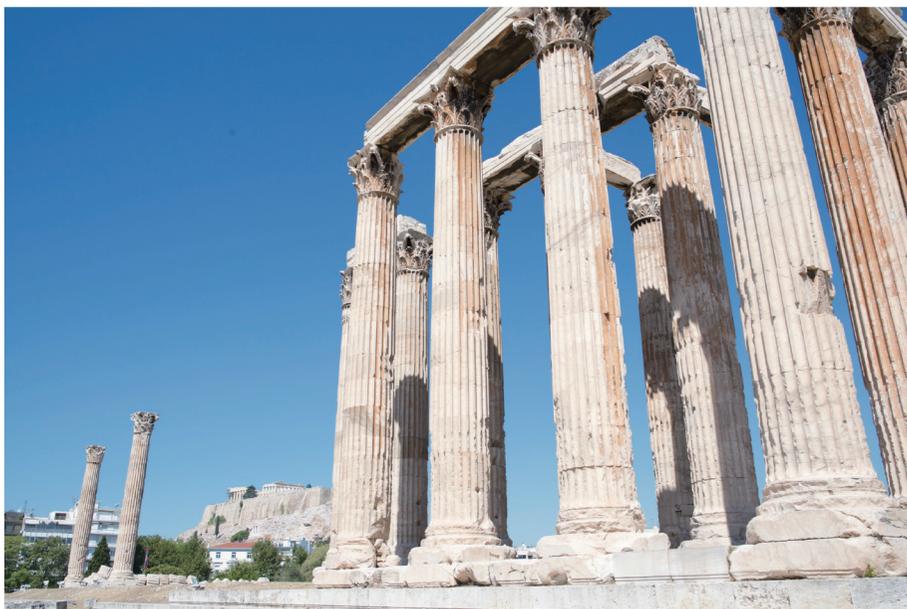


写真2 ゼウスの旧居跡



写真3 竜安寺石庭

非左右相称という点でゼウス神殿（写真2）の構造と竜安寺の石庭（写真3）の配置が似ているかどうか、私はよく知らないが、「巴里で…左右相称に疲れ果てた」という三島には、このアンバランスが心地よかったのだろう。作家の筆はしばらくパリへの批判に割かれ、ついには「仏蘭西人の愛する節度と方法論的意識性」だの、「いたるところで左右相称を誇示」する「節度

の過剰」が「旅行者（筆者註、三島）の心を重たくする」とまで言っている。この「節度の過剰」が自分の心に重くのしかかってきたとする観察は、検討するに値する興味深い認識であると言わねばならない。なぜなら、パリで人馬一体となった曲芸を見て「肉体の危険」と「精神の危険」の対立を感じ、「もし「曲芸師が綱から落ち」るようにわれわれが自ら精神の平衡を失」ったら、それは目に見える出来事ではないだけに「危険は多くかつ（結果は）重大」である⁶⁾と感じた三島にとって、パリはみごとに平衡しバランスの取れた精神の象徴と映ったに違いないから。精神の「分裂」を自覚していた三島にとって、その認識は過剰でかつ心を重くするイメージであった。だが翻って見てみるがいい、いま目の前に堂々とそびえ立つゼウスの宮居、そのギリシアの「死体」を。その「死体」はいま青々とした半島の蒼穹につつまれてこれが建造された時代よりむしろ美しいまでの姿をそこに示している。この生から死、死から生へと転生した偉容、遠く離れた二本の柱と十三基の円柱となったこの廢墟のアンバランスが深いところで三島の心に火をともしたのは事実であろう。

こうして「眷恋の地」ギリシアで、三島は恋の確かさに酔ったのである。悲劇とそれを呼ぶことは容易いが、精神がふたつながら分裂していたことを自覚していた三島にとって、それはむしろ「救い」であった。ゼウスの宮居の死のイメージは作家の中で意味を転じ、ローマ皇帝ハドリアヌスのもくろみであった最高神ゼウスを讃えた美の殿堂の造営から、死んだ骸がむくりと起き出していまそこに聳えてある再生の象徴として、深々と認識された……。

人として、作家として、三島はどちらかと言えば二元論の立場に立つものであった。この二元論の礎をなす思想が、三島の中にいつからか芽生えた生と死の相剋であったのは、おそらくは伝記的事実を積み重ねれば論証されうる作家の真実に他なるまい。⁷⁾ 左右相称を嫌い、非相称＝アンバランスの中に美と安寧を見る三島のこの感覚、この「欠落した」平衡を何とかしてバランスしたい、統合したいという欲動が、つまりは作家の生の原動力をなしたことは疑いない。

「巴里で私は左右相称に疲れ果てた」と三島は書いている。続けて、こう書いた。「その仏蘭西文化の「方法」の師は希臘であった。希臘は今、われわれの目の前に、この残酷な青空の下に、廢墟の姿を横たえている。しかも建築家の方法は形を変えられ、旅行者（筆者註、三島）はわざわざ原形を思いえがわずに、ただ廢墟としての美をそこに見出だす。

オリムピアの非均斉の美は、芸術家の意識によって生まれたものではない。⁸⁾ その後三島は竜安寺の石庭の左右非相称の美に触れ、方法に頼らない日本美の「一回的 (einmalig) な」性質に言及し、方法による西欧の美と、「芸術家の意識の限りを尽くし」その意味で「方法的であるよりは」むしろ「行動的」な日本美との対比へと論を展開していく。これは作家が日本浪漫派に属する以上当然のことなのだが、日本の芸術を「美」と見なし、その美を生みなす源泉に「行動」という観念を配置した三島の心性は、その後の作家の生と死の歩みを思う時、ひどく興味深く思われる。

こうして、美＝左右非相称（アンバランス）＝行動という、三島を形作るイメージの円環が出来あがった。1970年11月17日の日付であるから、市ヶ谷乱入事件よりホンの8日前のこと、三島は学習院時代の恩師で文学上のメンターであった国文学者、清水文雄へ宛てて、こんな手紙を書いている。「戦後の「日本」が、小生には、可哀想な若い未亡人のやうに思はれておりました。そしてこの見かけの平和の裡に、癌症状は着々進行し、失つたら二度と取り返しのつかぬ「日本」は、無視され軽んぜられ、蹂躪され、一日一日影が薄くなつてゆきます。」「良人といふ權威に去られ、よるべなく身をひそめて生きてゐる未亡人のやうに。下品な比喩ですが、彼女はまだ若かつたから、日本の男が誰か一人立上がれば、彼女をもう一度女にしてやることができたのでした」。⁹⁾ 失われつつあり、蹂躪され、二度と取り返しのつかぬ「美」、影が薄くなった「美」として、「日本」

を「幻視」していた（と書くより他あるまい）三島の表象界のその奇妙な主調音を、ここには聞き取ることが出来るだろう。

2. 直感

三島はこのギリシア理解を「直感の探りあてた究極の美の姿」と説明している。おそらく学習してから訪れた旅ではなかったのだろう。ギリシアの美を「廃墟の美」と認識し、「芸術家の抱くイメージは、いつも創造にかかわると同時に、破滅にかかっている」と受けとめたその三島が、みずからの認識の根底に「直感」を置いているのは、作家がいかにか自己深く美＝廃墟＝破滅という衝迫を抱えていたかを証し立てるものだ。だから「芸術家は創造にだけ携わるのではない。破壊にも携わるのだ」……「その創造は、しばしば破滅の予感の中に生れ、何か究極の形のなかの美を思いえがくときに、えがかれた美の完全性は、破滅に対処した完全さ、破壊に対抗するために破壊の完全さを模したような完全さである場合がある。」¹⁰⁾ という描写の、心中奥深いところにあった意思の何かは、重い意味を有しているように思われる。この「アポロの杯」は、「仮面の告白」発表の3年後の作品であった。

三島の頭上で太陽がギラギラと輝いていた。

オリムピアの廃墟でこのような自己を発見した三島の眼には、「開かれた」旅人らしい自由な観照が、ギリシアの陽光とともに照り映えていた。だから、オリムピアの「廃墟や断片がなおも美しいことは、ひとえに全体の結構が左右相称の方法に拠っている点に懸っている」という一文など、むしろご愛敬だろう。三島はさらに廃墟という言葉を鍵にパルテノンを、エレクトウム（ママ）を、アクロポリスを眺め、その感動を、「悟性の陶醉」を口にする。よほど廃墟が性に合ったのか、初めて海外の土を踏んだ昔日の留学僧さながらの邪気のない興奮につつまれている。

「しかもなお原形のままのそれらを見るときの感動を想像してみて、廃墟の与える感動がこれにまさるように思われるのは、それだけの理由からではない。希臘人の考え出した美の方法は、生を再編成することである。自然を再組織することである。ポオル・ヴァレリイも、「秩序とは偉大な反自然的企劃である」と言っている。廃墟は、偶然にも、希臘人の考えたような不死の美を、希臘人自身のこの絆しめから解放したのだ。」¹¹⁾

生＝自然＝美と、それらを絆しめから解放する廃墟という今一つの円環がここには読み取れる。

三島は幸せだった。なぜなら生を絆しめから解放した廃墟という観照を得たのだから。アクロポリスから見えるギリシアの山々、東方のリュカベツス山（ママ）、北方のパルナッソス山、眼前のサラミスの島は作家の目には「翼」と映った、羽搏いている翼と。

「それらの翼は、廃墟の失われた部分に生えたのである。残された廃墟は石である。失われた部分において、人間が翼を得たのだ。ここからこそ、人間が羽搏いたのだ。／絆しめをのがれた生が、神々の不死の見えざる肉体を獲て、羽搏いているさまを、われわれはアクロポリスの青空のそこかしこに見る。大理石のあいだから、真紅の罌粟が花をひらき、野生の麦や芒が風になびいている。ここの小神殿のニケが翼をもたなかったのは、偶然ではない。その木造の翼なきニケ像は失われた。つまり彼女は翼を得たのだ。」¹²⁾

かつてそこに在り、いまは失われた木製のアテナ・ニケ像はアテナイを逃げ出さないように翼をもがれたのだ。そのニケの姿を幻視して「翼を得」て飛び去ったと見る三島の想像力は、なる

ほどアテネの青空を自由に遊んでいたと見るべきだろう。

つまりは旅人の想像力をたなごころにしていた。この世界周遊の旅が三島の精神に深々と働きかけ、それにカタルシスを与え、廃墟＝転生を鍵概念にしてふたつに割れた作家の裡の、そのひび割れを埋め合わせる役割を果たしたことは、次に訪れたローマでルネサンスを「発見」する雷汞（きっかけ）となったという意味で、まさに決定的な道行きであったと言える。もっとも、そのローマで三島がつぶさに観察したルネサンス美術がひいては彼の生と死に暗い影を落としたことも事実なのだが。

3. デルフィへ

午前の2時間をディオニューソス劇場で過ごした三島は、翌日、デルフィへと出立する。

朝日新聞社版「日本・世界地図帳」をいま試みに開いてみると、古都デルフィはバルカン半島のちょうど真ん中あたり、東にパルナッソス山、南にコリントス湾を臨み、首都アテネから西北に140キロほど行った世界遺産の町である。バスだと3時間ほどの距離かと思うが、この当時で5、6時間を必要とし、そこを三島の一行が訪れた時は、「出発間もなく起きた故障のおかげで、延々十時間を要することになった」と。

ひどくまどろっこしい旅だった。

「バスは何度故障を起しても、また執拗に動き出し、しまいには十ヤアド乃至二十ヤアドおきに止るのであった。大した勾配ではないが止るたびに車はずらずと後戻りする。と髭を蓄えた助手が、大義そうに車を下りて、大きな石を抱えて来て、滑り止めのためにこれをタイヤのうしろに据える。この原始的な儀式が際限もなく繰り返されたのち、どうした加減か、エンジンは急に立直り、薄暮のころデルフィに到着することができた……（後略）」¹³⁾

朝の7時にアテネのシャトオブリアン街29番地を経ったのだ。さぞかし疲労困憊したことであろう。だが三島はむしろこのバス旅を楽しんでいた。おんほろバスのノロノロ運転があたりに広がる土壁の民家を観察するゆとりを与えてくれた他、思いがけず、二人の友と出会ったのだから。「行程のほぼ三分の二のところにあるレヴァディアの町」で、

「レヴァディアの町で、私は二人の小さい友を得た。かれらは従兄弟同士で姓も同じミトロポウロスといい、一方の父親につれられて、私と同じバスでデルフィよりもっと遠くへ一晩泊りの遠足に行くところである。かれらは二人とも十二歳で、快活で、利巧そうで、日本の子供のように学校がきらいではない。イムペリアル・ミッション・スクールへ通っており、バスケット・ボールが好きで、「古橋」の名を知っている。かれらは私の案内書の略図に、山と河の名を書き入れてくれた。同じ年頃の私には、日本地図に利根川の気儘な曲線を書き入れることは、到底できない芸当であった。

「バスの出発の合図があったので、かれらはバスのほうへかけ出した。私がおくれて行くと、一人がふりかえって「Run, please!」と叫んだ。何という奇妙な、可愛らしい英語であろう！」¹⁴⁾

4. 三島の性

ここで三島の性について一言しておく。性はこの「アポロの杯」のモチーフではない。この旅

行記「アポロの杯」は、明喩としても隠喩としても、セクシュアリティを匂わせる描写はない。27歳の三島は少なくとも性については、それとは離れたところで、この旅を旅している。この二人のミトロポウロスも「稚児」のニュアンスはない。だがむしろこのあと訪れたローマで、性はその凶暴な刃を作家の脇腹に押しつけてくる。ルネサンスが三島にもたらした、それが性の、つまりは生=崩壊の効用であった。

東にバルナツス山、南にコリント（コリンティアコス）湾を臨む広大な遺跡の町デルフィは「峨々たるバルナツス」と三島が言うように山がちな「レヴァディアの町からは、丘のいただきのビザンチン様式の教会が見え、その彼方に雪をいただいた峨々たるバルナツスを見ることができ」「そのバルナツスの麓、パイドリアドスの断崖の下にデルフィがある」とされる古代のポリス（都市国家）、生命賛美を歌いあげた古の文明の、全盛期を偲ばせる町である（写真4）。

三島は左腕の失われた有名な青銅の馭者像（写真5）を事細かに描写しながら、みずからの裡にある「美への純良な憧れ」に思いを馳せた。当時は戦車だった馬を操る等身大の若者、左腕こそ失われているものの、その姿を彫り込んだギリシア彫刻最高傑作のひとつである。

「（その馭者像の）上半身には見事な若者の首と、肩と胸との変化に富んだ花やかな襷と、さし出された下膊があり、この複雑な重い上半身に対比されて、故意に長くつくられた下半身が、単調で端正な襷だけで構成されているのは、すぐれた音楽を目から聞くかのような感動を与える。ここでは様式が真実と見事に歩調をあわせ、えもいわれぬ明朗な調和が全身にゆきわたっている。」¹⁵⁾

性は「アポロの杯」のモチーフではないと書いたが、この青銅の馭者は三島の中でいずれその対象へと意味を変え、成長し、記憶するに値する変貌ぶりを示す。以下、「憂国」から、次の一節を引いてみると――



写真4 デルフィ遺跡群

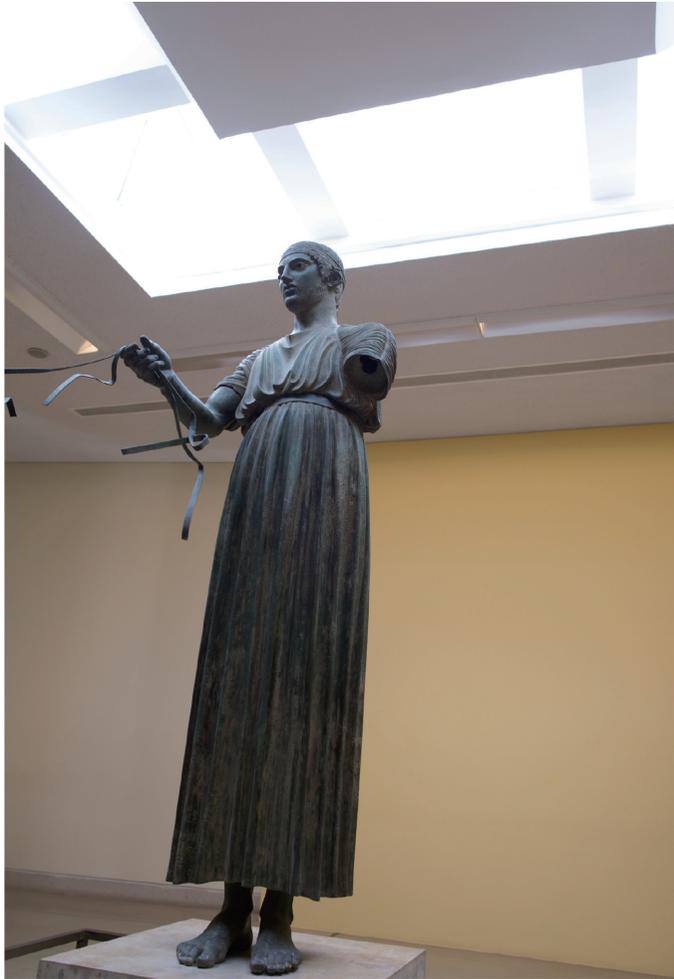


写真5 青銅の馭者像

「……彼女は引き離して、その男らしい顔を眺めた。凜々しい眉、閉ざされた目、秀でた鼻梁、きりりと結んだ美しい唇、……青い剃り跡の頬は灯を映して、なめらかに輝いていた。麗子はそのおのおのに、ついで太い首筋に、強い盛り上がった肩に、二枚の楯を張り合わせたような逞しい胸とその樺色の乳首に接吻した。胸の肉附のよい両脇が濃い影を落としている腋窩には、毛の繁りに甘い暗鬱な匂いが立ち迷い、この匂いの甘さには何かしら青年の死の実感がこもっていた。」¹⁶⁾

もっともそれは自己への執着という意味での性であるが。

27歳の三島が眺める青銅の馭者が23歳の妻麗子が見つめる「憂国」の武山中尉になる。それは三島の性的憧れである。だがその視線の先には、むしろ三島その人の自画像、それが投影された作家自身の自我そのものがある、と言える。もっとも、妻麗子の目に宿る30歳の武山信二中尉が

生身の肉体であるのに比して、27歳の三島の目に映る青銅の馭者は自身はまだ自覚しない心身壮健な作家の理想我にはかならないという点が、違うと言えは違うのだが。この二つの描写には、三島の本質が含まれている。

「この像がかくまで私を感動させるのは」と三島は書いた。「物事の事実を見つめる目と、完全な様式との稀な一致が見られるからにちがいない。」そして、

「上半身には見事な雄々しい若者の首と、肩と胸との変化に富んだ花やかな髷と、さし出された下膊があり、この複雑な重い上半身に対比されて、故意に長くつくられた下半身が、単調で端正な髷だけで構成されている」……それは「すぐれた音楽を目から聞くかのような感動を与える。」さらに続けて「そこでは様式が真実と見事に歩調をあわせ、えもいわれぬ明朗な調和が全身にゆきわたっている。」¹⁷⁾

続いて作家が筆を割くのは馭者像の頭部(写真6)である。

「その後の大理石彫刻の頭部とちがった独創性を持ち、いかなる神にも似ない人間の若者の素朴な青春を表現している」この頭部を「私は……アポロよりもさらに美しいと思う。」なぜなら「そこには神格を匂わすようなものは何一つなく、倨傲の代りに羞らいが、好色の代りに純潔が香りを放っている」からだ。「勝利者の羞らい、輝やくような純潔、こういうものの真実の表現は、何とわれわれの心を奥底からゆすぶることであろう。」そして「芸術が深刻なあるいは暗い主題よりも、はるかに苦手とするものは、この種の主題である」と三島は筆を結ぶが、ここに書かれているのは三島の言う芸術の主題というよりはむしろ、作家がみずからの理想のイメージとして何を措定していたか、と言うことについての、作家自身の心理の基層の言語化であったと言えるだろう。これを三島は美とくくり、廢墟を生きる若者の羞らいと捉えた。そのことは旅の途上にある三島が、旅することで獲得した認識=教養そのものだが、それ以上に、引き続き訪れたローマでルネサンス美術を作家なりに受けとめる下地となった。作家が旅で再生したとは、そういうことだ。

遺跡の町デルフィで三島は、山間の奥からふいに顔を覗かせる海のように広がる廢墟にわれと我が目を瞠った。このあと訪れたアポロ神殿へといたる坂道を上りながら、崖沿いにある宝物殿を、その上にある「神託と巫女を以て名高いアポロ神殿」を、世界最古の劇場を、またその上に



写真6 青銅の馭者像、頭部



写真7 デルフィの大競技場

位置する大競技場（写真7）を、目の前に広がるそれらギリシアの「死体」に目を凝らしながら、その途中に佇んでいた、「上半身を失った羅馬の女神像」に目を留めた。

「登攀者たちをじっと見張っている」その女神像には首がない。目がない。彼女はむしろ「その下半身の端麗な髻」で「われわれを見張っているのだ。」そんな観察を楽しみながら、三島は、大理石の神殿のいたずらな白、「犠牲の叫び」を耳にしあまたの血潮を浴びた「にちがいない」三本の円柱の鮮血の赤、それらを包みこむ天蓋の青を空想する。「希臘彫刻において、いつも人間の肉を表現するのに用いられたこの石は、血潮の色とも青空の色ともよく似合う」¹⁸⁾しかし、あたりに赤などあろうはずはない。三島は「ところどころに咲いている罌粟の真紅」を血潮に見立てて、そう空想するのだ。

アポロ神殿のあるプレイストス溪谷は、紀元前には神託を受けるため各所から巡礼が訪れた、繁栄した古代ギリシアの中心地であったが、紀元後土砂崩れに見舞われて以後、町は一千八百年余にわたり地中深く眠っていた。風光明媚というよりは、神々の怒りに触れた、没落の象徴のような神域である。「芸術は自然を模倣する」とは、今となっては出展すら定かではないが、それはセネカともアリストテレスとも言われる、古の名句だが、これを意識したのか三島はこんな感想をしたためている。

「古代建築は、自然を征服せず自然を発見したのであり、近代高層建築の廃墟が、いささかもわれわれの想像力を刺戟しないのは、この逆の理由に拠る。」¹⁹⁾

おそらくはニューヨーク、あるいはパリのことだろうか。

いままデルフィの町にある、瀟洒なホテル、カスタリアを慌ただしくあとにして、三島はアテネに戻る。次の目的地、ローマへと赴くために。

春たけなわ。4月29日になっていた。

古の都市デルフィを経たのは1952年4月29日、朝7時半のこと。ヨーグルトと蜂蜜の朝食をしたためると、警笛に煽られるようにして、バスへと急いだ。

5. ローマへ

「私は叙上の四つに円盤投げのトルソオを加えて、最も私の心を動かした五つを選んだ」²⁰⁾と三島は書いている。ウエヌス・ゲネトリクス（母のヴィーナス）、ニオベの娘、シレーネのヴィーナス、スビアコの青年像、ヘルメス……。

中でも三島の心をどれよりも激しく揺さぶったのが、ローマ国立博物館（マッシモ宮）所蔵のウエヌス・ゲネトリクス（ウエヌス・ゲネトリクス）、母のヴィーナス像である。

メーデーにあたる5月1日にローマの土を踏んだ。商店はあらかた閉まり、バスも電車もタクシーもいっさい見られないガランとした街、三島はルドヴィシ通りから有名なコロセウムまで50分ほど歩いて行った。やっとたどり着いた「コロセウムは私を感動させなかった」と、三島は書いている。なぜなら大きすぎたからである。「それを芸術品と見ることがそもそもまちがいであるが、もし芸術品だと仮定すると、この作品は大きすぎる主題を扱った欠点のようなものを持っている。」そして「そもそも芸術には「大きな主題」などというものはないのだ。」と、思わぬ感想を洩らしている。ここで三島の言う「大きな主題」というのは、目の前に聳えるコロセウムの魁偉さを前にして思わず漏れ出た言葉だろうが、裏を返せば、その折の作家の精神の受容しうる容量に比してこの闘技場が「大きすぎた」と言うことだろう。芸術の主題に大きいも小さいもあるまい。ローマのコロセウムは、いま本稿を書きながら私が思い出すところによると、「大きすぎる」どころか、むしろちんまりとまとまった闘技場といった印象がある。入り口は狭く、座席は窮屈で、そこから見下ろすアリーナは、——嗚呼ここで剣闘士（グラディエーター）が猛獣を相手に血で血を洗ったのか、さぞかし怖かったろう——と想像しうる、中心に向けて凝集していく楕円形の競技場であった。ゲートはこの競技場を指して「特に眺めの良いのはコリセオ（コロセウム）である」と書いた。いっぽう三島は「ゲートはこの偉大さに市民精神の最初のあらわれを見た」と書いている。コロセウムについて、私はむしろゲートの手を取りたいと、そう思う。

ローマの初日はこうしてふいごのように精神の上下動をくり返す作家の期待を大幅に裏切ったが、二日目に訪れたテルメの国立博物館で、作家は一気に朗らかな気分が襲われることになった。先に書いたように、ウエヌス・ゲネトリクス（写真8a, 8b）との出会いがあったからである。多くのギリシア・ローマ期の彫像がそうであるように、この母なるヴィーナスもまた、五体満足とはいかなかった。

「前五世紀の作品の模作の首と左腕と右腕の下膊は失われ」……しかしむき出しになった「右の乳房」と「さし出された左の膝は羅（ヴェール）を透かしてほとんど露わ」で「その乳房と膝頭が、照応を保って、くの字形の全身の流動感に緊張を与え、いわばあまりに流麗すぎるその流れを、二つの滑らかな岩のように堰いている。」²¹⁾

「その美しさは見る者を恍惚とさせずには置かない」という三島の観察眼は、この夏、ローマで現物を見てきた私にも実感を以て追体験できるが、身体のパーツを失ったこの半裸の像がまず目に飛び込んできた、その着眼の特異さに、パリでまずサーカスの曲芸師のアクロバットを見て「肉体の危険」と「精神の危険」の二項対立を見た作家の脊髄に触れる思いがし、ここに作家の生の本質があるとも思えるのである。



上（写真 8a 三島が感動した「母のヴィーナス」はこちらと思われる）
下（写真 8b その右手には頭が半分欠けたヴィーナスが展示されていた）

あるいは、こう言ってよいかも知れない。ギリシア古典期を善とする三島の鑑賞眼はどこかに「滅び」と「転生」を憧憬する作家の幼児期からの記憶が反映されており、その古好みの中にこそ、三島の精神のある傾向が、その秘密が潜んでいるのだと。

三島は「眠るアリアドネー」を見、ティツィアーノ・ヴェッチェリオ「神聖な愛・異端の愛」（写真9）（聖愛と俗愛）を見、ヤコボ・ズッキ「海の宝（アメリカ大陸発見の寓意）」（写真10）を見、ヴェロネーゼ「聖アントニオ魚族（いろくず）に説く（魚に説法する聖アントニウス）」を見、ドッ



写真9 ティツィアーノ「聖愛と俗愛」



写真10 ヤコポ・ズッキ「海の宝（アメリカ大陸発見の寓意）」

ソ・ドッシ「女魔法使い(魔女キルケ)」を見た。盛期ルネサンスを代表する画家ラファエロ、バロック期フランドルに生きた偉人ルーベンスは、作家によると「私を感動させるに足るものはなかった。」²²⁾

6. 聖アントニオ

とりわけ三島を捉えたのは、ヴェロネーゼの絵画「聖アントニオ魚族に説く」(写真11)であった。以下の写真がそれであるが、この絵の特徴は四分割されたその独特の構図にあると言える。上に天の青と白、下に海の紺碧、聖アントニオの指さす左には広大な空間が広がっており、右は十数人の人物たちで埋まっている。誰もが背をこちらに向けている。画題の通り、魚に説法する聖アントニオの語られざる言葉が主題とも言える、特異な、中心の曖昧な、左右非相称のイメージである。

絵の中心人物、自身が没した土地の名を冠してパドヴァのアントニオとも呼ばれる聖アントニオは、とりわけ学識に優れたキリスト者に送られる教会博士の称号を得たローマカトリックの重要人物。説法の名人とされ、30代半ばで病没するまで、アッシジのフランチェスコが創始したフランシスコ会に入会し、イタリアから南フランスを回っては民衆に「神の国」と「悔い改め」を説いたという。三島はボルゲーゼ美術館でこの絵に接し、「ボルゲーゼで私の心を最も深くとらえた絵は、ティツィアーノの「神聖な愛・異端の愛」を筆頭に、もう一つはヴェロネーゼの「聖アントニオ魚族に説く」である」と書いている。「ヴェロネーゼのこの絵は、画面の半分が茫漠たる神秘的な緑の海に覆われている。その構図はまことに間違で聖人はじめ多くの人物は右半分、それも右下半部(ママ)にまとめられており、魚たちを指さす聖者の指先が、漸く画面の中央に達している。聖者の胸に飾られた白い花は海風にそよいで、愛すべき抒情的な効果をあげている。」²³⁾



写真11 ヴェロネーゼ「聖アントニオ魚族に説く」

美術史家の宮下規久朗は「その人特有の美意識や美的感受性の発露としての美術への関心」と指摘している。²⁴⁾「一般に人が美術に関心を寄せる場合、常に芸術としてその作品を高く評価しているわけ」ではない。「ありていに言えば、芸術作品としての出来栄えはたいしたことはないかもしれないが、その絵や彫刻の顔が、たまたま好きなタイプだとか」。²⁵⁾

氏は「アンティノウス像に対する三島の興味」に寄せてこう言うのだが、闊達という言葉を用いてこの絵を語る三島は、なぜ、この茫洋としたイメージの絵にそれほどまでに心惹かれるものを感じたのか。この時点での三島の鑑賞眼は、氏の評言の通り、芸術的な価値とは別に、「たまたま」好ましいと思った絵柄・構図に反応したのだろうか。

思うに、私も欧州の絵画は相当に見た。ヴェロネーゼの「聖アントニオ魚族に説く」は、なるほど宗教画としては人びとの息吹が感じ取れ、迫力ある遠近法を取り入れて、意味ある画題を物語性たっぷりに塗りこめた、目を引く作であるとは思いますが、逆に言うと、民衆に擬した魚の描写がいかにも弱い。肝心の海は黒ずくめで、聖アントニオの指先は空(くう)を指している。よほどキリスト教の知識の豊富な、画題に通じた鑑賞者でない限り、聖アントニオの説法が聞こえるまでには、いま少し足りないように思われる。

つまりは傑作とは思えないのだが、これを三島の人生に照らし合わせて読むと、少し様相を異にする。詳しくは後述するが、人びとを従え、「神の国」への導きを説く聖人の姿は、行為者として、おのれの生を主体的に、確信的に生きる人間の類型を表象しており、おそらくはまだこの時点では作家の心底に兆していない、彼の理想の人生そのものを匂わせる、重い主題であったのではないか。表象的に読めば、説法する聖アントニオは、十数年後の三島である。この暗いトーンの絵の、ゆいいつの救いとも言える聖人の胸に咲く花々に目を留めて、「愛すべき抒情的な効果」と書いたのは、三島の日本浪漫派としての着眼であった。

こうしてヴェロネーゼの「聖アントニオ魚族に説く」は三島の中で美と捉えられた。この絵が作家の生に永々とした影響を与えたかどうか、それは知らない。ただ、みずからの存在を深く問わずにはおれない旅の最中であって、自身の行く末を絵の中に見た作家の、精神の感応の不可思議さ、それについて思うのみである。

「ティツィアーノのほうは、ヴェネツィア派の絵の多くがそうであるように、背景の細部が、世にも美しい」と、三島は書いている。「左方には西日に照らされた城館と、そこへ昇ってゆく道をいそぐ二三の騎馬の人がおり、左下方の暗い森の中には二疋の愛らしい兎がえががれているが、一層美しいのは右方の背景である。」²⁶⁾

7. 崩壊の主題

そもそも人嫌いの傾向が三島にはあったのである。このことは複数の評家の指摘するところだが、果たしてそれが生来の性格なのか、生育歴に根ざす後天的な痼疾の類か、改めてそれを思わずにはいられない一文を三島は書いた。なぜなら「聖愛と俗愛」と題されたティツィアーノのこの絵画は——写真9を見て欲しい——二人の婦人に視点が集中するように計算された構図そのものに見せ所があるのであって、背景の「愛らしい兎」などに目を留めるべき絵では決してない。(「兎」がどこにいるか、探して欲しい。) およそ音楽や絵画の趣味はその鑑賞者の「人間」を能弁に語るものだが、三島の場合、生きとし生けるものの交わりよりはむしろ、平衡を書いた精神と肉体、頭と腕の欠けたトルソーなど、崩壊を匂わせる対象に心を寄せる。それ故の心的な傾きなのか、鋭敏だからこそこの自己韜晦があったのかどうか、いずれにせよこの三島のティツィアーノ理会は、

私にはどうにも「微笑ましい」を通り越した、語るに落ちた驕慢と映らざるを得ないのである。

「一層美しいのは右方の背景である」と、三島は書いている。

「入江の残照、その空の夕雲の青と黄の美しさ、前方に漂っている薄暮の憂鬱、獵犬に追われる兎と二人の騎馬像、その騎馬の人の二点の赤い上着の点綴（てんてい）、すべての上にひろがっている夕暮の大きな影、……これらのものに加えるに、複製で見て決して発見できないものが、前景の裸婦の足もとにひらめいているのを読者にお伝えしよう。それは薄暮の小さい花の周囲に、名残おしげに付きまとっている番いのしじみ蝶である。」²⁷⁾

三島のこの鑑賞眼が正鵠を射ているかどうかを探るにはボルゲーゼ美術館まで足を運んで、ティツィアーノを見るほかはないが、しかし「横長の画面はこの絵のアレゴリカルな主題にいかにもぴったりしている。」と書く作家の観察は、「諸説ある」²⁸⁾とされるこの絵の真実に迫って、首肯すべき点も多く含んでいると思われる。「二人の対蹠的な情熱の象徴、たとえばあのアベラアルとエロイズの愛の手紙と求道の手紙との間に在るような対蹠的な象徴は、一組の恋人のように寄り添って坐ってはいはならないからである。肉体と精神、誘惑と拒否、このワグネル的な永遠の主題が、いかに明朗に、いかに翳りなく描かれていることか。」²⁹⁾

1952年5月3日のことだった。

8. 動乱の日本

奇しくも日本の皇居外苑ではデモ隊と警察部隊とが衝突、死者一名と負傷者多数を出した「血のメーデー事件」の2日後である。

世情騒然たる「革命前夜」——いま日本は学生運動・左翼運動の秋にあった。三島の旅の前後、日本はどんな状況に置かれていたのか、簡潔に示しておく——

サンフランシスコ講和条約が結ばれてGHQによる占領が終わりを告げたのは1952年4月28日のこと。

日本は7年ぶりに主権を回復したが、その一方で、隣国はまさに動乱のさなかにあった。朝鮮戦争（1950年6月25日勃発）である。

GHQが日本を占領していた折から、アメリカ軍は当時、日本駐留部隊を朝鮮半島に随時派遣していたが、この時期、戦況はいちじるしく悪化、7月上旬には全駐留部隊の出動を余儀なくされ、結果、日本は本土防衛・治安維持のための兵力が不在するという緊急事態に陥った。これを重く見たマッカーサー（連合国軍最高司令官）は時の宰相吉田茂に治安警察隊創設の要望をなす。1950年7月8日のことで、その一月後の8月10日には警察予備隊令が公布、警察予備隊が設置された。

世に言う「逆コース」で、戦後の民主化・非軍事化への敵対と反発した市民団体、学生団体（全学連）はデモ隊を組織、皇居前広場を人民広場と称して乱入に次ぐ乱入をくり返す。

デモ隊は瞬く間に暴徒と化した。

日本を取り巻く大状況が変わっていた。

当時、在日駐留米軍の任務はほぼ国内の治安維持に充てられていた。このため、警察予備隊も軽装備の治安部隊としてまず構想されたが、50年11月25日に中国人民志願軍が朝鮮半島になだれ込み、事態は一気に緊迫化する。朝鮮半島は自由主義陣営対共産主義陣営の全面対決の場となったのである。

これに併せて警察予備隊も重武装化へと踏み出した。第23回メーデーで左翼陣営のスローガン

が「再軍備反対」になったのは、こうした流れによる。

そもそもマッカーサーが吉田に示した書簡は「事変・暴動等に備える治安警察隊」とあり、英語で Constabulary と呼ばれる警察軍を意図したものであったが、これ以降、警察予備隊は増強につぐ増強の一途をたどり、やがては陸上自衛隊に変貌していく。これは周知の通り。山本舜勝（きよかつ）が警察予備隊に入隊したのは、そんな最中の1952年7月のことである。

三島がいずれ結成する「楯の会」の事実上の参謀山本は、三島とは陸上自衛隊調査学校に勤務していた1967年に親交を結び、爾来密かに謀議をくり返す仲となるが、これはまた後段の話……。三島を「志を同じくする者」と呼ぶ山本には、その「同士」三島についての著作もある。³⁰⁾

9. リゴレットを聴く

その夜のこと、三島はヴェルディの「リゴレット」を聴きにオペラ座へ出かけている。ヴィクトル・ユゴーの戯曲「王は愉しむ」を原作に持つこのオペラを、三島はどうした理由からか、「残念なことに原作者はユウゴオである」と書いている。

「このバルザック的な物語（実は残念なことに原作者はユウゴオであるが）は甘美で明朗な音楽とふしぎな調和を示している。せむしの老人の一人娘に対する恋愛に近い愛の妄念、その失望、その憤怒、その復讐、寛闊で好色な支配者の軽やかな移ろいやすい愛の冒険、その自由、そのいつわらない情念……そして終幕で、侯爵の屍が入っているとばかり思っている袋を前にしたりゴレットの耳に、あの軽快な侯爵の歌、「羽根のように」がきこえてくる件りはすばらしい。ここでも侯爵の意識しない悪行は終始王者の慰みのたのしい音楽で語られ、決して侯爵は罰を蒙るにいたらない。」³¹⁾

「私は器楽よりも人間の肉声に、一層深く感動させられ、抽象的な美よりも人体を象った美に一層強く打たれる」と書く三島は、いままさに、旅の旅ならではの旅情を貪っていた。旅の快樂の最中にあった。美をなめ尽くし、音楽に心を奪われ、夢のような旅人の陶然たる星月夜の膝下に三島はたゆたっていた。

「私にとっては、それらのもう一つ奥に、自然の美しさに対する感性が根強くそなわっており、彫像や美しい歌声の与える感動は、いつもこの感性と照応を保っている。私には夢みられ、象られ、そうすることによって正確的確に見られ、分析せられ、かくて発見されるにいたった自然の美だけが、感動を与えるのである。」³²⁾ と、いま眼の前に広がる夢を語り、「思うに、真に人間的な作品とは「見られたる」自然である。」と面白いことを言う三島は、ここまで三島を書いてきた私の目には、あたかもメタモルフォーゼを経た蝶のような、一段と高い高見から自己を省察する地平に降り立ったようにも映るのである。

さて道化師のリゴレットは、一人娘のギルダをマントーヴァ侯に陵辱され、候を亡き者にしようとして決意する。そのために殺し屋まで雇ったりゴレットであったが、色好みの、女にはひときわ手の早い侯爵は、あろうことか、リゴレットが雇った殺し屋スパラフチーレの妹マッダレーナにまで手を付けていた。三島の言う「侯爵の屍」とは、侯爵め首尾良く死んでくれたわいとほくそ笑むリゴレットの勘違いなのだが、実は「死体」が収まった「袋」に入っていたのは、侯爵への恋心から身代わりになったリゴレットの瀕死の娘ギルダだった。となると、侯爵は——娘を陵辱し、殺し屋に片付けられたはずだった侯爵は、と言うと——「決して罰を蒙るにいたらない」。こうして、朗らかに歌を歌いながら再生を果たす侯爵を見て「すばらしい」と笑う三島である。……

10. ルネサンスとの出会い

ローマは深い。それはさながら入り組んだ街路の果てに卒然と姿を現す丸屋根（クーポール）の大聖堂の、その偉容が見る者をひと息に異界に拉しさるるように、蒼い空と古代の建築物の対比が、そこにある者の時の観念を狂わせるのにも似てまるで迷宮を思わせた。恐らくそのローマの狂気は、パリにも、ニューヨークにも、見当たらない。

ローマは、古に繋がっている。通りを縦横に突っ切る細道、ピアッツァと名づけられた市民らの小集会場、目に飛び込んでくる石塊と見まがうほどの遺跡のそれぞれが、古の大帝の足跡と結んでいる。フォロ・ロマーノを少し行ったあたり、高い窓と七つの相似したファサードが特徴的なカピトリノ美術館（パラッツォ・デイ・コンセルヴァトーリ）は、世界最古の美術館として、各地からここ目ざして訪れる遠来の客にその存在感を見せつけている。三島はここで「ガイドオ・レニ（ママ、以下ガイド・レーニと記す）」と出会った。「仮面の告白」のもうひとつのモチーフ、三島の同性愛と激しく響き合う、あの「聖セバスチャンの殉教」図と。

カピトリノ美術館所蔵のガイド・レーニ（写真12）。それは三島の性の偏向、死への憧憬ばかりか、後年複数の写真家の被写体になって自らの半裸を生々しく暴きだし、そればかりか、やが



写真 12 聖セバスチャンの殉教、カピトリノ美術館所蔵

てその死へと傾斜していく作家自身のタナトスにも共鳴する興味深い素材である。そのことに触れる前に、「仮面の告白」から、「聖セバスチアンの殉教」にまつわる描写を見ておくと――。

「――私は残り少なの或る頁を左へひらいた。するとその一角から、私のために、そこで私を待ちかまへてゐたとしか思はれない一つの画像が現はれた。

それはゼノアのパラッツォ・ロッソに所蔵されてゐるガイド・レーニの「聖セバスチアン」であつた。

チシアン風の憂鬱な森と夕空との仄暗い遠景を背に、やや傾いた黒い樹木の幹が彼の刑架だつた。非常に美しい青年が裸かでその幹に縛られてゐた。手は高く交叉させて、両の手首を縛めた縄が樹につづいてゐた。その他に縄目は見えず、青年の裸体を覆ふものとしては、腰のまはりにゆるやかに巻きつけられた白い粗布があるばかりだつた。

それが殉教図であらうことは私にも察せられた。」……³³⁾

一方「聖セバスチアン」について「アポロの杯」にある描写を拾うと――。

「パラッツォ・コンセルヴァトーリでは、ガイド・レーニの「聖セバスチアン」を遂に眼前にした幸のほか（尤も写真版でかねて見ていたところでは、ゼノアにある同じ作品の複製のほうが、私は好きだ。写真版で見ても、この二つの間には微妙な違いがある）ルウベンスやヴェロネーゼや、仏蘭西のブッサンの作品が私を感動させた。

ガイドの「聖セバスチアン」の一つ隣に折衷派の師なるCarracciの「聖セバスチアン」があるので、門弟ガイドの耽美的な個性がいつそうはっきりする。その画風は、ある時代にはラファエルよりも上位に置かれたのであるが、今彼の名が一般的でないからと云って、その作品が低く見られる理由はなく、セバスチアン像も、大理石のような裸体に一切流血のえがかれていないことが、作品の古典的な美を一そう高めている。」³⁴⁾

三島が相当思い入れ深くこの絵を眺めていることが判る。

11. ガイド・レーニ

ガイド・レーニとは誰か。エンサイクロペディア・ブリタニカによると、ローマ教皇の支配下にあったイタリア、ボローニャに1575年11月4日に生を享けたガイドは、時代のエートスを深々と呼吸するように、バロック期の世界認識の中で画業をおさめ、神話学や宗教（カソリック）を主題とした古典礼賛の画風を確立、所謂ボローニャ派と呼ばれる一派に属する画家の一である。かなりの早熟であつたらしく、10歳のときにはフランドル出身の画家デニス・カルファート（1540？-1619）の工房に弟子入り、やがて自然主義に新風を起こしたカラッチ家の主宰する画学校アカデミア・デリ・インカミナーティに入門（1594年）して、1599年には、24歳の若さで画家のギルドに迎え入れられた。ボローニャとローマを行き来しながら複数の工房を運営し、同時代の画家、ジョバンニ・ランフランコ、フランチェスコ・アルバーニらと親しく交わった、とある。その人となりは、貴族的でややもすれば専横的 noble if somewhat tyrannical であつたという。³⁵⁾

いずれ「聖セバスチアンの殉教」図の制作者として、三島の生と死と緊密に関わることになるこの画家が、その生涯を通して、バロックの強い影響下にあつたことを記憶に留めたい。

若くして世に出たガイド・レーニであつた。その画業の中でも特に画期となつたのは、時の教皇パウルス5世やその甥であるシピオーネ・ボルゲーゼ枢機卿の依頼を受けて製作した無数のフレ

スコ画であった。教会の礼拝堂（チャペル）を飾るためのもので、とりわけ1613-14にかけて制作した「曙（アウロラ）」はガイドの最高傑作として名高い。太陽神アポロと月の神セレネを姉妹に持つアウロラは豊満な肉体とブロンドの髪を持つ曙の女神、ここからも判るように、ガイドは古典主義に劇的な構図を与え、理想化された優雅な人物表現をもって自らの画のスタイルとした。ガイドがバロックの豊穡と古典主義の均斉、また神話学を融合させた代表作として、「アタランテとヒッポメネス」（1625）があるがこれはマドリッド、プラド美術館に所蔵されている。

そのガイドが「仮面の告白」で三島に性的な啓示を与えた「聖セバスチャンの殉教」図を描いたのは1616年、画家が41歳の時のことだった。

ガイドは脂がのりきっていた。その年、夏の暑さも手伝って、めくるめくような土地との出会いを私は味わっていた。ひどく暑かった。港町を取りまく空気は湿っぽく容赦なく汗をあおり膚をさんざんヌメヌメさせた。太陽を浴びながら二つほど大通りを越え慣れない路地を幾度か曲がり、イタリア語が出来ないからとて地図を頼りにウロウロしているうちにやっとたどり着いたのは画を見たさの執念だろうか。2年前の夏、2015年の9月に、私は海外出張でミラノを訪れ、そこから列車で1時間足らずの港町ジェノヴァまで足を伸ばして、パラッツォ・ロツォ（赤の宮殿）で「聖セバスチャンの殉教」（写真13）図を見てきたのである。

石畳につらぬかれたガリヴァルディ通りの18番地、人々がそぞろ歩く賑やかな通りに面して、



写真13 「聖セバスチャンの殉教」、パラッツォ・ロツォ所蔵

館はあった。階段をのぼり、廊下を渡りしているうちに、画はその館の奥まったところからいきなり姿を現した。画は予想よりもかなり大きかった。薄暗い館の一角に、その画だけ、さながらあたりを払うかのように掛けられて、どこか青みがあった全体のトーンが館の深とした影と溶けあって、この画に描かれた男の悲劇的な運命を際立たせていた。ひと目見て、キリストを模したと判る若い男のモチーフ。がキリストと違うところは、この男が若く、むしろ美青年と言って良いほどに美しいことだった。三島が書くように「腰のまわりにゆるやかに巻きつけられた白い粗布」のほか身にまとうものは何もなく、ただ「両の手首を縛めた縄」と、ひとつは心臓の上、もうひとつは右の脇腹のあたりを貫いた二本の矢があるばかり。だがグイドの人間を優美に描くという画家としての方法意識がそうさせたのだろうか、半裸のこの男は瀕死の殉教者の息も絶え絶えといった様子はなく、むしろ全体にヴァイタルな、生の欲動が横溢しているように私の目には見えた。男は生きているのだ。目は天上を見ている。その目は神を見つめている。ここが篠山紀信が撮った三島の「聖セバスチャン」と異なる点と言って良いだろう。つまりこの殉教者は、モチーフとしては法難に遭ったあるキリスト者の悲劇を扱っているのだが、優美な人間を描くという画家の技法上の意図もあって、あたかもそれ自身「生」の側にあるかのような理解を見る者にうながすのだ。もっとも二本の矢が急に刺さってはいるのだが。

背景はひたすら暗い。まるで嵐の前の静けさのように。だが殉教者の肉体にはバロック絵画の文法通り隅々まで光があてられており、強い明暗が強調されている。矢で射貫かれた肉体が際だって、殉教者の悲劇がことさらに強調される。

ここでひとつの疑問が頭をもたげる。

果たしてこの画はエロティックだろうか、
という疑問が――。

12. ある疑問

「仮面の告白」によると三島はこの画を見て「最初の不手際な・突発的な「悪習」」に耽ったとある。

「その白い比いない裸体は、薄暮の背景の前に置かれて輝いていた。身自ら親衛兵として弓を引き剣を揮い慣れた逞しい腕が、さしたる無理もない角度でもたげられ、その髪の毛のちょうど真上で、縛られた手首を交叉させていた。顔はやや仰向きがちに、天の栄光をながめやる目が、深くやすらかにみひらかれていた。張り出した胸にも、引き緊った腹部にも、やや身を擦った腰のあたりにも、漂っているのは苦痛ではなくて、何か音楽のような物憂い逸楽のたゆたいだった。左の腋窩と右の脇腹に篋深（のぶか）く射された矢がなかったなら、それはともすると羅馬の競技者が、薄暮の庭樹に凭（よ）って疲れを休めている姿かとも見えた。」³⁶⁾

だが「その絵を見た刹那、」

「……私の全存在は、或る異教的な歓喜に押しゆるがされた。私の血液は奔騰し、私の器官は憤怒の色をたたえた。この巨大な・張り裂けるばかりになった私の一部は、今までになく激しく私の行使を待って、私の無知をなじり、憤ろしく息づいていた。……」

そして、

「……私の手はしらずしらず、誰にも教えられぬ動きをはじめた。私の内部から暗い輝かしいものの足早に攻め昇って来る気配が感じられた。と思う間に、それはめくるめく酩酊を伴って迸った。……」³⁷⁾

エンサイクロペディア・ブリタニカは、ラファエロのフレスコ画と古代ギリシアの彫刻がガイドの芸術的インスピレーション（写真14）の源であったと説明している。

37歳で病没したラファエロ・サンティは妻帯こそしなかったものの、女性関係は派手で、寵愛した愛人のために基金を設立したという。そのせいか、ラファエロの描く女性は（ルネサンスの巨匠だからしごく当然だろうが）可憐で美しく、健全な性の対象であることを全身で寿いでいるかのようだ。

古代ギリシア彫刻について言えば、肉体の礼賛と劇的構成にその特徴があると言ってまず間違いないだろう。

ガイド・レーニを稀代の芸術家にしたもの、それは、先のエンサイクロペディア・ブリタニカによると、静謐な作風と何よりも宗教的素材をたなごころにした構成力であるという。³⁸⁾

ガイドは生涯独身を通した。



写真14 ガイド・レーニ作彫像 上目遣いはガイドの作品の特徴である

果たしてこの「聖セバスチアンの殉教」図は見る者に自洗行為をうながすほどにエロティックだろうか。

三島がもうひとりの翻訳者の助けを借りて訳出したガブリエレ・ダンヌンツィオ作の戯曲「聖セバスチアンの殉教」の、やや題材に肩入れしすぎたとも読めるあとがきによると「聖セバスチアンの実在性は、はなはだ疑はしい」そうだ。「カトリック聖人伝によると、西暦紀元三世紀、フランス人を父とし、イタリア人を母としてフランスのナルボンヌに生れ、幼いころに洗礼を受け、長じてのち、迫害の同信の徒にすこしでも便宜を与へたいとの念願から、わざと身を軍籍に置き、しばらくローマ市に勤務してゐたが、武勇伝にすぐれ、しばしば輝かしい軍功を立てて、ディオクレティアヌス皇帝の目にとまり、名誉ある親衛兵第一隊隊長に任命³⁹⁾と三島は解説する。だが、仲間のキリスト教徒に手をさしのべていた行為が皇帝の知るところとなり、皇帝より死刑を宣告、「アフリカのヌビア人に弓矢で射殺されることになった」。

セバスチアンは「処刑後、息絶えたものとして放置された」が、「夜半遺骸を葬りに来た信女イレーネによつてまだ息のあることを発見され、その手当をうけて蘇生」する。だが「回復匆忙、ふたたび、太陽神像（ヘリオガバルス）参詣途上の皇帝の前に立ちふさがつて弾劾したので、棍棒で打ち殺され、屍は放水路に投げ込まれた」——というのが聖セバスチアンの殉教の三島によるあらましである。西暦288年のことだった。……ローマ皇帝に齒向かったからセバスチアンは殺された。だがこの伝説を裏付ける資料はどこにもない。⁴⁰⁾

ガイド・レーニが「聖セバスチアンの殉教」図をほとんど半裸姿で描いたのは、美術史的に読めば、ルネサンス以降の人体美を強調する画法の流行とガイドに靈感を与えた古代ギリシア彫刻の影響を指摘すべきであるだろう。三島も、「美術史上、セバスチアンがはじめて身に纏つたものをかなぐりすてて裸体になるのは、その伝説上の死から実に千二百年後、十五世紀以来のこと」と述べ、ルネサンスを経て裸体になったこの肖像画の新たな「創造の奇跡」を書いている。

そして、「それはすでに、若い、ゆたかな輝かしい肉体、異教的な官能性を極端にあらはした美青年の裸体となって生れ、さまざまな姿態で、あるひは月桂樹の幹に、あるひは古代神殿の廃墟の円柱に縛しめられ、あるひはローマ軍兵の兜や鎧をかたはらに置き、あるひは信女イレーネに涙を注がれ、あるひは数本の矢、あるひは無数の矢を、その美しい青春の肉に窺深（のぶか）く射込まれて……」というように、範囲を思いきり拡げて、いささか過剰な意味づけを行っている。

三島はセバスチアンを半裸にしたものとしてルネサンスの原理を半ば肯定半ば否定し、そのエロス（官能性）の源を、「美しい肉体に無数の矢を射込まれて殺され」という伝説、つまり「三世紀以来セバスチアン伝説の中に隠されていた秘儀」に求めている。そして、こう結論した。「すなはち、この若き親衛隊長は、キリスト教徒としてローマ軍によつて殺され、ローマ軍人としてキリスト教によつて殺された。彼はあたかも、キリスト教内部において死刑に処せられることに決まつてゐた最後の古代世界の美、その青春、その肉体、その官能性を代表してゐた」と。⁴¹⁾

ガイド・レーニは生涯妻帯しなかったが、ガイドが同性愛者であったという証拠はない。例えば Kindle 判 “Masters in Art: A Series of Illustrated Monographs Guido Reni” を当たってみても、ガイドの隠微な嗜好に結びつくような記述は見当たらない——。ガイド・レーニは、果たして同性愛者であったのか。ふくよかな唇、何かを求めて訴えかけるようなまなざし、こんもりと盛り上がった柔らかい胸板とくびれた腰……身体の間々までなめ尽くした光によるトルソーの雄弁な語り……人体の美しさをことごとく強調するガイドの筆は確かに男性のエロスを余さず伝えてくる……その官能性を。……それだけに、画家は同性愛者であったのではないかという、疑いと言うよりむしろ心騒ぐような想像が、この画を見ているうちに、ふと、頭をもたげてくるのも否め

ないところなのだ。

この間に対する答は、むろん400年余りを経ての想像である以上、弱い光を頼りに暗い洞窟を覗くのものにも似た、無謀な試みに等しいが、先の“Masters in Art Guido Reni”に見られる次の記述が案外、正鵠を射ているかも知れない。

以下の通りだ。

13. 聖セバスチャンは実在したか

サン・セバスチャンは、伝説によると、ディオクレティアヌス帝のもと、帝を警護する近衛兵の団を指揮していた眉目秀麗な若者で、帝にとりわけ寵愛されていた。ところがセバスチャンは密かにキリスト教に改宗し、ふたりの友人がその宗教のかどで拷問を受けるや、私もキリスト教徒なのだと明かして、ふたりに堂々と死ぬようにうながした。すると帝は、自身この若者を愛していたにもかかわらず、これを樹にくくりつけて弓を以て殺すようにと命じられた。判決は実行に移され、セバスチャンは遺体のまま捨て置かれた。だが若者の友人たちが遺体を引きとりに来てみると、明らかに若者はまだ息をしている。そこでキリスト教徒で未亡人だったイレーネがこっそり手当しているうちに、かれは息を吹き返したのである。だが、回復するなり、セバスチャンは、友人らの懇願の通りローマから逃げ出すどころか、勇敢にも帝の宮殿の門さして出張っていく。首都をわざわざ通りを往くディオクレティアヌス帝にむかって、「私はセバスチャンです。神は私をあなたの手より取りあげて、イエス・キリストへの信仰を証明しその僕のために弁護するようはかられたのです。」これにディオクレティアヌス帝はいたく立腹され、棍棒を以て円形競技場で打ち殺すようにと命じられた。命令は実行された。⁴²⁾

「想像すれば解ることだが」と、同書は「聖セバスチャンの殉教」図と画家とのつながりについて、こう筆を費やしている。

「この風変わりな伝説はあまたの画家に魅力的な主題をもたらしたが、とりわけガイドにとってはそのられる画題であった。というのも、若い盛りのアポロ的な人物を描写する機会を、これが与えてくれたからだ。(外見の美しさ、洗練された模範的な人体表現) それでいて恍惚とも窺える苦痛のものがき——そのコンビネーションは、画家の手に掛かれれば、間違いなく、感情に強く訴えかけるものだった。」そして「ガイドはこの構図を、ディテールを少しずつ変えながら、少なくとも7回、描き直している。」⁴³⁾

セバスチャンが落命した西暦288年は、ディオクレティアヌス帝の在位4年目、帝44歳の時にあたる。恐らくこう言って良いだろう。ガイド・レーニ作「聖セバスティアンの殉教」図に見られるある種の官能性は、ガイドのセクシュアリティ（性的嗜好）の発露というよりはむしろ、ディオクレティアヌス帝が寵臣セバスチャンへ寄せた「愛」のガイド的な表現であったと。ディオクレティアヌス帝はセバスチャンを「愛して」いた。そのことはもちろん画家もよく知っていた。セバスチャンの「見られる者」としての美しさ、「求められた者」のみがあたりには匂わず独特の「エロス」は、帝による寵臣セバスチャンへの思いを画家ガイドが解釈して筆にした、画家なりの「愛の賛歌」であったと。帝にはプリスカという后がおり、ガレリウス后ウァレリアという娘もあった。帝のセバスチャンへの「愛」が性的なものであったかどうか、ここからはもうひとつ解らない。だが、こんな解釈はどうであろうか——西暦288年における帝のセバスチャンへの「愛」は1616年という偏光レンズを経て、三島が自決した（と主張する）1938年に三島の言う「官能性」にか

たちを変えて、いまわれわれの目の前に現れているのだ、と。

時代を降るにつれてセバスチャンの発するエロスは強度を増してくる。いまインターネットで容易に知ることが出来る数多の画家らによる「聖セバスチャン」図像はそのイメージがいかにエロティックになっていったかをありありと伝えるものだ。それはどうしてだろうか。なぜ「聖セバスチャン」図像は男性を「見られたる者」として客体化しその対象となった男性のエロスを発散しているのだろうか。なぜかというところ——これはいまの私がとりあえずたどり着いた解釈なのだが——そのそもそもの始めには、ローマ皇帝ディオクレティアヌス帝が寵臣へ寄せた「愛」があったから——そう私には思えるのである。

この「聖セバスチャンの殉教」図像は時代を経てさまざまに意味を変え遂には 'a homo-erotic icon' のイメージを身に纏っていく。ペストの守護聖人、軍人と運動家の守護聖人、セバスチャンをめぐる言説はくるくると巡り——もっとも「殉教」から1700年余り、ガイドの画の制作からもすでに400年を経ているというこの長大な時間は弁えておかなければならないが——それなりの理由を得てそれなりの寓意性を帯びている。中でも、私のように三島を書く者にとって無視できない説として、所謂、同性愛者の守護聖人説なるものがある。

洋の東西を問わず、何人もの評者が、聖セバスチャンを同性愛者の守護聖人と見なしてきた。若く美しい未婚の青年、時の権力者に逆らって命を落とした悲劇の人……「聖セバスチャン殉教」図は確かに性的なまなざしで見つめられ、そこから物語へとつながる寓意性をおびる要素に満ちているかに見える。果たして——

だが、聖セバスチャンが同性愛者の守護聖人になったという説については、私ははっきり否の立場を取る者だ。以下、イギリスIndependent紙電子版2008年2月10日号から「欲望の矢」と題された記事の一節を引用すると——

「……14世紀末ころから、中年のセバスチャンはイメージチェンジを果たす。顔を覆っていた髭、皺、死をあからさまに匂わせる兆しはこの画からさっぱり一掃された。

(中略)だがそれだけでは、なぜセバスチャンは400年以上にもわたりゲイの聖人としての時間を過ごしてきたのか、という問への明快な答として、どうにも辻褄が合わない。かれセバスチャンの(性的)アピールについては、それを論じようとする人の数だけ、説明があるのだ。」

と振った上でIndependent紙はこう話を継いだ。

「三島由紀夫——日本の作家にして徹底したサド・マゾヒスト——はセバスチャンの殉教を苦痛に満ちたエロティックな快樂のシンボルと捉えた。(以下略)」⁴⁴⁾

また、ガイドが描いた7枚の「聖セバスチャン殉教」図のうち一点を所蔵するスペイン国立プラド美術館の公式サイトは、パラッツォ・ロッソ所蔵の「聖セバスチャン」(「仮面の告白」に登場する聖セバスチャンである)について、このように解説している。

三島由紀夫の自伝的小説「仮面の告白」(1949)の中で、作者はこの画の複製をひと目見るなり、みずからの性を見つめ直す航海へと旅立つのである。……⁴⁵⁾

かいつまんで言えばIndependent紙もプラド美術館も「聖セバスチャン殉教」図のhomo-erotic

な寓意性を証し立てる証拠として、ともに三島の「仮面の告白」の記述に拠っている。これは裏を返せば、三島以上にこの画のhomo-erotic性をあからさまに論じたてた文献が見当たらないからであるだろう。

これがひとつの理由なのだが、もうひとつ、私が先の同性愛者の守護聖人説に傾けない理由として、1616年にこの画が産みだされるに至った来歴の問題がある。

先に引用した通り、エンサイクロペディア・ブリタニカは、画家グイド・レーニを「バロック期の世界認識の中で画業をおさめ、神話学や宗教（カソリック）を主題とした古典礼賛の画風」を確立したと述べている。この記述がその通りであることは、他ならぬグイドの作風が一貫して古典（ギリシア神話）とキリスト教的な（つまりカソリックの）世界観を再現したものであることから、疑いない。

グイドは、つまり、バロックの人である。グイドは「聖セバスチャン殉教」図を、いま知ることが出来る画家の履歴から推してまず間違いなく、時のキリスト教会の依頼を受けて制作している。ポーロニヤかローマかははっきりしないが、それは問題ではない。なぜならどちらもローマン・カソリック（ローマ教皇領）であるからだ。そして、言うまでもないことだが、カソリック教徒にとって同性愛は何としてでも避けなければならない忌むべき重い罪である。もし信徒が罪に堕ちたら、それは断じて気取られてはならない。みずから破戒僧となったことをあからさまには出来ない。だから、非キリスト者であったディオクレティアヌス帝のセバスチャンへ寄せる「愛」が万一homo-eroticなものであっても、画が教会の依頼を受けて制作されたカソリックの聖人の「殉教図」である以上、そこには微かにもエロスを匂わせてはならない。それは禁忌なのだ。

「聖セバスチャン」は、この通り、同性愛者の守護聖人などではあり得ない。カソリックの世界観を思うと、それはほとんど意味するところを伝えないある種の形容矛盾である、と言わざるを得ない。にもかかわらず、グイドの殉教図をさして「物憂げなエロティシズム」languid eroticismとプラド美術館は呼び、Independent紙も——かなり奔放な言葉遊びに満ちた言い回しを使ってはいるものの——「400年以上にもわたりゲイの聖人としての時間を過ごしてきた」としているのは、制作からすでに400年もの歳月を経たこの画がさまざまな目に触れて再解釈され読み換えられていった結果と言うべきだろう。そしてその「読み換え」の中心にいたのが、この画を見て自洗したと自伝小説の中で赤裸な告白をした三島その人のなのだ。

14. エロスの裏にあるもの

いつの時代も民衆は口さがないものである。そんな民衆の冗談口のたぐいとして、同性愛者の守護聖人とはやされたことはあったかも知れない。ある時期から半裸の男性をおおやけに飾ることを厭った教会がこの画を奥深くに隠したこともあったようだ。オスカー・ワイルドやテネシー・ウィリアムス（ともに同性愛者とされる）はセバスチャンをさして「昔日の稚児」a late-antique rentboyと呼んだ。だがそれこそ冗談口と言うべきだろう。この画から立ちこめるイメージがどれだけhomo-eroticなものであっても、それはカソリック世界——特にバロック期の——からはほど遠い架空のイメージである以上、そのエロスには取り立てて云々するほどの意味はない。それは、画家グイド・レーニの詐術である。

「聖セバスティアンの殉教」図の発する幻像（エロス）はディオクレティアヌス帝の寵臣へ寄せる「愛」の表現であった。いま私の手元にある「キリスト教図像辞典」を紐解いてみても、「古代にはペストがアポロンの矢でもたらされると信じられていたので、（そこから復活した）セバス

ティアヌスはこの死病に際してよばれる主要な守護聖人である」⁴⁶⁾とあるのみで、男色についての記述はない。帝が寵臣に寄せる「まなざし」が「見られる・客体としての・男性像」という、ある種複雑なイメージをこの画に与えている。そして、実はここからが重要なのだが、三島の人間理解、三島事件の心的機序の解明という本稿の主題からすると、この「見られる・客体としての・男性像」という「聖セバスチャン殉教」図像が発するより本質的なイメージこそが、ゆるがせに出来ない意味を持っているのだ。

よく知られている通り、三島はみずから聖セバスチャンとなって、縄に縛められ矢で撃たれたその殉教のイメージを篠山紀信に撮らせている。その姿がグイド・レーニ作「聖セバスティアンの殉教」図の鏡像となっているのは、画が作家の自我に与えた影響が小さからぬものであったことを物語っている。この画が三島の本質を強く揺さぶったのは、それは、無数の矢を浴びながら再生したという殉教者のイメージ、いわば生と死を往還した殉教者のイメージが、すでに書いたように、心中深く死を孕んだ作家の琴線に触れたということはあるだろう。また三島の生（と、おそらくは性）を覆い尽くしていた自己愛、自己承認欲求を「ひとに・見られる・美しい・若者」という聖セバスチャンの姿が満たしてくれたことも否定できない。先に引用したように「真に人間的な作品とは「見られたる」自然である」と——面白いことに——三島は言った。また三島はみずから第三の処女作と位置づけた、川端康成との親交を結ぶきっかけになった短編「煙草」で、上級生に言われるがままに煙草を吸い、「家へかえってから」「悔恨」と「罪の怖ろしさ」に苛まれる語り手の「感情の澁み」を事細かく書いている。

——「明るる日、学校へ出て見ると、私は今までとちがった目で凡てを見ているような気がした。何がもたらした変化であろう。どうもあの一本の煙草しか私には思い当たらない。」⁴⁷⁾

15. 幼児期コンプレックス

三島はみずからの分身である語り手の「長崎」を「お、お稚児さんか」と貶めた。これは、若い三島が自身の性格を色づけていたある傾向、つまり自分は強い誰かの尻尾に付き従う「受動的な人格」なのだという内心のコンプレックスを自覚し、羞じていたことを証し立てていると言えるだろう。「煙草ぐらいのんだことがありますよだ」と「長崎」は精一杯の虚勢を張った。侮られたくない、「一人前」の「男」と「見られたい」という三島の内面がこれほど端的に表れた一文があるだろうか。幼い自分を羞じる心、いま三島を書く私だけではなくどんな人の心の中にも密かに眠っている「幼児期コンプレックス」とでも言うべき心性を、痛ましいほどに「益荒男ぶり」を人生の晩年において突き詰めたこの作家は持っていた——それは悲しいほどに。

人が大人になるとは、この「幼児期コンプレックス」を出来る限り反転させたいと願うモメントなのであろうか。作家の福島次郎は三島との交流を示した小説「剣と寒紅 三島由紀夫」を書くに当たって「同性愛」をライトモチーフとしている。この作品の内容について、その真贋は今では問わない。ただ、同性愛と性の受動性とはある意味であざなえる縄のような、宿命のようにまとわりつくものであると、思われるばかりだ。そして分身に「お稚児さん」呼ばわりをさせた三島が何より羞じていたのは、同性愛ではなく、むしろこの受動性、受動的な人格の方だった。

「聖セバスチャン」は三島にとって「憧れ」の対象だった。死を内包した生の象徴として、容易に「自己」を投影できる対象として、そこに投影した自己に深く没入出来たからこそ。だからこの画を見て、三島は自決できたのだ。

16. 三島由紀夫の「自己投影衝動」

遺跡であれ、彫刻であれ、絵画であれ、三島にはどこかに鑑賞者である自分自身の姿を投影し、そこに投影した「自分自身」に感動しているフシがある。対象の中におのれの姿を探りあてて——もっとも複雑に分裂した作家の自我を思うと、その対象もバラバラに砕け散っていたりするのだが——その「自分」に恋をするといったところが。これを三島の「自己投影衝動」と呼んでも良いだろう。三島は「眷恋の地」ギリシアでアクロポリスを見た幸に酔い、ローマでは一見それぞれに関連性のないルネサンス美術を眺めやって、あるものは無視し、あるものは、次のように、好意的な評価をしている。例えば、ローマ滞在2日目に訪れたテルメの国立美術館で、「首と左腕と右腕の下膊」が失われた「母のヴィナス」像を見て「その美しさは見る者を恍惚とさせずには置かない」⁴⁸⁾と書いている。

その「母のヴィナス」とは、ふたつの彫像のうち、具体的にどれか。恐らくは左だろうが、ほぼ原形を留めないほどずたずたにされたこの前五世紀の彫刻をさして「何という優雅な姿」「清冽な泉のような髻」と評し、「右の乳房はあらわれており、さし出された左の膝は羅（ヴェール）を透かしてほとんど露わである。その乳房と膝頭が、照応を保って、くの字形の全身の流動観に緊張を与え、いわばあまりに流麗にすぎるその流れを、二つの滑らかな岩のように堰いている」云々と、さもぞっこんの描写をしている。この一文を読まされると、三島を恍惚とさせたのは、その彫像の流麗さというよりはむしろ「死して再生した」その崩壊振りにあったのではなかったか、という思いが湧き起こってくる。

もう一つ三島を感動させた「ヘレニスティック時代の逸品……私が詩人でないことを思い出させて、私を大そう悲しませた」「眠るアリアドネー」は、えぐり取られた若い女の頭部がゴロリと安置された、（眠ると言うより）すっかり死んでいるかのような、死の象徴のような作である。「と云っても偶然がその頭部だけの断片に小品の完全さを与えたのであったが」と、三島はこれを称え、ドビュッシーの音楽、マラルメの詩とまで褒めている。その上でアリアドネーをめぐるエピソードを披露する、その三島の美的好みは、喪われたものをいつまでも愛玩する老婆にも似た愛惜の念いに満ちている。……

この頭部をさして三島は「この若妻の閉ざされた臉には、しかも死の不吉な影はいささかもなく、深い温かな平安が息づいている」と書く。「崩壊」を良しとする心性が三島にはあった。

三島には、少なくともアクロポリスやデルフィ遺跡、ローマで見たルネサンス美術の好みから判断する限り、死を孕んだみずからを投影できる対象のみを選んでそこに深く没入するといった傾きがあった。「自己投影衝動」と呼ぶほかない感性が。「聖セバスチャン殉教」図像にあって「死」を匂わせるのはもちろん肉体を貫く二本の矢だが、射貫かれたセバスチャンが見つめるのが天、すなわちイエス・キリストである以上、それはあくまでイエスとの一体感を示すものと読まなければならない。そこに性愛を見たのはキリスト教美術に対する、その時点での、無理解と考えるほかない。

三島には死を孕んだみずからを投影できる対象のみを好ましいと肯んずる特異な（と、いう他はない）美的傾向があった。つまり対象の中に死を見るのだ。そしてその「死」＝「崩壊」をことのほか美しいと感じると言ったような傾向が。

ポルトガルの首都リスボンに12世紀末のことだがフェルディナンドという少年があった。父のマルチノ・デ・プロネスは貴族で羽振りの良い将校、その子フェルディナンドも将来を約束され

た若者であったが、世俗での生活よりもキリスト者として研鑽を積みたいところざして、リスボンの大聖堂付の学校へ通い、やがて聖アウグスチノ会に入会した。フェルディナンド15歳のときのことである。やがて少年は両親の元を離れ、修道院で善行を積んで司祭の資格を得、名もアントニオを名のようになる。この、瞑想と布教に一身を捧げた、善意にあふれ弁舌の才に恵まれた若者は、やがて列聖され、聖アントニオという聖人となる。——これは数あるキリスト教の聖人列伝中でも有名な話で、かれの保護を受けたいと願う信者はいまでも数多いという。

やがてアントニオはアウグスチノ修道会を離れて聖フランチェスコにつき、宣教師としてアフリカへ渡る。ほどなく病を得て帰国、それからはフランチェスコの信頼を追い風にしてその「弁舌の才」「驚くべき説教の力」⁴⁹⁾を存分に活かして教義の伝授、異端者の改心に尽くし、1231年6月13日に36歳の若さで昇天した。

キリスト教では信徒を示す象徴として「魚」が好んで描かれる。ミラノのサンタ・マリア・デッレ・グラツィエ教会の壁画、レオナルド・ダ・ビンチの名作「最後の晩餐」でイエスと十二使徒が喫しているのも魚料理である。だからボルゲーゼ美術館でティツィアーノの「聖愛と俗愛」(神聖な愛・異端の愛)とともに三島の「心を最も深くとらえた絵」、ヴェロネーゼの「聖アントニオ魚族(いろくず)に説く」の主題は、弁舌に長けた聖人アントニオが大勢の信徒を前に教義を説き、神の道を示そうという、説法者と聴聞者の喜びの瞬間をとらえた栄光にあると言える。「私の心を最も深くとらえた絵」このルネサンス絵画の凡作をさして三島はそう称えた。こういう読みはどうか。すなわち、この作、ティツィアーノの「聖愛と俗愛」(神聖な愛・異端の愛)とともに三島を感動させたこのヴェロネーゼの筆になる「聖アントニオ」の、魚ども=信徒を導かんとするイメージは、あの日、陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地のバルコニーで仁王立ちして陸自隊員らに道を説いた三島の姿そのものであると。それはあまりに突飛だろうか。

三島にはどこかに鑑賞者である自分自身の姿を投影し、そこに投影した「自分自身」に感動しているフシがある、と先に私は書いた。対象の中におのれの姿を探りあててその「自分」に恋をするといったところが。この画を見たとき三島は28歳、天皇と恋関し、自衛隊員に憲法改正を説きクーデターを唆すまでには、まだ十数年の時の隔たりはあった。三島の「日本回帰」はまだ先のことである。

だが三島には憧れがあった、上級生に言われるがままに煙草を吸い、「お稚児さん」呼ばわりをされてもそれに従ってしまう自分、人に従属してしまう自分ではなく、叶うならば心身の両面でもっと「雄々しい」自分でありたいといった憧れが。

さて三島は書いている。「ヴェロネーゼのこの絵は、画面の半分が茫漠たる神秘的な緑の海に覆われている。その構図はまことに闊達で聖人はじめ多くの人物は右半分、それも右下半分にまとめられており、魚たちを指さす聖者の指先が、漸く画面の中央に達している。聖者の胸に飾られた白い花は海風にそよいで、愛すべき抒情的な効果をあげている」⁵⁰⁾と。

この画に注がれた三島の憧れは、まだ作家自身それとは気づいていないある種の「原風景」=こうありたいと願うプロトイメージをなしたこと、この点についてはまず間違いないように思われる。

グイド・レーニの「聖セバスチャン殉教」図は同性愛をうかがわせる要素はない。表象的に見て決定的なのは、セバスチャンが鑑賞者の視線を外して「天」を見つめていること、これがすべてである。試みに、インターネットで「聖セバスチャン」の画像を検索してみても、グイド作を含むどのセバスチャンも(三島自身の写真も含めて)天を見つめている。このことによってセバスチャンの聖性を表現している。(ひとつだけ、イギリスのゲイ雑誌reFRESH誌の表紙だけは正面

の読者と目と目を合わせているが。) また作者のガイド・レーニは生涯にわたり妻帯しなかった。先のIndependent紙によると、ガイドは「婦人がモデルになると、とたんに「大理石と化した」」。そして「55歳になるまで母親と暮らし、母親が亡くなった後は女性を家へ上げることを断固として拒み、洗濯女が自分の洗濯物を触ることさえ許さなかった」という。⁵¹⁾ だが同紙は「同時代を生きたカラバジヨとは異なり、ガイドは同性愛者としての一面はなかったようだ」としている。だからここで改めて問わなくてはならないものは、聖セバスチャンのhomo-eroticな表象ではなく、むしろ「見られる・客体としての・男性像」というこの画が鑑賞者との間に切り結んでくるより本質的な意味合いの方なのだ。

17. 「見られる」作家

いわゆる「日本回帰」してから以降の三島は、何度となく、鑑賞者にみずからの肉体を「見せて」いる。ざっと振り返ってみると、1960年には増村保造監督の映画「からっ風野郎」でヤクザ役を演じ、1963年には写真集「薔薇刑」(撮影 細江英公)で被写体となる。

1966年には自作を映画化した短編映画「憂国」(監督 三島由紀夫)で主人公を演じ、1968年には篠山紀信を撮影者にしてみずから聖セバスチャンに扮して写真を撮らせている。

こうして見ると「見られる」三島にはどこか「こう見られたい」という願望があった、と思われる。だが、それ以上に、「自分」という具象を徐々に崩壊させて、より抽象的・象徴的、かつ「死」を経て「再生」へと向かう行程(コース)を意図的に選び取ろうとする、強い意思めいたものが感じられる。

これらの企画はそれぞれ個別に持ち上がったもので、演技者である三島の計略ではないだろう。だが、三島の盛名が上がるにつれてその発するイメージがやがて焦点を結び、三島というと「これ」といった一般意志が形作られたとは、言うて言えるかも知れない。

世の中からはぐれた一匹狼から肉体をとことん抽象化し・崩壊させた「薔薇刑」の自己像へ。2・26事件外伝とも言うべき自作映画「憂国」ではみずからの血と臓腑をさらし、そうかと思うと篠山紀信の写真では「殉教者」のイメージを身に纏う。その行程——「見られる」三島像の変遷——は身体の虚弱であるがゆえに旧陸軍に嫌われて、その結果として「死」と「生」が曖昧な存在論的苦悩を抱えやがて肉体の鍛錬へと向かった作家の道行きと、不思議と符合すると思えるのだ。三島にはおびただしい彫刻を崩壊させた「眷恋の地」ギリシアの「死体」の、その崩壊を孕んだ肉体を我が物にしたいという欲望があった。

18. 「薔薇刑」

写真集「薔薇刑」の企画が立ち上がったのは1961年のことだった。始まりは三島の側からのアプローチだった。舞踊家土方巽を撮影した写真集「おとこと女」を三島が気に入り、自身の評論集「美の襲撃」の口絵写真を依頼しようとしたのだ。細江英公と助手の森山大道が三島邸を訪れると、三島は果たして日光浴をしているところだった。慌てて服を着ようとする三島を抑えて、細江は傍にあった散水用のホースを持ってきてそれで三島をグルグル巻きにして、その揚げ句、何枚か撮った。

「一体これは何を意味してゐるんです」と三島が訊くと、細江はこう答えたと言う、
「偶像破壊ですね」

「へえ、そんなら、僕なんかやつつけたって仕様がなっちゃいますか。第一僕は偶像じゃないし、第二に、自分で自分をいつも破壊しようとしてゐる人間だ。」⁵²⁾ 三島は「それなら佐藤春夫にゴムホースを巻いたらいい」と笑ったそうだが、どのような時代がこれから始まろうとしているのかを窺わせるエピソードである。

そうして出来上がった写真集は、いまだに復刻版が発刊され、国内外で高く評価されている。装幀者も杉浦康平、横尾忠則、栗津潔と遷り、それぞれ高値で取引されている。それはもちろん細江英公の写真の力によるものであるが、「被寫體」となった三島の身体にへばりついた、東洋とも西洋ともつかない異教的・背徳的なイメージ、死の中に生があるかのような二律背反した存在感、背景にちりばめられたルネサンス絵画によるアンチモダンなムード、ロケ現場となった三島邸の疑似西洋的・疑似古典主義的な環境（装置性）……などが多重露出の効果と相まって、主題である「三島由紀夫」の怪異な面をぞんぶんに惹きだしたからだろう。主題は多層的だが、どの一枚を見ても「複雑な彼」三島の何ものかが浮かび上がってくる。

いま私の手元にある栗津潔装幀版「薔薇刑」の、細江英公による撮影ノートを読むと、「偶像破壊ですよ」と言った細江の受け答えはむしろ「思いつき」であったようだ。だがここから「破壊は創造につながる」といった着想が生まれ、三島の「好むモノはすべて撮影の対象とし写真の中に登場させ」という撮影プランが生まれる。「今まで全く知られない三島由紀夫像をほく（細江）なりの写真術で構築」という、「薔薇刑」の真の主題がこうして浮き上がってきた。つまりは存在を剔出するということだろうが、そこに出現したのが「存在」以上に崩壊の「匂い」であったのは、これまで論じてきた三島の「在り方」を写真という次元で証し立てているようで、なかなか面白い。

すでに示したように、三島は人生のある時期からおのれの姿を無数の目に晒し、「見られる」自己を表出することを繰り返してきた。おのれを大衆の目に晒してきた。それは何故か？ 三島を書く者として私なりの答をその間に与えるなら、三島はかれの恋したギリシア彫刻にならなかったのだ。太陽の光を一身に浴びてそこに甦っている美と再生の象徴に。

それをなぞりたかった。崩壊はしていても見事に再生している古代の彫刻の、その「輪廻転生」のメカニズムの中に自分という存在を位置づけたかったのだ。「見られる」ことによっていまに甦っているその再生の有り様を我が物にしたかったのだ。これが「見られる」ことを選んだ三島の心の中に根付いていた動機である。

「ローマ人の物語」で知られる作家の塩野七生はギリシア人やローマ人にとって「裸体」がどんな位置づけをされていたのかについて、こう書いている。「ちなみに、人間の見事な裸体くらい美しいものはないと信じていたギリシア人とローマ人は、これほどの価値は神にのみ捧げられるべきと考えていたので、彼らの神々は全員が裸体で表現されている。」⁵³⁾

いくつかの謎がこれで解ける。

「それゆえに」と続けて塩野はこう書いている、「死後に神格化された皇帝たちも、裸体で表現される。裸体姿の皇帝像があれば、それはその人の死後につくられたということだ。生きている人は、必ず着衣姿で表現されるのだ」⁵⁴⁾

多くの人が、特に後期の三島について思うとき、そのイメージはかれの「裸体」であるだろう。そのことを当の三島が意識していたかは問題ではない。理解や認識とは多くは連想によるのだ。いま手元の「薔薇刑」をパラパラ繰ってみると、そこに撮られている三島の写真は、（禪姿を別にすれば）二枚を除いてすべて全裸である。

写真を撮るにあたって、

細江「では多くの勝手に撮ればいいのですね」

三島「ぼくはあなたの被写体になるから、好きなように撮って下さい」

というやり取りがあったというから、これはすべて細江の演出であった。そして「裸体」は、塩野七生の説明の通りだとすれば、「死」を意味している。この「薔薇刑」が企画されたその時点で、三島の裡にあった「欲動」は、これまで書いてきた通り「死」を欲しつつ「再生」したい、「死」と「生」を往還したいというものだった。その三島の存在論的な理想我 ego ideal, すなわち他者によって「見られた」三島の自己イメージを細江が正しく捉えていたことが、ここからも理解しうる。

三島を見る細江の眼は確かだったと言うべきだろう。

右に書いた事情は、どうも1968年に篠山紀信が撮った「聖セバスチャン殉教」では一転したようだ。誰をモデルにするか「僕にはせいぜい拒否権があるくらい」と篠山紀信は言っている。そして、篠山紀信の写真展を開催した横浜美術館の学芸員はこう付け加えた。三島版「聖セバスチャン殉教」の撮影は写真家の「意のままにならなかった度合が最も高い写真」⁵⁵⁾であった、と。裏を返せば三島の意が最も反映されたのが、この「聖セバスチャン殉教」であったとも言える。

「薔薇刑」が撮影されたのは、細江の撮影ノートや既出の「三島由紀夫「日録」」,「決定版三島由紀夫全集 42 年譜・書誌」によると1963年9月6日頃のこと。当時三島は、東京都知事選を扱った「宴のあと」裁判が係争中であったものの、妻帯し(1958.6)、白亜の自邸も完成し(1959.5)、子供を授かり(1959.6)と、落ち着いた時機にあった。1961年の4月には剣道初段となり、すでに肉体の鍛錬に取りかかっていたが。

一方、篠山撮影「聖セバスチャン殉教」の時、三島は激動の季節を迎えていた。

「決定版三島由紀夫全集 42」等から、以下、このあたりの動きを追ってみると――

やがて「楯の会」の参謀となる山本舜勝とはすでに前年の1967年末に面識を得ている。翌68年1月には「祖国防衛はなぜ必要か?」を発表(タイプ印刷によるパンフレット)、2月25日には右派機関誌(論争ジャーナル)事務所(銀座・小鍛冶ビル育成社内)で民族派学生十数名を集めて血盟状を作成(後、焼却)。3月1日には陸上自衛隊富士学校滝ヶ原分屯地で、いよいよと言うべきだろう、一ヶ月におよぶ第1回目の体験入隊を果たす。

4月上旬には祖国防衛隊の制服が完成、5月5日には「文化防衛論」を脱稿。

民族派学生組織である日本学生同盟(日学同)とも活発に交流しているが、既出の山本舜勝との関わりに関しては、ここで改めて特筆しておかなければならない。

陸上自衛隊北部方面総監部第二部長(一等陸佐)、統合幕僚会議第二幕僚室班長を経て、当時、陸上自衛隊調査学校情報教育課長を務めていた山本は三島らが体験入隊中の3月には富士学校を訪れ、5月末には東京・目黒区の旅館、市ヶ谷某所とところを変えて三島および祖国防衛隊の中核要員を前に集中講義を行った。テーマは北朝鮮工作員の遺体が秋田県能代市の浜に漂着した能代事件と、潜入、情報連絡等の座学であったが、やがて張り込み・尾行・変装等徐々に実践形式へと移っていった。

祖国防衛隊の資金集めのため、日経連の理事らと面談を重ねたのも、この頃のこと。六本木の防衛庁周辺で街頭訓練を繰り返すなど、その姿は、外遊し、太陽を浴び、絵画や彫刻を愛でていた三島とは一変していた。

自我がそれだけ嵩じてきたということだろう。

三島の日常は、その日を期して、あたかも目的から逆算するような緻密さを示すようにな

る。6月には付き合いの深かった出版社が事実上倒産、代理人を通して債権の即刻支払いを三島は求めるが、それも資金繰りを思っただけのことだった。

後年市ヶ谷でともに自刃することになる青年とは、すでに67年6月には面識があったが、68年6月にこの青年を初代議長に結成された全日本国防会議の結成大会で、三島は万歳三唱をしている。

翌7月〈中央公論〉に「文化防衛論」を掲載。陸上自衛隊への第2回体験入隊は7月25日から8月23日まで。この間、8月11日には剣道五段の試験に合格した。(但し、登録はしなかった。)

10月5日には祖国防衛隊を改めて「楯の会」を正式に結成。そして2週間後の10月21日に、あの国際反戦デーがやって来る。激しいデモが各所で暴発し、左派学生らによる熱波がそこかしこで疾走した所謂「新宿騒乱」が。その同じ夜、六本木の小料理屋で澁澤龍彦主宰の雑誌「血と薔薇」の打ち合わせ。

その巻頭グラビア写真、写真家に篠山紀信を得ての「聖セバスチャン殉教」は、こうした文脈の中で撮影されたのである。

このことは記憶されなければならない。「仮面の告白」で三島(13歳の平岡公威)がこれを見て自決したというグイド・レーニ作「聖セバスティアンの殉教」図は、これは三島の中では「エロス」そのものだったが、三島の精神はその後拡張を続け、「アポロの杯」にあってはギリシアからローマへ至る美の理想、すなわちいったんは崩壊しその後「再生」した、「死」を孕んだ「生」の一典型へと変容したこと、そして篠山紀信撮影「聖セバスチャン殉教」ではその裸体がより意味を増したことによって、より深い色合いで、「死」の象徴と化していること、これである。

1938年から1952年へ、そして1968年へと「聖セバスチャン殉教」は変化し成長し、ついには「エロス=生」から「死」へとその意味を転化させた。

三島は覚悟を決めていた。

19. 周遊の果て

5月5日になった。どこか憂いの色を滲ませながら旅はその扉を閉ざしつつあった。早起きした三島は、コンセルヴァトリー宮殿(カピトリノー美術館別棟)で「グイド・レーニ」の「聖セバスチャン」と対面し、キャピトール(カピトリノー)美術館では「埃及のスカラベサクのレリーフ」「カピトールのヴィーナス」「クビードとプシケ」にうっとりし、バラツツオ・ヴェネツィアでは空っぽの部屋を縫うようにして置かれたジョヴァンニ・ベリーニの「小さな愛すべき肖像画」やフィリッポ・リッピ、ニコラ・デ・バルバーリなどを愛で、レリオ・オルシ Lelio Orsi の「ピエタ」(写真15)に感動した。

「その筆触はドラクロアを思わせ、構図はきわめて緊密で、しかも情熱的である」と三島は書いている。

「この美術館には盗んでいってもわかるまいと思われる小さな愛すべき絵がいくつあって、Procacciniの竜退治の小品などは、少しばかり私の盗心を誘った」。柔らかい足取りながら、ゆるやかに、三島の精神は上昇していた。

前日のことだが三島はヴァチカン美術館を訪ない、二つのアンティノウス像(写真16)に「魅せられ」た。ローマ皇帝ハドリアヌスの愛人として知られるアンティノウスは、ナイル川で18歳の若さで溺死した夭折の人。

小アジア、ビテュニア(今のトルコ)の生まれで、ハドリアヌスの愛人となっただけの若者が、皇帝に深く愛され、その死は皇帝によってひどく嘆かれたという。この若者が



写真 15 レリオ・オルシ「ピエタ」



写真 16 アンティノウス像、ヴァチカン美術館

「神にまで陸（のぼ）った」のは「智力のためでも才能のためでもなく、ただ儻（たぐ）いない外面の美しさのため」と三島は書いている。「彼はこの移ろいやすいものを損なうことなく、自殺とも過失ともつかぬふしぎな動機によって、ナイルに溺れるにいたる」⁵⁶⁾

詩劇「鷺ノ座」——近代能楽集ノ内——と短編小説「アンティノウス」で三島はこのアンティノウスを悼み、物語にした。どちらも未完に終わるが、その内容は作家の精神の一端に触れて読む者の興を引く。そのことについて、かいつまんで言うと——

愛人アンティノウスの霊にその溺死の理由をたずねようと執拗に問いかけるハドリアヌス帝だが、死せるアンティノウスはただ「わかりません」と言うばかり、その死から13年、帝の心を慰めようと、大臣が5人の巫女を前にしてその時のことを口にする。ハドリアヌスを乗せた船が「シキリアをかたえに見て、さらに東へ進むにつれ」帝は「悲しい思い出」に浸りながら「じっと東のかた、埃及の空を眺め」やる。ナイルの上には「烈しい日」、するとひとりの巫女の歌う声が聞こえてくる、「太陽の喪は悲しみを不朽にします」

そして三島はこんな結句を与えてこのエピソードを締めくくるのである、「われわれの生に理由がないのに、死にどうして理由があるか」⁵⁷⁾と。

1952年5月4日になっていた。前年のクリスマスに横浜を出た世界周遊旅行は、暗い冬から陽の光の落下する初夏の彩りを加えていた。

「一説には厭世自殺ともいわれているその死を思うと、私には目前の彫像の、かくも若々しく、かくも完全で、かくも香わしく、かくも健やかな肉体のどこかに、云いがたい暗い思想がひそむにいたった経路を、医師のような情熱を以て想像せずにはいられない」と、アンティノウスの死を跡づけた三島の心の綾は、旅の最中もかれを捉えていた精神の淵を語って、味読に値するだろう。「ともするとその少年の容貌と肉体が日光のように輝かしかつたので、それだけ濃い影が踵に添うて従っただけのことかもしれない。」⁵⁸⁾

2日後、ローマの五つ星、エデン・ホテルからヴァチカン美術館への道を征きながら、仄暗い高ぶりに身を任せていた。翌日には帰国の途につく。もう逢う機会もしばらくはないだろうと思うと、その前に、もう一度、見ておきたかったのだ。別れを告げたかった。おとといと同じくロトンダ（サンピエトロ大聖堂か）を指してきびきびと歩き、その胸像の前にたどり着いて、じっと佇むと、すぐ傍らに巨きな立像（写真17）が立ちつくすのに気がついた。その巨きな「立像のほうはあまりに神格化され」ていた。小さな胸像を魅力あるものにする、あの初々しさに欠けていた。だから、巨大な立像には、アンティノウスらしさが目立たなかったのだろう。三島はどうやらアンティノウスに心を奪われていた。

「アンティノウスの像には、必ず青春の憂鬱がひそんでおり、その眉のあいだには必ず不吉の翳がある。それはあの物語によって、われわれがわれわれ自身の感情を移入して、これらを見るためばかりではない。これらの作品が、よしアンティノウスの生前に作られたものであったとしても、すぐれた芸術家が、どうして対象の運命を予感しなかった筈がある」⁵⁹⁾

「私は旧弊な老人が写真をとられるのをいやがる気持がわかるような気がする」と、続けて三島は書いている。

「その生前にすぐれた彫像が作られる。するとその人の何ものかはその時に終ってしまうのだ。その死後にすぐれた彫像が作られる。するとその人の生涯はこれに委ねられ、この上に移り住み、これによって永遠の縛しめをうけるのだ。」（傍点引用者）

永遠、と三島は書いている。アテネを見、デルフィの丘を上り、ローマに足を踏み入れて古の美にみずからを移入しながら、三島の心は、死と生を往還しつつもその先にある「永遠の縛め」



写真 17 アンティノウス立像、ヴァチカン美術館

を観取するようになっていた。「われわれの苦悩は必ず時によって解決され、もし時間が解決せぬときは、死が解決してくれるのである。」⁶⁰⁾

20. 旅の重さ

流行作家として明るい未来が待っていた。いや、もう栄光はすでにその掌の中にあった。しかし、何をその網膜に焼きつけようとも、その目には、まるで鱗われた鏡に映る自己像のように対象の側面がふたつに割れて映るのだ。三島を特徴づける、ある傾きが。……

「ニヒリズム」と三島はそれを呼んだ。冷笑的とみずから思っていたのだろうか。「希臘人は生のおびただしい畏怖のために蒼ざめた石、あの蒼白の大理石を刻んで、多くの彫像を作りだし、これによってかれらを生のおそるべき苦痛から解放した。あるいは厳格な法則に従った韻文劇を、

かれらの言葉の中から刻み出し、それによって人々の潜在的な苦悩や苦痛を解放した。」そうギリシア劇を定義しながらこの言葉を継いだ、「それらはいわば時間や死による解決の模倣である」と。「彫刻は一瞬の姿態を永遠の時間にまで及ぼし、悲劇は颯り殺しのような永い人生の解決の時間を、わずか二十四時間に圧縮したのである。」⁶¹⁾

サンフランシスコへ向かうウィルソン大統領の甲板上で、三島は日系の婦人に冷めた目を向けた。一度は覚悟を決めていた。自刃する羽目に陥ったらみずから首を括ろうと思いつめていた。だが気がついてみるとアメリカ兵のオンリーとなって、米本土でテレビ付の家に暮らしている。その身の上に冷めた目を向けた三島の強ばりは、ひとまず溶けた。三島は、ひとまず、「開かれた」。……

しかし「希臘人の考えたのは、精神的救済ではなかった」と三島は書いている。それはかれらの「運命」であると。「かれらの彫像が自然の諸力を模したように、かれらの救済も自然の機構を模し、それを「運命」と呼びなした。しかしこうした救済と解放は、基督教がその欠陥を補うためにのちにその地位にとって代わったように、われわれを生から生へ、生の深い淵から生の明るい外面へ救うにすぎない。生は永遠にくりかえされ、死後もわれわれはその生を罷めることができないのである。」⁶²⁾そして希臘の彫刻群を見るわれわれの目に映っているのは「解放による縛しめ、自由による運命、生の果てしない絆によって縛られている」その様なのだ、と。

「彫像が作られたとき、何ものかが終る。そうだ、たしかに何ものかが終るのだ。一刻一刻がわれらの人生の終末の時刻であり、死もその単なる一点にすぎぬとすれば、われわれはいつか終るべきものを現前に終らせ、一旦終ったものをまた別の一点からはじめることができる」⁶³⁾

はじめることができる、と三島は書いている。

「希臘彫刻はそれを企てた。そしてこの永遠の「生」の持続の模倣が、あのように優れた作品の数々を生みだした。」⁶⁴⁾

旅は旅人を拉し去った。森の中から連れてこられたサテュロスは、ミダス王にこう言ったという。

生まれざりしならば最も善し。

次善はただちに死へ赴くことぞ。⁶⁵⁾

注

- 1) 三島由紀夫「アポロの杯」(新潮文庫) 108.
- 2) 同書, 108-109.
- 3) 同書, 109.
- 4) 東京国際大学論叢, 人間科学・複合領域研究, 第2号「太陽に乾杯」三島由紀夫の生の「欲動」を参照のこと.
- 5) 前掲書, 109.
- 6) 前掲論文参照のこと.
- 7) 三島自身, 後年, 雑誌「血と薔薇」創刊号 27頁で, 日本人の「二元論的思考の薄弱」について述べている.
- 8) 三島由紀夫「アポロの杯」110.
- 9) 三島由紀夫「師・清水文雄への手紙」(新潮社) 127.
- 10) 三島由紀夫「アポロの杯」110.
- 11) 同書, 111.
- 12) 同書, 112.
- 13) 同書, 115.
- 14) 同書, 117.

- 15) 同書, 119.
 - 16) 同書, 119.
 - 17) 同書, 121.
 - 18) 同書, 121.
 - 19) 同書, 127.
 - 20) 同書, 125.
 - 21) 同書, 126.
 - 22) 同書, 129.
 - 23) 同書, 129.
 - 24) 宮下規久朗, 井上隆史「三島由紀夫の愛した美術」(新潮社) 26.
 - 25) 宮下, 井上, 前掲書, 26.
 - 26) 三島, 前掲書, 129.
 - 27) 同書, 129-130.
 - 28) 宮下, 井上, 前掲書, 29.
 - 29) 三島, 前掲書, 130.
 - 30) 山本舜勝「自衛隊「影の部隊」・三島由紀夫を殺した真実の告白」(講談社) 18.
 - 31) 三島, 前掲書, 131.
 - 32) 同書, 131.
 - 33) 三島由紀夫, 「仮面の告白」新潮社版三島由紀夫全集1, 202-203.
 - 34) 三島, 前掲書, 140-141.
 - 35) <https://www.britannica.com/biography/Guido-Reni>
 - 36) 三島, 「仮面の告白」(新潮文庫) 35-36.
 - 37) 同書, 36.
 - 38) 以下, ブリタニカの該当箇所を引用すると, The mood of his paintings is calm and serene, as are the studied softness of colour and form. His religious compositions made him one of the most famous painters of his day in Europe, and a model for other Italian Baroque artists.
 - 39) ガブリエレ・ダンヌンツィオ, 三島由紀夫・池田弘太郎訳「聖セバスチャンの殉教」(国書刊行会) 321.
 - 40) 同書, 322.
 - 41) 同書, 324.
 - 42) Kindle版 “Master in Art: A Series of Illustrated Monographs Guido Reni” 490. 尚, 日本語訳は著者による。この記述によると, ディオクレティアヌス帝の近衛隊長セバスチャンは, キリスト教徒であることが露見し, 首都ローマで撲殺された。帝の即位4年目, 西暦288年のことである。このセバスチャンが「実在したかは, はなはだ疑わしい」と三島は書くが, 一方, 殉教者は存在したとの説も根強い。どちらが真実か。その裏付けとなる記述が, 塩野七生「ローマ人の物語最後の努力 [上]」にある。それによると「ディオクレティアヌス帝は, 即位から実に十九年もの間, 皇帝でありながら帝国の首都のローマを訪れていない」と。「転戦したりして, 忙しかったのは確かだ。しかし, ミラノへは行っていながら, エミーリア街道を通りフラミア街道を行くだけで着ける, ローマには足を向けなかった。」(新潮文庫版同書 106頁) ——セバスチャンを首都で断罪したはずのディオクレティアヌス帝は, この時機, ローマにはいなかった。
- また2017年9月に筆者がディオクレティアヌスの浴場跡(ローマ国立博物館別館)で入手した‘Chronicle of The Roman Emperors The Reign-by-Reign Record of The Rulers of Imperial Rome (Thames & Hudson)’には, “He (Diocletian) had been in Rome in November 303 for a grand triumphal celebration and other festivities marking the beginning of his 20th year of rule.”とあり, 即位20年目に首都にあったことが示されているが, これ以前, ローマを訪れたとの記述はない。
- 帝は即位後ほどなくキリスト教徒の迫害に乗りだした。架空のセバスチャンは, その最初期の犠牲者として, 迫害の苛烈さを強調するために, 教会によって聖列された。——右の記述はそのことを証立している。

- 43) 同書, 490.
- 44) <http://www.independent.co.uk/arts-entertainment/art/features/arrows-of-desire-how-did-st-sebastian-become-an-enduring-homo-erotic-icon-779388.html>
- 45) <https://www.museodelprado.es/en/the-collection/art-work/saint-sebastian/d98d334e-a7f4-44eb-9d7c-7cfc689a6d5b>
- 46) 中森義宗訳編「キリスト教図像辞典」(近藤出版社) 133.
- 47) 三島由紀夫「煙草」『真夏の死』(新潮文庫) 16.
- 48) 三島由紀夫「アポロの杯」126.
- 49) 中森訳編, 前掲書, 120.
- 50) 三島, 前掲書, 129.
- 51) 以下, 該当箇所を英文を示すと, According to his biographer, Carlo Cesare Malvasia, Reni “turned to marble” in the presence of female models and lived with his mother until he was 55. After her death, he refused to have women in his house or to let a women’s laundry touch his own. Unlike his contemporary, *cara aggio*, he seems to have had no gay life either.
- 52) <https://ja.wikipedia.org/wiki/薔薇刑>
- 53) 塩野七生「ローマ人の物語迷走する帝国」(新潮文庫) 112.
- 54) 同書, 112.
- 55) <http://yokohama.art.museum/blog/2017/02/-vol6.html>
- 56) 三島「アポロの杯」136-137.
- 57) 同書, 137.
- 58) 同書, 137.
- 59) 同書, 144.
- 60) 同書, 144.
- 61) 同書, 144-145.
- 62) 同書, 145.
- 63) 同書, 145.
- 64) 同書, 145.
- 65) 同書, 146.

引用文献・参考文献一覧

引用文献 (引用順)

- 三島由紀夫「アポロの杯」(新潮文庫, 昭和57年).
- 三島由紀夫「師・清水文雄への手紙」(新潮社, 2003年).
- 宮下喜久朗, 井上隆史「三島由紀夫の愛した美術」(新潮社, 2010年).
- 山本舜勝「自衛隊「影の部隊」・三島由紀夫を殺した史実の告白」(講談社, 2001年).
- 三島由紀夫「仮面の告白」新潮社版三島由紀夫全集1, (新潮社, 1973年).
- 三島由紀夫「仮面の告白」新潮文庫, (新潮社, 1976年).
- ガブリエレ・ダンヌンツィオ 三島由紀夫・池田弘太郎訳「聖セバスチアンの殉教」(国書刊行会, 1988年).
- Master in Art: A Series of Illustrated Monographs Guido Reni (Kindle版).
- 中森義宗訳編「キリスト教図像辞典」(近藤出版社, 1970年).
- 三島由紀夫「煙草」『真夏の死』(新潮文庫, 1970年).
- 塩野七生「ローマ人の物語迷走する帝国」(新潮文庫, 2003年).

参考文献 (あいうえお順)

- いいだ・もも「三島由紀夫 その死とその世界」都市出版社, 1970年.
- 石原慎太郎「石原慎太郎対話集 酒盃と真剣」参玄社, 1973年.
- 石原慎太郎「三島由紀夫の日蝕」新潮社, 1991年.

- 猪瀬直樹「ペルソナ 三島由紀夫伝」文藝春秋, 1995年.
- 大谷敬二郎「二・二六事件 流血の四日間」図書出版, 1973年.
- 加藤周一他「日本人の死生観」上下 岩波新書, 1977年.
- 梶谷哲男「パトグラフィ双書⑦三島由紀夫 芸術と病理」金剛出版新社, 昭和46年.
- 軽部茂則「インパール ある従軍医の手記」徳間書店, 1979年.
- 佐渡谷重信「三島由紀夫における西洋」東京書籍, 昭和56年.
- 司馬遼太郎「世に棲む日々」文春文庫, 2003年.
- 澁澤龍彦「三島由紀夫おぼえがき」中公文庫, 1986年.
- 水津謙二「三島由紀夫の悲劇 病跡学的考察」都市出版社, 1971年.
- 杉原祐介・剛介「三島由紀夫と自衛隊 秘められた友情と信頼」並木書房, 1997年.
- 杉山隆男「兵士に告ぐ」小学館文庫, 2014年.
- 杉山隆男「兵士に聞け」新潮文庫, 2013年.
- 杉山隆男「『兵士』になれなかった三島由紀夫」小学館文庫, 2010年.
- 鈴木亜繪美「火群のゆくへ 元楯の会会員たちの心の軌跡」田村 司監修, 柏艸舎, 2005年.
- 戦時下の小田原地方を記録する会編「市民が語る小田原地方の戦争」, 2000年.
- 徳岡孝夫「五衰の人 三島由紀夫私記」文春文庫, 2015年.
- 中村彰彦「烈士と呼ばれる男」文藝春秋, 2003年.
- 日本学生新聞社編, 「回想の三島由紀夫」行政通信社, 1971年.
- 野坂昭如「赫奕たる逆光」文藝春秋, 昭和62年.
- 林 房雄, 三島由紀夫「対話・日本人論」夏目書房, 1966年.
- 福島次郎「三島由紀夫——剣と寒紅」文藝春秋, 平成10年.
- 藤井治夫「自衛隊クーデター戦略」三一書房, 1974年.
- 松本清張「昭和史発掘 9」文藝春秋, 1978年.
- 松本 徹編著「年表作家読本 三島由紀夫」河出書房新社, 1990年.
- 松藤竹二郎「三島由紀夫 残された手帳」毎日ワンス, 2007年.
- 持丸 博, 佐藤松男「三島由紀夫・福田恒存 たった一度の対決」文藝春秋, 2010年.
- 三島由紀夫, 東大全学共闘会議駒場共闘焚祭委員会(代表 木村 修)「討論三島由紀夫 VS. 全共闘〈美と共同体と東大闘争〉」新潮社, 1969年.
- 三島由紀夫「真夏の死——自選短編集——」新潮文庫, 昭和45年.
- 三島由紀夫「若きサムライのために」日本教文社, 1969年.
- 三島由紀夫「三島由紀夫語録」鷹書房, 1975年.
- 三島由紀夫「金閣寺」新潮文庫, 2003年.
- 三島由紀夫「荒野より」中央公論社, 昭和42年.
- 三島由紀夫「癡王のテラス」中央公論社, 1969年.
- 宮崎正弘「三島由紀夫『以後』」並木書房, 1999年.
- 宮崎正弘「三島由紀夫の現場」並木書房, 2006年.
- 村上建夫「君たちには分からない 『楯の会』で見た三島由紀夫」新潮社, 2011年.
- 山崎正夫「三島由紀夫における男色と天皇制」グラフィック社, 1978年.
- 山本舜勝「自衛隊『影の部隊』——三島由紀夫を殺した真実の告白」講談社, 2001年.
- ラディゲ, レイモン「ドルジェル伯の舞踏会・肉体の悪魔」江口 清訳, 三笠文庫, 1952年.
- 「三島由紀夫研究③三島由紀夫・仮面の告白」鼎書房, 2006年.
- 「三島由紀夫研究⑥三島由紀夫・金閣寺」鼎書房, 2008年.

* 発行年は, 引用文献・参考文献とも, 奥付の表記をそのまま使用した.

執筆 者 紹 介 (掲 載 順)

河 村 一 樹	商 学 部	教 授	情 報 教 育 工 学
張 本 浩	商 学 部	教 授	管 理 工 学
安 岡 真	人 間 社 会 学 部	准 教 授	日 本 文 学, ヨーロッパ語系文学

編 集 後 記

『東京国際大学論叢 人間科学・複合領域研究』（Journal of Interdisciplinary Studies: JIS, Tokyo International University）Vol. 3 をお届けします。

この2月に韓国の平昌で冬季オリンピック・パラリンピックが開かれました。全ての選手が金メダルを目指して日々の努力を積み重ね、試合に臨んでいます。その努力が分かるからこそ、勝負に負けた選手にも惜しみない拍手が送られます。スピードスケート女子500mの試合後に、金メダルを取った小平奈緒選手が銀メダルに終わり泣き崩れる韓国の李選手を抱き寄せるシーンは、私たちの胸を熱くしました。世界のトップで競い合うライバルである2人は、また互いの努力を知り、尊敬し合う関係であるそうです。

さて、試合が競技者にとって日々の努力の成果を発表する場であるとするれば、論叢は研究者にとって積み重ねた研鑽の成果を発表する場です。本学の論叢は学術研究活動の成果を「学術論文」、「研究ノート」、「調査研究」、「資料（史料）紹介」、「判例研究」、「翻訳」、「書評」、「その他」の8種類に分け、それを編集し発刊しております。どれも、投稿した研究者による日々の努力の賜です。人間科学・複合領域 Vol. 3 には「研究ノート」3編が掲載されました。投稿された原稿は全て力作であり、それぞれの専門分野の先生方から高い評価を得ることが期待されます。是非、ご一読いただき、ご自身あるいはご指導されている論文や報告書への引用・参考文献として、各分野への活用を図って頂ければと存じます。

東京オリンピックは2年後（2020年）です。論叢は、また1年後に研究者の努力の成果をお届けします。どちらもご期待下さい。

（『人間科学・複合領域研究』編集委員 碓井外幸、布川清彦）

東京国際大学論叢 人間科学・複合領域研究 第3号 2018(平成30)年3月20日発行
[非 売 品]

編 集 者	東京国際大学人間科学・複合領域研究論叢編集委員 碓井外幸 東京国際大学人間科学・複合領域研究論叢編集委員 布川清彦
発 行 者	高 橋 宏
発 行 所	〒350-1197 埼玉県川越市の場北1-13-1 TEL (049) 232-1111 FAX (049) 232-4829
印 刷 所	株式会社 東 京 プ レ ス 〒161-0033 東京都新宿区下落合3-12-18 3F

THE JOURNAL OF TOKYO INTERNATIONAL UNIVERSITY

Interdisciplinary Studies

No. 3

Research Note

The Attempt of Rubric Evaluation by Using Moodle

— Practice for Exercises in a First-year University Seminar — KAWAMURA, Kazuki

Construction of a Scheme & a Java Application

for Confirmation of Graduate Requirements HARIMOTO, Hiroshi

To Rome—Iconography of “St. Sebastian”: A Study of the

Pshychological Mechanism of the Mishima Incident ③ YASUOKA, Makoto

2 0 1 8